

《論 説》

民法と法律家の系譜 (1)

小 野 秀 誠

- I はじめに
- II 著名な書誌とその著者
- III 大学史、社史、各国史などに特化した研究
- IV 自伝、祝賀論文集、顕彰文、追悼文、女性法律家など
- V 書誌の補遺（以上、本号）
- VI 19世紀以降の基本文献（古典ローマ法、普通法、自然法、ライン・フランス法、ラント法、ALR、ABGB、BGB）と学派
- VII むすび

I はじめに

1 序

(1) 本稿は、法律家の経歴や業績を調べる上で有用となる文献（おもにドイツ）に着目して、その著者を検討するものである。すなわち、法学史上の書誌や基本文献の解題と、関連する法律家の検討である。実定法および法史の上では、種々の法学者の詳細や相互の関係に立ち入ることが、その思想や思想的背景、思潮の変化や交流などを知る上で重要な課題となる。法学史上の書誌は、そのための手段となるが、その位置づけや解題は、従来必ずしも十分なものではなかった。

法律家の辞典や評伝では、法制史上の著名人のみが対象となる。法学上の大思想家として、グロチウスやプーフェンドルフ、ドイツでは、サヴィニーやギー

ルケ、フランスでは、ポティエなどが対象となる。しかし、それ以外の者については、実定法上の重要概念の発見者であっても、対象となることは稀である。たとえば、キップやゼッケル、シュタムラー、ヘックなどである。法概念の方は有名でも、人物としての実態は、あまり知られていないことが多い。解釈学には、多数の理論が登場するが、従来、解釈学者については、理論を探求しても、人の属性を問わないのがつねであった。そこで、属性が問われるのは、ごく一部の有名人に限られた。また、法の歴史が長いことから、対象とするべき人物も多彩であり、多人数となる。時代的にも、かなり差がみられる。法律家相互の関係も、従来あまり検討されていない。

中世の法律家を調べるには、てっとり早い文献としては、Savigny, *Geschichte des römischen Rechts im Mittelalter*, 1833 (Neud.1961) があり、そこに、かなりの人物が網羅されている。また、ユダヤ系法学者については、早くに Hugo Sinzheimer, *Jüdische Klassiker der deutschen Rechtswissenschaft*, 1937 (Neud.1953) の文献がある。同じく、ユダヤ系法学者に関しては、その後、後述II 10 の文献 (Heinrichs, Franzki, Schmalz, Stolleis, *Deutscher Juristen jüdischer Herkunft*, 1993) があることから、これらについては、別にふれる (また、II 7 (4)。Savignyは著名なので除外)。

近世の著名な法学者に対する簡単な言及は、Wieacker, *Privatrechtsgeschichte der Neuzeit*, 1964にもあり、とくに、これに関しては、鈴木禄弥訳・ヴィアッカー・近世私法史 (1961年、XXXVIIの人名索引) は、原著以上の補完をして、多数の人名についてふれているが、その記述は最低限の量に限定されている。ヴィアッカーには、小冊子の *Gründer und Bewahrer, Rechtslehrer der neueren deutschen Privatrechtsgeschichte*, 1959もある。後者では、Johann Apels, Savigny, Grimm兄弟、Johann Jacob Bachofen, Windscheid, Jhering, Gerhard von Beseler, Andreas Bertalan Schwarz などが扱われている。各国にはそれぞれ特徴があることから、本稿では、ドイツの法律家が中心となる。

(2) 従来、多くの書誌と一般的な研究書はあるが、対象が著名人に限定されているとの限界はつねに付きまとっている。そして、著名人はおおむね重複している。すべての人物を検討することはできないから、より包括的な検討のた

めの代替となる手段が必要である。本稿は、そのための若干の書誌や基本文献の解題を通じて、書誌の作成者自体の人物と業績を検討するものである。学派に立ち入ることもある。人物の検討は、その業績や時代背景、関連人物を明らかにする方途ともなる。また、本稿を手がかりにして、必要な人物の詳細と業績にたどりつくことが可能となろう。なお、参考とすべき書誌が多いことから、本稿の対象とするものは、ごく一部をカバーするにすぎない。

おもに対象とするのは、「民法」の法律家、法学者であるが、その意味はやや広い。ドイツの国家試験を例にとると、その対象である「民法」は、公法に対応する民事系科目という意味を含んでいる。人物について、厳密な区分は不可能である。とくに欧米の学者は、複数の（かなり異なる領域の）専門領域をもつことが通常であるから、その意味でも、多様な法律家が対象となる。教授資格・ハビリタチオンを取得する場合にも、3科目ほどになるのが通常である。ハビリタチオンで専門が複数になるのは、現実的な理由としては就職対策であるが、より伝統的な意味では、民法（*corpus iuris civilis*）は、カノン法（*corpus iuris canonici*）に対するローマ法・皇帝法を意味し、法律学の諸領域は、すべてそこから発生したのである。

2 若干の人名辞典

(1) 人名辞典（Biographie）で、もっとも包括的で膨大なものは、ADB（Allgemeine Deutsche Biographie），durch die Historische Commission bei der Königlichen Akademie der Wissenschaften, 56 Bde., 1875-1912（Neud.1967）であり、1899年までのおよそ2万6000人の人名辞典である。1～45巻が本巻で、46～55巻は補巻である。56巻は索引である。対象には、学者のほか、政治家や著名人はすべて網羅されているから、法律家に限定されるわけではない。王侯貴族や政治家も対象であり、むしろ一般的にはその分野の方が詳しい。また、執筆者によって、記載された時期によっても、かなり記述の方法の異なる点が問題である。さらに、やや古くなっており、人物評価や方法などには、現在のものとはかなりの差がある場合もある。

その新版といえるものが、NDB（Neue Deutsche Biographie），hrsg.von der

Historischen Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaften であるが、いまだに未完である(1953年から開始。2021年6月に27巻まで(Vockerodt-Wettiner)。2万3000人が対象となっている。2023年に、最後の28巻が予定されている)。著名人は、ADBとNDBの双方に掲載されている。各項目の著者も異なり、半世紀以上(ときに1世紀以上)の研究の差が反映されていることから、内容には、かなりの相違がある。いずれもオンライン化されており、オンライン化当初は、時間的な使用の制限、欠落や制約が多かったが、近時では、ほとんど制約なく利用できるようになってきている。その他の古い事典や辞典にもオンライン化され、パブリック・ドメイン化されているものも多い。歴史的な価値のあるものは、ほとんどといってもよい。

(2) 一般の図書館にも常備されているものとしては、Die grossen Deutschen, Deutsche Biographie (hrsg.Heimpel, Heuss, Reifenberg), Bd.1-5 (1966)がある(Die grossen Deutschen unserer Epoche, 1995, hrsg. Lothar Gall)。これは、一般的な著名人の評伝であり、法律家に特化しているものではない。王侯、文学者などと並んで、たとえば、Pufendorff, Lorenz von Stein, Rudolf von Jheringなどの著名な法学者についても記載がある。5巻本にすぎないから、対象となる人物の数は限られる。

各国別のものは、列挙にいとまがないが、近接するものとしてオーストリアの人名辞典として、(hrsg.Österreichischen Akademie der Wissenschaften unter der Leitung von Leo Santifaller, bearb. von Eva Obermayer-Marnach), Österreichisches Biographisches Lexikon 1815-1950, 1993がある。Bd.1 (A-Glä) ~ Bd.15 (Tumlirz Karl-Warchalowski August)である¹⁾。

1) 本稿で、このような執筆の方法論的素描をするのは、2004年の、いわゆるロースクールの設置後、実定法関係の研究者の志望者が激減したことによる。仕事が増加し、周辺領域に目を向ける余裕もなくなった。研究方法は、人的なもので継続する必要があるが、人的資源が失われた結果、研究の継続性が確保されないおそれがある。将来のために、基本素材を明確化しておくことが必要と思われる。現在でこそ、日本の大学院は、中国などの留学生を多数受入れているが、このまま研究を軽視し人材養成が行われなければ、将来は、遣唐使のように留学の逆流が生じることになる

各国別のものは多岐にわたるので、おおむね省略し、American National Biography, (American Council of Learned Societies), ed.by Garraty and Carnes, 24 vols, 1999 のみをあげておく。

次のものは、一般的な大学研究であるが、関連する人名と背景についても詳しい。時代背景や学術的背景とともに記述されていることから、たんなる人名辞典よりも有用である。

Walter Rüegg (hrsg.), Geschichte der Universität in Europa, Bd.1 Mittelalter, 1993.

Walter Rüegg (hrsg.), Geschichte der Universität in Europa, Bd.2 1500-1800, Von der Reformation zur Französchen Revolution, 1996.

う(半導体の生産量はわずか20年で逆転した)。1930年代までのアメリカからヨーロッパに向かう留学生の流れは、1945年以降、まったく反転した。変化が生じるには、1世代かからないのである。

19世紀以降の基本文献の解題(VI)は、書誌文献の解題の延長である。ALRやABGBの文献といっても、当初の自然法的解釈から19世紀後半のパンデクテン解釈まであり、それぞれの文献の時代的位置づけが必要となるからである。「パンデクテン」のテキストのそれぞれの立ち位置も同一ではないのである。解釈学の研究にも、しばしば混同のみられるところである。歴史でないからといって、同一レベルで扱うべきではない(混同した主張があったことの指摘とか、再検討の結果、同じ結論を唱える、見落としがあったというのは別である)。歴史法学の時代にあっても、サヴィニー流のローマ法重視か、プロイセン国家に適合したヘーゲルの解釈によるかの相違は大きい。ユダヤ系法学者や法社会学は、後者の系譜に連なる。「民族精神」はきわめて多義的な概念である。【法学上の発見】244頁、250頁、285頁、339頁。

本文の Die grossen Deutschen, Deutsche Biographie (hrsg.Heimpel, Heuss, Reifenberg) だけでなく、英語でも、MacDonell and Manson (ed.), Great Jurists of the World, 1914, 1968 がある。後者は、Gaius, Papinian, Ulpian, Bartolus, Alciati, Cujas, Gentilis, Bacon, Grotius, Selden, Hobbes, Zouche, Colbert, Leibnitz, Pufendorff, Vico, Bynkershoek, Montesquieu, Pothier, Vattel, Beccaria, Stowell, Bentham, Mittermaier, Savigny, Jheringを挙げている。英米法系と大陸法系とで、対象がやや異なるのはいうまでもない。それでも最大公約数的に、大思想家には、ほぼ指定席がある。その他の小型の辞典については、いちいち立ち入らない。

Walter Rüegg (hrsg.), Geschichte der Universität in Europa, Bd.3 1800-1945, Vom 19.Jahrhundert zum Zweiten Weltkrieg, 2004.

Walter Rüegg (hrsg.), Geschichte der Universität in Europa, Bd.4 Nachkriegszeit, 2010.

II 著名な書誌とその著者

1 キュルシュナーのドイツ学者事典 (Kürschners deutscher Gelehrten-Kalender)

(1) これは、ドイツの学者事典である。専門を問わないから、法学者や法律家に限定されるわけではない。生年、生誕地、住所、学歴と職歴、研究領域や業績などが網羅されている。近時は、対象者のメール・アドレスも付され、ほぼ毎年、Walter de Gruyter 社から出版されている。また、最近では、印刷物だけではなく、データベースでも提供されており、7万7000以上の項目があり、毎年、8800人もの、追加や修正がある。もともと生存者しか記載していないが、1996年からは、死者も確認できるようになっている。資料の新鮮さと網羅的なことで、他の書誌に優る。

新しい人名を検索するにはもっとも包括的で詳細な辞典であるが、以下の経緯から、これを検索することは必ずしも容易ではない。すなわち、基本的に生存者しか記載しなかったことから、生存の情報をあらかじめ有することが必要である。わからないときには、数年分をあらかじめ調べる必要がある。また、数年次にわたり掲載されていることから（内容はしだいに詳細になる）、順次検討することが必要であり、場合によっては、何年度分も比較検討することが必要となる。引用にあたっても、詳細を期するときには、何年度の何頁と正確に記述する必要がある（人によって引用する年が異なることになり、引用が煩雑になる）。

この学者事典は、文化人事典の Kürschners Deutscher Literatur-Kalender に由来するものであり、研究者のための参考図書として発足した。1925年に、Gerhard Lüdtke (1875-1944) が最初の版を出版した。文献目録を研究者のた

めに提供したのである。1928年に第3 版となったが、内容はしだいに詳細となり、1940/41 年の第6 版は、2 巻本となった。

戦後の最初の版は、1950年であり、Gerhard Oestreich の手による。1954年の8 版では、1950年以降の新しい研究者のみを採り上げ、従来のように、すべての業績を挙げることをやめた。これにより、スリム化がはかられたが、不便にもなった。研究者の全業績を調べるには、前の版をすべて調査しなければならない、手間がかかるからである。過去のすべての版をそろえることは費用もかかるし、場所的余裕も必要である。販売数も限られるので、大図書館でなければ、網羅的に揃えて保存しておくことはむずかしい。図書館によっては、スペースの関係で、新版がでると旧版を廃棄することもある。編集方針を知らないのであろう。しかし、新版が全部の経歴をカバーするわけではないから、廃棄は、上述したように、記録の保存方法としては十分ではない。これは、ハバーザック (旧シェーンフェルダー)、ザルトリウスなどの加除式の法令集の場合と同じであり、新法令や条文が出たからといって、旧法令や条文を廃棄すると、従来の経過は不明となる (独法117号69頁以下参照)。

1954年からは、Werner Schuder (1917- 2006) が編集を行っている。8 版への批判をうけて、1961年の9 版では、全公刊物のリストを付している。そこで、1961年版は、またも2 巻となった。のちの版は、公刊物のリストを縮小したが、なお大部なままである。2009年の22版では、4 巻となった。

(2) 親本となった *Literatur und Wissenschaft* は、同じく、Walter de Gruyter 社から出版されている。2010年11月の 67 版があり、1 万3436人のドイツ語の文学関係の作者の生年、住所、経歴、地位、受賞や17万8000の公刊物の記事が掲載されている。

(3) 上記の(1)(2)を含めた *Kürschners Handbücher* のシリーズには、ほかに以下のものがある。

芸術、音楽、演劇に関しては、分野ごとに以下がある。

Kürschners Graphiker-Handbuch Deutschland, Österreich, Schweiz. Illustratoren, Gebrauchsgraphiker, Typographen, (hrsg. von Charlotte Fergg-Frowein), 2版, Berlin: de Gruyter, 1967.

Kürschners Handbuch der Bildenden Künstler. 2 Bde. Saur Verlag, München (2. Jg) 2007.

Kürschners Musiker-Handbuch. 2 Bde. Saur Verlag, München (5. Jg) 2007.

Kürschners biographisches Theater-Handbuch: Schauspiel, Oper, Film, Rundfunk. Deutschland, Österreich, Schweiz. de Gruyter, Berlin 1956.

政治に関しては、以下がある。

Kürschners Volkshandbuch (Abgeordnetenhandbuch) mit Kurzbiografien aller Abgeordneten aus Bundestag oder Landesparlament. 連邦議会とラント議会の議員の人名録である。

Kürschners Handbuch Europäisches Parlament mit Biografien aller deutschen Mitglieder des Europäischen Parlaments sowie Kurzbiografien der übrigen Mitglieder aus den anderen Mitgliedsländern. ヨーロッパ議会の議員の人名録である。もっとも、近時、議員の名簿は、それぞれの組織で、オンライン上でも参照できるようになっていることが多く、情報公開の見地から詳細なニュース記事も掲載されることがある。

(4) 事典の名前のもととなった Joseph Kürschner (1853.9.20- 1902.7.29) は、1853年に、チューリンゲンの Gothaで生まれた。彼は、技術者として働いた後、ライプツヒ大学で学び、文芸活動に入った。1872年に、演劇史に関する著作 <Konrad Ekhofs Leben und Wirken> を公刊した。1875年には <Theatralische Nekrologie> を、1876年と77年には <Chronologie des Theaters>、1878年には <Jahrbuchs für das deutsche Theater> を公刊した。

1881年には、月刊誌 <Vom Fels zum Meer> (Stuttgart) の編集を引き受け、<Kollektion Spemann>や <Deutschen Nationalliteratur> を公刊し、Coburg-Gothaの大公 Ernstから教授に任じられた。また、ドイツ文芸家協会の雑誌 <Neue Zeit>や <Deutsche Schriftstellerzeitung> の編集にも携わった。1884年には、事典 <Taschen-Konversationslexikon> も公刊した。1882年からは、書誌の <Allgemeiner deutscher Literaturkalender>を、1886年からは、年報 <Richard Wagner-Jahrbuch>を公刊した。

彼は、雑誌や辞書に多数の記事を書き、<Pierersches Universal-Lexikons der Gegenwart>の新版を出し、他の書誌も編纂した。Fedor von Zobeltitz や Gotthilf Weisstein とともに、1899年に、愛書家協会 <die Gesellschaft der Bibliophilen> (Weimar) を設立した。また、彼は、Wartburgstadt のワーグナー博物館の創設者の1 人でもある。1902年に、チロールの Windisch-Matreiで亡くなった。その墓は、アイゼナッハの主墓地にある。ゴータには、生誕地の Querstraße 6 に記念碑がある²⁾。

(5) 人名辞典とは異なるが、書誌として重要なものに、略語辞典があり、これについては、【歴史】653頁参照。

2 ヤコブスとシューベルト (Jakobs und Schubert, Die Beratung des Bürgerlichen Gesetzbuchs : in systematischer Zusammenstellung der unveröffentlichten Quellen, 1978ff.)

1. Materialien zur Entstehungsgeschichte des BGB : Einführung, Biographien, Materialien, 1978.
2. Allgemeiner Teil, 1985.
3. Recht der Schuldverhältnisse 1. § § 241 bis 432; 2. § § 433 bis 651; 3. § § 652 bis 853., 1978-1983.
4. Sachenrecht 1 - 4., 1985-1991.
5. Familienrecht, 1. § § 1297-1563; 2. § § 1564-1921, 1987ff.

2) Lülfig, Kürschner, Joseph, NDB 13 (1982), S.234ff. キュルシュナーは、留学先の教授の詳細を知ろうでも有用である。今日では、経歴や業績は、各大学のホームページから容易に入手できるが、2000年以前には、その程度の情報でも必ずしも容易ではなかったのである。また、ホームページは、基本的に本人かその関係者の手によるから、客観的な評価という意味では、キュルシュナーは、今日でも意味をもっている。

若干の拙著は、以下のように略する。【大学】大学と法曹養成制度〔2001年〕、【法学上の発見】法学上の発見と民法〔2016年〕、【法実務家】ドイツ法学と法実務家〔2017年〕、【歴史】大学と法律家の歴史〔2020年〕、【変容】亡命法学者と法の変容〔2022年〕。

6. Erbrecht : § § 1922-2385, 2002.

7. Einführungsgesetz zum Bürgerlichen Gesetzbuch und Nebengesetze : (Zivilprozeßordnung, Konkursordnung und Gesetz über die Angelegenheiten der freiwilligen Gerichtsbarkeit), 1990.

(1) これは、BGB の制定史に関する資料集である。制定過程の審議録のほか、起草委員会や連邦司法部の担当官、当時の連邦参議院の立法関係者などのかなり詳細な人的記録がある。BGB の制定資料は種々あるが、理由書 (Motive) について詳細なものである (なお、Motiveとその編者の Mugdan については、【法実務家】17頁)。

ヤコブスについては、師のフルーメとの関係で、【法学上の発見】514 頁でふれたことがある。以下では、簡単にふれるにとどめる。また、キール大学で、シューベルトとともに法史学を教えたハッテンハウアーについてふれる。

(2) ヤコブス (Horst Jakobs, 1934.11.24-)

彼は、1934年に生まれた。1963年に、ボン大学で学位をえて (Eingriffserwerb und Vermögensverschiebung in der Lehre von der ungerechtfertigten Bereicherung, 1964)、1969年に、ハビリタチオンを取得した (Unmöglichkeit und Nichterfüllung, 1969)。指導教授はフルーメである。1971年に、ボーフム大学で正教授、1974年に、ボン大学教授。名誉教授。フルーメの弟子については、ふれたことがある³⁾。

3) 【法学上の発見】514 頁。なお、法律家の経歴には、雑誌では、時期に応じて掲載されるものがある。まとまっていないことから、網羅的な検索には限りがある。NJW, JZなどの死亡記事、60歳、70歳などのおりの顕彰記事は、多数にのぼる。サヴィニー雑誌 (ZRG) にも掲載される。サヴィニー雑誌の記事には、本文に掲載されるものと、個別の巻の別添に掲載されるものがある。前者は、本文の一部であるから、423頁のように算用数字で表わされるが、後者は、XVIIのようにローマ数字で表わされる。顕彰記事は日付けが特定しているから、本文に掲載されるが、死亡記事は予定が立たないので、別添になることが多い。別添のことから、図書館によっては、広告と誤解してきちんと製本していない場合もある。データベースでも、これに限らず著作権処理の関係から、必ずしも正確に反映されていない場合がある。雑誌のほか、経歴や死亡記事が大学や裁判所のHPに掲載される場合もある。

ZEuP誌には、著名人の生誕150 年などの時期に関連づけて、その業績や影響を振

ハビリタチオン論文では、不能と不履行に関する研究をしたが (Unmöglichkeit und Nichterfüllung, 1969 (Bonner rechtswissenschaftliche Abhandlungen 84). AcP 74 (1974), 78に、Eberhard Lopauの書評がある)、民法のほか、法制史、法理論をも専門としている。上述のドイツ民法典の制定史料(共著)で著名である。

Die Beratung des Bürgerlichen Gesetzbuchs (hrsg. v. Jakobs /Schubert), 1978.

Gesetzgebung im Leistungsstörungenrecht : zur Ordnung des Rechts der Leistungsstörungen im Bürgerlichen Gesetzbuch und nach Einheitlichem Kaufrecht, 1985.

さらに、ラーレンツを代表とするナチス法学者に関する研究もしている⁴⁾。

(3) シューベルト (Werner Schubert, 1936.8.15-)

(a) 彼は、1936年に、シレジアのPatschkau で生まれた。父は、高校の高級教諭であった。彼は、1965年に、学位をえて (Die Entstehung der Vorschriften des BGB über Besitz und Eigentumsübertragung, 1966)、1974年に、ボーフム大学の Hermann Dilcherの下で、ハビリタチオンを取得した (Französisches Recht in Deutschland zu Beginn des 19. Jahrhunderts - Zivilrecht Gerichtsverfassungsrecht und Zivilprozessrecht, 1977)。1976年に、キール大学の正教授となった。2001年に、名誉教授となった。民法のほか、近

り返る記事が多い。たんなる追悼記事とは異なり、比較的まとまった論文となっている。近時でも、Dannemann, Martin Wolff zum 150.Geburtstag, ZEuP 2022, 635; Meyer-Pritzl, Von der „Pandektenstube“ zur Mitteis-Schule - Römisches Recht und Rechtsvergleichung bei Ludwig Mitteis (1859-1921), ZEuP 2022, 108; Thiessen, Otto von Gierke (1841-1921), ZEuP 2021, 892; Martens, Colon Blackburn, ZEuP 2019,99; Baldus, Der Prophet im fremden Land? Zum 250.G.von Karl Salmo Zachariae, ZEuP 2019, 724などがある。

- 4) 同・498 頁注(7) 参照。なお、近時の、第三帝国時代の亡命法学者については、Tuori, Empire of Law, Nazi Germany, Exile Scholars and the Battle for the Future of Europa, 2020 もある。

代私法史、ローマ法などを専門とする。多方面にわたる立法史料の編纂に関し、業績が多い。自分自身の業績も多いが、弟子も多く、100 人もの博士論文の指導をしている。

学位論文は、BGB の占有と所有権移転に関する規定の制定史である。物権変動の基礎理論であるが、ドイツ民法に特有とされる形式主義が、制定時には必ずしも異論のないものではなかったことが明らかにされている⁵⁾。玉石混交のドイツの学位論文としては、(めずらしく)非常に完成度の高いものである。

(b) まとまったものでは、ヤコブスとの共編の Die Beratung des Bürgerlichen Gesetzbuchs (hrsg. v. Jakobs /Schubert), 1978-2002 が著名である(上述)。そのほかにも、19世紀のドイツの種々の法典の草案や起草時の議事録を精力的に復刻、出版した功績は大きい。民法や商法、民訴法関係では、以下がある。

Bayern und das Bürgerliche Gesetzbuch, 1980.

Die Vorlagen der Redaktoren für die erste Kommission zur Ausarbeitung des Entwurfs eines Bürgerlichen Gesetzbuchs, Bd. 1ff., 1980ff.

Die deutsche Gerichtsverfassung - Entstehung und Quellen (hrsg.), 1981.

Quellen zur preußischen Gesetzgebung des 19. Jahrhunderts - Gesetzrevision (1825-1848), Bd. 1ff., 1981ff.

Protocole der Commission zur Beratung eines allgemeinen deutschen Handelsgesetzbuchs (hrsg.), 1984. 普通商法典の議事録である。

Protocole der Commission zur Ausarbeitung eines allgemeinen deutschen Obligationenrechtes (hrsg.), 1984. ドレスデン草案の議事録である。

Protocole der Commission zur Beratung einer allgemeinen Civilprozessordnung (hrsg.), 1985. 普通民訴法の審議の議事録である。

Vorentwürfe der Redaktoren zum BGB (hrsg.), 1986. 民法典の基礎草案である。

Entstehung und Quellen der Rechtsanwaltsordnung von 1878 (hrsg.),

5) Köbler/Peters, Who's who im deutschen Recht, 2003, S.640. (以下、Who's who で、引用する)。物権変動に関する学位論文については、【研究】313 頁参照。

1985.

Die Projekte der Weimarer Republik zur Reform des Nichteelichen- des Adoptions- und des Ehescheidungsrechts (hrsg.), 1986.

Entstehung und Quellen der Civilprozeßordnung von 1877, (hrsg.), 1987.

Protokolle über die Plenarverhandlungen des vorläufigen Reichswirtschaftsrats (1920-1923) und die Drucksachen (hrsg.), 1987.

Beratungen über den hessischen Personenrechtsentwurf 1846 bis 1847 (hrsg.), 1988.

100 Jahre Genossenschaftsgesetz (hrsg.), 1989.

Quellen zur Aktienrechtsreform der Weimarer Republik (1926-1931) (hrsg.), 1999.

Quellen zum Nichteelichengesetz von 1969 (hrsg.), 2002.

Nachschlagewerk des Reichsgerichts Gesetzgebung des deutschen Reichs (hrsg. v. Schubert /Glöckner) 7 Bde. 2005-2009 (u. a. HGB). (ライヒ大審院の民事判例集成である。対応するものが刑事についてもある)

200 Jahre Code civil (hrsg. v. Schubert / Schmoeckel), 2005. (フランス民法典の200年を記念して、関係の論文を集めたものである)

Zivilprozessreform in der Weimarer Zeit (hrsg.), 2006.

Die Reform des Ehescheidungsrechts von 1976 (hrsg.), 2007.

コッホやキルヒマンに着目した民訴法史料もある。

Christian Friedrich Koch, Der preußische Civil-Prozeß, 2. A. (hrsg.) 1994.

Allgemeine Gerichtsordnung für die preußischen Staaten, 1822 (hrsg.), 1994.

Kirchmann Julius von, Das preußische Civil-Prozeß-Gesetz vom 21. Juli 1846 (hrsg.), 1994.

(c) 以下は、ナチスのドイツ法アカデミーの委員会議事録と家族法である。

Protokolle der Ausschüsse der Akademie für deutsches Recht 1986-2002 (25 Bde. ドイツ法アカデミーの小委員会は30以上あり、全国の法律家を動員

して新しい法典の樹立を目指した)。

Das Familien- und Erbrecht unter dem Nationalsozialismus (hrsg.), 1993.

ナチスの民族法典については、Protokolleの中のVolksgesetzbuch : Teilentwürfe, Arbeitsberichte und sonstige Materialien, (hrsg. Schubert), 1988. (Akademie für Deutsches Recht, 1933-1945 : Protokolle der Ausschüsse, (hrsg. Schubert), Bd. 3, 1).

ドイツ法アカデミーの記録では、総論的な民族法典に関する巻が重要であるが、ほかの小委員会ごとの巻も、当時の思想を知るには手っ取り早い手段となる。審議内容に差があることから、巻によって軽重がある。家族法や土地法は比較的詳細であるが、債権法はそれほどでもない。これは、結局、ゲルマン法研究における物権法や家族法と債権法の軽重を反映したものにすぎない。比較的后代に影響を及ぼしたものとしては、給付障害法 (Leistungsstörungen) があり、これは、2001年の債務法現代化法のモデルの1つともなっている。Stoll (父Heinrich) の体系は、比較的完成していた (ドイツ法アカデミーでは、Schriften der Akademie für Deutsches Rechtのシリーズで、成果を単行本としており、その中に、Stoll, Die Lehre von den Leistungsstörungen, 1936がある)。

ナチス時代の法改編は、戦後否定され旧に復したが (1953年3月5日の「民法における法統一の回復法」Gesetz zur Wiederherstellung der Gesetzeinheit auf dem Gebiete des bürgerlichen Rechts, BGBl. I 33. ドイツ連邦共和国法である。これは、ナチスによる法改正を否定し、それ以前に戻すものである。東西の法統一は、1990年のドイツ再統一までもち越された)、1930年代の法改編は、1900年以後の法の進展をも反映するものであったから、すべてが復古したわけではない。給付障害法も、1900年のドイツ民法典発効後のシュタウプの積極的契約侵害論やラーベルの不能論の再構成を踏まえたものである。ドイツ法アカデミーの産物といっても、実際には、それ以前のユダヤ系法律家の成果を踏まえたものも包含されていた。「近世私法史」のように新しい分野の開拓もあり、戦後維持されたものも少なくなかったのである。

(d) また、ドイツ連邦 (1815年の) や諸ラントの諸法関係の立法史料がある。統一民法典の前史として重要な意義を有する。

Protokolle des Verwaltungsrats und des provisorischen Fürstenrats der deutschen (Erfurter) Union (1849-1850) (hrsg.), 1988.

Verhandlungen des am 2. 4. 1848 zu Berlin eröffneten Landtages (hrsg.), 1989.

Verhandlungen der Ständeversammlung des Großherzogtums Baden in den Jahren 1847 bis 1849 (hrsg.), 1989.

Die preußischen Provinziallandtage von 1841, 1845 und 1845 (Rheinprovinz) (hrsg.), 1990ff.

Verhandlungen der württembergischen Kammern und der verfassungsberatenden Landesversammlungen des Königreichs Württemberg (1848-1850) (hrsg.), 1991.

Sammlung sämtlicher Erkenntnisse des Reichsgerichts in Zivilsachen Jahrgänge 1900-1914 (hrsg.), 1992-2002 (13 Bde.).

Der Provinziallandtag des Königreichs Preußen von 1841, 1843 und 1845 (hrsg.), 1993.

Berichte über die Verhandlungen der konstituierenden Versammlung in Hamburg (1848-1850) und Verfassung des Freistaates Hamburg (hrsg.), 1993.

Löwenberg Karl Friedrich von, Materialien des Anhangs zum Allgemeinen Landrecht und zur Allgemeinen Gerichtsordnung (hrsg.), 1994.

Entwurf und Motive einer Prozeß-Ordnung in bürgerlichen Rechtsstreitigkeiten für den preußischen Staat (hrsg.), 1994.

Nachschlagewerk des Reichsgerichts BGB, (hrsg. v. Schubert /Glöckner) 10 Bde., 1994-2002.

Der westfälische Provinziallandtag von 1841, 1843 und 1845 (hrsg.), 1993-1999.

Nachschlagewerk zum preußischen Landesrecht (hrsg. v. Schubert / Glöckner), 1998.

Preußen im Vormärz, Die Verhandlungen der Provinziallandtage von

Brandenburg, Pommern, Posen, Sachsen und Schlesien (1841-1845) (hrsg.), 1999.

Materialien zur Vereinheitlichung des Notarrechts (1872-1937) (hrsg.), 2004.

Stenographischer Bericht über die Verhandlungen des deutschen Parlaments zu Erfurt (hrsg.), 1987.

(e) 刑法や刑訴法関係の立法史料もある。

Quellen zur Reform des Strafprozessrechts, Abteilung I-III (1918-1932 1933-1939) (hrsg.), 1988ff.

Entstehung und Quellen der Strafprozessordnung von 1877 (hrsg.), 1989.

Législation civile commerciale et criminelle par Jean-Guillaume Locré (hrsg.), 1990.

Protokolle der Kommission für die Reform des Strafgesetzbuches (1911-1913) (hrsg.), 1990.

Vorentwurf von 1909 zu einem deutschen Strafgesetzbuch mit Begründung (hrsg.) 1990.

Entwürfe der Strafrechtskommission (1911-1913) zu einem deutschen Strafgesetzbuch und zu einem Einführungsgesetz (hrsg.), 1990.

Protokolle der Kommission für die Reform des Strafprozesses(1903-1905) (hrsg.), 1991.

Entwurf einer Strafprozessordnung und Novelle zum Gerichtsverfassungsgesetz 1908, 1909 (hrsg.), 1991.

Protokolle der Reichstagsverhandlungen Bericht der 7. Kommission des Reichstags (1910-1911) zur Beratung der Entwürfe einer Strafprozessordnung (hrsg.), 1991.

Schwarze Friedrich Oskar, Commentar zum Strafgesetzbuch für das deutsche Reich, 3. A. 1873 (hrsg.), 1873.

Rubo Ernst Traugott, Kommentar über das Strafgesetzbuch für das deutsche Reich (hrsg.), 1992.

Entwürfe zu einem Strafgesetzbuch für das Großherzogtum Hessen 1831 und 1836 (hrsg.), 1993.

Entwurf eines Strafgesetzbuchs für Kurhessen von 1849 (hrsg.), 1993.

Nachschlagewerk des Reichsgerichts zum Strafrecht 4 Bde. (hrsg. v. Schubert /Glöckner), 1995-1999.

Code pénal des Königreichs Westphalen von 1813 (hrsg.), 2001.

Entstehung des Strafgesetzbuchs (hrsg. v. Schubert /Vormbaum), 2002/2004.

(4) ハッテンハウアー (Hans Joachim Hattenhauer, 1931.9.8-2015.3.20)

(a) 彼は、1931年に、ボンメルンの Groß-Mellenで生まれた。ハルツの家系で、祖父は、左官職人であった。父の Alfred Hattenhauer は、洗礼派伝道師であった。1952年に、アビトゥーアを取得して、マールブルク大学で法学を学んだ。1955年に、第一次国家試験に合格し、ハイデルベルク大学でも学び、1958年に、マールブルク大学で学位をえた (Die Bedeutung der Gottes- und Landfrieden für die Gesetzgebung in Deutschland, 1958)。Hermann Krawinkel が師であった。1960年に、第二次国家試験に合格し、助手となり、1964年に、ハビリタチオンを取得した (Die Entdeckung der Verfügungsmacht, 1969)。1965年に、キール大学の正教授となり、1973年に学長、1996年に、名誉教授となった。2005年に、妻 (Helga, geb. Bergmann, 1941-2005) が亡くなったことから、Speyerで娘と同居していた。2015年に、Speyerで病気のため亡くなった。ドイツ法史、商法、私法を専門とする⁶⁾。

シューベルトと彼は、キール大学の法史学の双壁をなしていた。シューベルトがロマニストであるのに対し、ハッテンハウアーは、どちらかというとゲルマニストである。

記念論文集 Der praktische Nutzen der Rechtsgeschichte - (Festschrift zu dem 70. Geburtstag, hrsg. v. Eckert Jörn), 2003 がある。

6) Who's who, S.248; Catalogus professorum academiae Marburgensis, II, 1979, 104; 顕彰記事 NJW 2001, 2686 (Buschmann); JZ 2015 570 (Schröder J.); 追悼記事 ZRG 133 (2016), 815 (Jürgen Brand).

業績は多い。

Hattenhauer /Buschmann, Textbuch zur Privatrechtsgeschichte der Neuzeit 1967, 2. A. 2005. 種々の古い法文や史料の対訳文献である。ハンディーであり、著名な法文を簡単に参照するのには便利である。

Allgemeines Landrecht für die preußischen Staaten von 1794 (hrsg. v. Hattenhauer /Bernert) 1970, 2. A. 1994, 3. A. 1996. プロイセン一般ラント法典 (ALR, 1794年) の復刻版である。

Die Kritik des Zivilurteils, 1970.

Zwischen Hierarchie und Demokratie, 1971.

Die geistesgeschichtlichen Grundlagen des geltenden deutschen Rechts, 1971, 2. A. 1980, 4. A. 1996.

70 Klausuren aus dem BGB, 1972, 12. A. 2008.

Thibaut und Savigny (hrsg.), 1973, 2. A. 2002.

Das Recht der Heiligen, 1976.

Geschichte des Beamtentums, 1980, 2. A. 1993.

Grundbegriffe des bürgerlichen Rechts, 1982, 2. A. 2000.

Deutsche Nationalsymbole - Zeichen und Bedeutung, 1984.

Geschichte der deutschen Nationalsymbole, 2. A. 1990, 4. A. 2006.

Rechtswissenschaft im NS-Staat (hrsg.), 1987.

Europäische Rechtsgeschichte, 1992, 2. A. 1994, 4. A. 2004.

Sigillum facultatis iuridicae, 2005.

(b) その師のHermann Krawinkel (1895.2.16-1975.9.3) は、1895年に、ヴェストファーレンのSchalkeで生まれた。幼名は、Maximilian H. Schmitt、裕福な市民の家であった。ゲッティンゲンで法律学を学び、1921年に、同大学のJulius Hatschekの下で学位をえた (Der Begriff der Priese nach englischem Seerecht, 1921)。ミュンヘンのドイツ銀行で見習い、伯父のKrawinkelのGummersbachの繊維工場で働き、養子となった。事業を受け継いだが、失敗。1936年に、ゲッティンゲン大学のHerbert Meyerの下で、ハビリタチオンを取得 (Untersuchungen zu den Anfängen des karolingischen Benefizialstaates,

1936)。1938年に、ケーニヒスベルク大学教授。1943年に、ケルン大学。兵役に服しイギリス軍の捕虜収容所。1952年に、マールブルク大学。病身であった。1963年に定年。スイスに移住した。1975年に、スイスで亡くなった。専門は、ドイツ法史、私法である (Catalogus professorum academiae Marburgensis, II, 1979, 115, ハッテンハウアーによる追悼文がある。ZRG GA 94 (1977) 441ff.)。著作として、Feudum Jugend eines Wortes, 1938.

(5) ブッシュマン (Arno Buschmann, 1931.1.25-) は、ハッテンハウアーの弟子である。彼は、1931年に、デュッセルドルフ近郊のKrefeld で生まれた、1953年から、マールブルク大学とミュンスター大学で、法律学、哲学、歴史学を学び、1958年に、第一次国家試験に合格し、ミュンスター大学で助手、1963年に、学位をえた (Ursprung und Grundlagen der geschichtlichen Rechtswissenschaft, 1963)。1965年に、第二次国家試験に合格し、キール大学の助手、1970年に、ハッテンハウアーの下で、ハビリタチオンを取得した (Frührezeption und Urkundensprache, 1970)。1972年に、ザルツブルク大学で正教授となった。1999年に、名誉教授となった。ドイツ法史、ドイツ私法史を専門とする⁷⁾。

上述の Hattenhauer /Buschmann, Textbuch zur Privatrechtsgeschichte der Neuzeit, 1967, 2. A. 2005. これについては、前記 (4) でふれている。

(hrsg.) Textbuch zur Strafrechtsgeschichte der Neuzeit, 1998.

Nationalsozialistische Weltanschauung und Gesetzgebung, Bd. I, 2000.

Buschmann / Wadle, Landfreiden, 2002.

(6) エッケルト (Jörn Eckert, 1954.5.15-2006.3.21) も、ハッテンハウアーの弟子である。彼は、1954年に、シュレスヴィッヒ・ホルシュタインの Rendsburg/Schleswig-Holstein で生まれた。父は、公務員 (最後は、ラント警察学校の校長) であった。1976年から、キール大学で法律学を学び、1981年に、第一次国家試験に合格、1982年に ハッテンハウアーの下で学位を取得 (Der objektive Beobachter in der Rechtsprechung des Bundesgerichtshofes in

7) Who's who, S.95. 本稿で扱う人名については、変更 (とくに死亡) の可能性がある。同書は、生存者のみを記載している。関連する人名については、他の拙稿と合わせて、別の形で索引と一覧表を予定している。

Zivilsachen, 1983)、1985年に助手。1991年に、同じく ハッテンハウアーの下でハビリタチオンを取得した(ドイツ法史、民法、商法。論文は Der Kampf um die Familienfideikomisse in Deutschland, 1992)。同年、ポツダム大学の正教授、1997年に、キール大学教授。1997年に、シュレスヴィッヒ・ホルシュタンの高裁で裁判官(兼務)となった。2004年に、学長。2006年に、キールで、がんのために亡くなった。まだ、52歳になる前であった⁸⁾。

Wenn Kinder Schaden anrichten, 1990, 2. A. 1993.

Hattenhauer/Eckert, 75 Klausuren aus dem BGB, 6. A. 1987, 8. A. 1994.

Eckert/Hattenhauer, 75 Klausuren aus dem BGB, 10. A. 1999, 12. A. 2008.

Schuldrecht, Allgemeiner Teil, 1997, 2. A. 1999, 4. A. 2005.

Sachenrecht, 1999, 2. A. 2000, 3. A. 2002.

Schuldrecht, Besonderer Teil, 2000, 2. A. 2005.

Schulze /Dörner /Ebert /Eckert /Hoeren /Kemper /Saenger /Schulte-Nölke, Staudinger, BGB, 2001, 2. A. 2002, 8. A. 2014; Staudinger, BGB, 13. A. 2001 (§ 651a-I).

(7) ホルン (Horn) には、以下の者がいる。このうち(a) のホルンは、法史学者として出発した⁹⁾。

(a) N.ホルン (Norbert Horn, 1936.8.18-) は、1936年に、ヴィースバーデンで生まれた。父は、エンジニアであった。1956年から、フランクフルト (マイン)、ローザンヌ、ミュンヘンの各大学で法律学を学び、1960年に、第一次国家試験に合格、1965年に、第二次国家試験に合格した。1965年に、フランクフルトのマックス・プランクのヨーロッパ法研究所で参与員。1966年に、コーイングの下で学位をえた (Aequitas in den Lehren des Baldus, 1968)。1969年に、ワシントンのジョージタウン大学、カリフォルニア大学のバークレイ校で学び、1972年に、コーイングの下でハビリタチオンをえた (Das Recht der

8) 追悼記事がある。NJW 2006, 1329 (Schubert). 追悼論文集 Gedächtnisschrift für Jörn Eckert (hrsg. v. Hoyer/Hattenhauer/Meyer-Pritzl/Schubert), 2008. また、ZRG 124 (2007), 908 (Schubert).

9) 以下のホルンにつき、いずれも、Who's who, S.290,

internationalen Anleihen, 1972)。1973年に、Bielefeld 大学で正教授、1989年に、ケルン大学教授、2001年に定年となった。専門は、ローマ法、民法、経済法、比較法などである。顕彰記事がある。NJW 2006, 2385 (Herrmann Harald). 記念論文集もある (Berger Klaus Peter (hrsg.), Zivil- und Wirtschaftsrecht im europäischen Kontext, Festschrift, 2006)。

学位論文の衡平論 (裸の合意の効力や利息にも言及。S.182, S.191) のほか、給付の均衡や、利息、金銭価値の変動などに興味をもっている。コーイングの弟子で法史学者といっても、その活動は、むしろ民法などの実定法に向かっている。

Zinsforderung und Zinsverbot im kanonischen, islamischen und deutschen Recht, Eine rechtshistorische-rechtsvergleichende Problemskizze, Festschrift für Hermann Lange zum 70.G., 1992 (hrsg.v.Mecicus), S.99ff.

Geldwertveränderungen Privatrecht und Wirtschaftsordnung, 1975.

Horn/Tietz, Sozialwissenschaften im Studium des Rechts, 1977.

Recht und Entstehung der Großunternehmen, 1979. (Kocka と共著)

Bürgschaft und Garantien, 1980, 2. A. 1981, 7. A. 1997, 8. A. 2001.

Trends in International and Comparative Commerce Law, 1980.

Codes of Conduct, 1980.

Transnational Law of Commerce, 1982.

Bürgschaft in Staudinger BGB, 12. A. 1982, 13. A. 1997.

AGB-Kommentar (mit Wolf M./Lindacher), 1984, 1989, 1994, 1999.

Adaptation of Contracts, 1985.

Law of International Trade Finance, 1989.

Handelsgesetzbuch - Kommentar (begr. v. Heymann), Bd.1ff. 1989f. 2. A. 1995-2005.

Cross-Border Mergers and Acquisitions and the Law, 2001.

Europäisches Finanzmarktrecht - Entwicklungsstand und rechtspolitische Aufgaben, 2003.

Arbitrating Foreign Investment Disputes, 2004.

中国で客員教授をしたことから、Wirtschaftsrecht der Volksrepublik China, 1987があり、Einführung in die Rechtswissenschaft und Rechtsphilosophie, 1996, 2. A. 2001, 5. A. 2011にも、中国語の翻訳がある。

(b) E.ホルン (Eckhard Horn, 1938.12.1-2004.10.18) は、1938年にマンハイムで生まれた。1967年に、ボン大学で学位をえて (Verbotsirrtum und Vorwerfbarkeit, 1969)、1972年にハビリタチオンを取得 (Konkrete Gefährungsdelikte, 1973)。1972年から、ボン大学の員外教授、1973年に、ゲッティンゲン大学の正教授、1977年に、キール大学教授、1978年に、シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン高裁の裁判官を兼任した。2004年に亡くなった。専門は、刑法、刑訴法である。

Blutalkoholgehalt und Fahruntüchtigkeit, 1970.

Die strafrechtlichen Sanktionen, 1975.

Systematischer Leitsatzkommentar zum Sanktionenrecht (Lbl.), 1983ff.

共著の Systematischer Kommentar zum Strafgesetzbuch, 1975ff. がある。

(c) H.-D. ホルン (Hans-Detlef Horn, 1960.9.21-) は、1960年に、フランクフルト (マイン) で生まれた。銀行に勤めたが、1989年にバイロイト大学で学位をえて (師は Walter Schmitt-Glaeser.論文は、Experimentelle Gesetzgebung unter dem Grundgesetz, 1989)、1992年に、第一次国家試験に合格、1998年に、同じ師の下で、バイロイト大学でハビリタチオンを取得 (Die grundrechtsunmittelbare Verwaltung, 1999)。1999年に、マールブルク大学で教授となった。2003年に、ヘッセンの行政裁判所の裁判官を兼任。専門は、公法、憲法、行政法である。

Schmitt Glaeser /Horn, Verwaltungsprozessrecht, 15. A. 2000.

Horn (hrsg.), Recht im Pluralismus, 2003.

Hermes/Horn/Pieroth, Der Glücksspielstaatsvertrag, 2007.

Gornig/Horn/Murswiek (hrsg.), Kulturgüterschutz, 2007.

Gornig/Horn/Murswiek (hrsg.), Eigentumsrecht und Enteignungsunrecht, 2008.

(d) Wieland Hornは、1970年に、ミュンヘン大学で学位をえた (Die unberechtigte Verwarnung aus gewerblichen Schutzrechten, 1971)。ミュンヘン

ンの弁護士。同弁護士会の会長。

3 デーリング (Erich Döhring, 1904.5.1-1985.12.12) と、その著作 (Geschichte der deutschen Rechtspflege seit 1500, 1953)

同人については、ゲルマニステンに関する別稿にゆずる¹⁰⁾。ドイツに多い学識ある裁判官の1人である (1926年に、ハレ大学で学位、学位論文は、Einzelstaaten unter der Verfassung von Weimar, 1928。戦前は、ブランデンブルクやザクセン・アンハルトの、戦後はキールの区裁判官。1962年に、キール大学から名誉教授号をうけた)。

キール大学法学部を素材とする Geschichte der juristischen Fakultät 1665-1965, 1965 (Geschichte der Christian-Albrechts-Universität Kiel 1665-1965, Bd.3, Teil 1) も、大学史、中世の大学や判決団、近代の変容を明解に描き出している。この前研究と、Geschichte der deutschen Rechtspflege, 1953は、名誉教授号付与の基礎となった。ほかに、まとまったものとしては、Die gesellschaftlichen Grundlagen der juristischen Entscheidung, 1977. (Schriften zur Rechtstheorie; Heft 70); Die Erforschung des Sachverhalts im Prozess: Beweiserhebung und Beweiswürdigung : ein Lehrbuch, 1964などがある。

4 ケプラー (Gerhard Köbler, Who's who im deutschen Recht, 2003)

(1) これは、発刊当時の法学者に関する辞典である。死亡者は掲載されていない。多数の法学者を対象としており、現職、現住所、メール・アドレス、HP、生年、生誕地、父親の職業、学歴、学位 (取得年)、職歴、ハビリタチオン (取得年と指導教授)、学位論文名、ハビリタチオン論文名、その後の業績、特記事項 (賞や名誉学位、名誉教授、所属する団体、会員や委員など) も記載している。対象となる人によって記載の量には、かなりの差異がある¹¹⁾。死亡者を掲載しないことで、820頁におさめてある。

10) デーリングについては、拙稿「ゲルマニステンの系譜」独法104号42頁。簡単に、Döhring, In Memoriam, von Jan Schröder, ZRG GA 105 (1988), 469.

11) ケプラーについても、同50頁。

ケプラーは、インスブルック大学の教授である。専門は法史であることから、死亡者については、自分の HP において、かなり詳細な記録を掲載している (Wer war wer, wer ist wer, wer ist weiter wer など)。詳細については、ゲルマニステンに関する別稿にゆずる (独法104号1頁)。

(2) 共著者である Butz Peters (1958.1.22-) は、ベルリンの弁護士である。彼は、1958年に、ハノーバーで生まれ、ハノーバー、ゲッチンゲン、ローザンヌ、ジュネーブの各大学で法律学を学び、1985年に、ゲッチンゲン大学で学位をえた (Der Partnerschaftsvermittlungsvertrag 1986)。弁護士となったが (1996年からハンプルク、2001年からベルリン、2012年からドレスデン)、TVジャーナリストで、みずからも司会・出演していた (未解決のファイルナンバー XY, Aktenzeichen XY … ungelöst. 1996年から2001年)。2018年に、引退している¹²⁾。

「未解決のファイルナンバーXY」は、ZDFの番組で、Eduard Zimmermann (1929-2009) により1967年に開始された。現実事件を素材に真相に迫ろうとするものである。Zimmermannは、ジャーナリストで、テレビ司会者として著名であった。

Petersには、以下の著作がある。

Handbuch des Arbeitszeitrechts in der Privatwirtschaft und im öffentlichen Dienst, 3. A. 1971.

Handbuch des Arbeitszeitrechts, 4. A. 1984, 7. A. 1994.

RAF - Terrorismus in Deutschland, 1991.

Die Absahner - organisierte Kriminalität in der Bundesrepublik, 1994.

Prinz/Peters, Medienrecht, 1999.

12) Butz Peters の事務所 Die Kanzlei Heinemann & Peters は、2018年7月で休止し、Kanzlei Tiefenbacherが連絡先となっている。<http://www.heinemann-peters.de> ペーターズの経歴などは、<https://www.tiefenbacher.de/de/rechtsanwaelte/dr-butz-peters/>にある。

5 キムとマーシャル (Hyung-Bae Kim, Wolfgang v.Marschall, Yu-Cheol Shin, Zivilrechtslehrer deutscher Sprache, 1988)

(1) これも、発刊当時の著名な法学者に関する事典である。ケプラーのものより古いことから、やや早い年代の法学者が対象となっている。ただし、名称のように民法法学者が中心である。また、外国人が留学先にするような大家が対象となっている。需要先としても、外国人の留学希望者が予定されていたのであろう。ケプラーほど多数の法学者は対象となっていないが、採り上げられた法学者については詳しく、経歴と業績のほか、学位やハビリタチオンの指導教授などにも、まんべんなくふれているから、相互の関係を知るには有益である。

共著者のキム (Hyung-Bae Kim) は、ソウル大学教授であった。韓国の民法は、物権変動にも形式主義を採用するなど、日本以上にドイツ法的である(186条、ただし、ドイツ法のように独自の物権行為である *Auflassung* の授受を伴うものではなく、所有権移転に移転登記を要件とするだけであり、日本の学説のいう緩和された形式主義に近い。物権行為と債権行為が密接な、修正された形式主義である。小野秀誠＝金得竜「韓国の所有権移転登記などに関する特別措置法」市民と法60号4頁。なお、かつての韓国の所有者不明土地、移転登記の未了地は、王朝時代からの慣習との齟齬や朝鮮戦争の影響から多く、日本の比ではなかった)。ドイツ法万能であった大正期に日本で勉強した者が、独立後の立法にイニシアティブをとったからである。日本以上に、留学先としてドイツの需要は大きい。留学生も多く、本書も、日本に次いで韓国で売れたようである。なお、Förster, *Preussisches Grundbuchrecht*, 1872は、2019年に復刻された (S.72ff. *Auflassung* の歴史も詳しい)。中世の形式主義は、必ずしも取引の安全のためだけではなく、国家の手数料収入を目ざしたものであった。意思主義には、個人の自律という側面があり、フランス革命時に拡大されたのである。

(2) マーシャル (Wolfgang Freiherr Marschall von Bieberstein, 1928.8.4-2003.6.10) は、1928年に、フライブルク (ブライスガウ) 近郊の Buchenbach で

生まれた。法律家の家系で、父は、公法の教授 Fritz、母は、Nora (geb. Kübler) であった。妻 Christa (geb. Wendorff、生地は、ギールケと同じく、オーダー河畔のStettin) とは、1957年に結婚し、5人の子があった。

1947年から、フライブルク、ベルン、フランクフルトの各大学で法律学を学び、1952年に、第一次国家試験に合格、1952/53年に、シカゴ大学で学び、1956年に、第二次国家試験に合格した。1955年から66年、フライブルク大学の助手、その間の1959年に、学位をえて (Das Abzahlungsgeschäft und seine Finanzierung, Die Rechte des Käufers gegenüber dem Finanzierungsinstitut, 1959)、1961年に、シカゴ大学で、客員教授となった。1966年に、ハビリタチオンを取得した (Reflexschäden und Regreßrecht. Die Ersatzansprüche Dritter bei mittelbaren Vermögensschäden infolge vertraglicher und ähnlicher Beziehungen zum Verletzten, 1967)。学位、ハビリタチオンとも、論文指導教授は、ケメラーである。1966年から78年、フランクフルト大学教授、1970/71年に、ジョージタウン大学の客員教授、1978年から、ボン大学教授。1980年には、メルボルン大学とマナシュ大学で客員教授。1970年から85年には、比較法協会 (Gesellschaft für Rechtsvergleichung) の商法・経済法の比較法部会員、1977年から83年には、民法法学者協会の理事、1980年以降、国際私法のためのドイツ委員会 (Deutscher Rat für Internationales Privatrecht) の委員となった¹³⁾。2003年に、亡くなった。師のケメラー同様に、親日家であり、たびたび来日している。

Zum Ersatz der Vorsorgekosten bei Verwendung eines Reservefahrzugs, Ius privatum gentium (Fest f. Rheinstein), II, 1969, S.625ff.

Tendenzen zur Erfüllungshaftung bei Sachmängeln (§ 480 Abs.2 BGB), Das Haager Einheitliche Kaufgesetz und das deutsche Schuldrecht, Kolloquium zum 65.G. von Ernst von Caemmerer (hrsg.Leser und Marschall), 1973, S.21ff.

13) Kim und Marschall, S.268f. 父や祖父のマーシャルなどとマーシャルの一族については、縁戚に関する別稿による (独法107号1頁、56頁以下)。

Die Produkthaftungspflicht in der neueren Rechtsprechung der USA, 1975 (Arbeiten zur Rechtsvergleichung 73).

Fälle und Texte zum Schuldrecht, (Lüderitzと共著), 1969, 2. A. 1970, 5. A. 1986.

Gutachten zur Reform des finanzierten Abzahlungskaufs, 1978.

Der finanzierte Abzahlungskauf, 1980.

Leasingverträge im Handelsverkehr, 1980ほかがある。

(3) Peter Gotthardt (1936-) は、マーシャルの弟子である。Gotthardtは、1936年にベルリンで生まれた。マインツ大学で語学を学び、1956年に英語学で卒業、同年からフライブルク (ブライスガウ)、チュービンゲン、ボンの各大学で法律学を学び、1961年にフライブルク大学の研究員、1969年に同大学で学位 (Der Vertrauensschutz bei der Anscheinsvollmacht im deutschen und französischen Recht ,1970)、フランクフルト大学で助手、1972年に私講師、1979年にボン大学助手、1984年に、ボン大学のマーシャルの下でハビリタチオンを取得 (Wandlungen schadensrechtlicher Wiedergutmachung, 1986)。1990年に、フランスのナンシーII大学教授。1994年に、ザールブリュッケン大学でハビリタチオンの対象変更 (Umhabilitation)。1995年に、グライフスヴァルト大学教授。2002年に定年となった。業績はあまり多くない。専門は、民法、国際私法、比較法である。

6 シュトライス (Michael Stolleis, 1941.7.20-2021.3.18, Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland)

これは、ドイツにおける公法の歴史であり、公法史に絡めた公法学者の研究である。欧米の学者は、多方面の専門分野をもつことから、本書の対象も、必ずしも公法だけに限られない意味もっている。学者やその著作が広い影響力をもっている場合には、研究相互の思わぬ相関関係を見いだすこともできる。

(1) シュトライスは、1941年に、Ludwigshafen (am Rhein) で生まれた。父は弁護士、市長であった。1960年に、アビトゥーアを取得して、1961年から、ハイデルベルク、ヴェルツブルクの各大学で法律学を学んだ。ハイデルベルク

では、文化史家の Erwin-Walter Palm の影響をうけた。1965年に、第一次国家試験に合格、当時、ヴェルツブルク大学には、適当な博士の指導者 (Doktorvater) がおらず、1967年に、ミュンヘン大学で学位をえた (Sten Gagnér の影響をうけた)。1969年に、第二次国家試験に合格、1970年に、ミュンヘン大学の Axel Freiherr von Campenhausen の助手となった。その後、学位論文 (Staatsraison Recht und Moral in philosophischen Texten des späten 18. Jahrhunderts, 1972) を公刊 (Christian Garve に献呈)。Ludwig Wittgenstein の影響をうけ、1973年に、ハビリタチオンを取得した (Gemeinwohlformeln im nationalsozialistischen Recht, 1974)。1975年に、フランクフルト (マイン) 大学の正教授となった。1991年に、マックス・プランクのヨーロッパ法制史研究所 (フランクフルト) の所長となった。2006年に定年。専門は、公法、法史、教会法である¹⁴⁾。

その名を高めているのは、4 巻からなる「ドイツにおける公法史」である。自然法の時代から現代まで、学者を中心として学問的な動きを扱っている。欧米では学者の専門が広いことから、公法に限らず、ドイツの法学者が広く対象となっている。

① Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland, Bd.1 (Reichspublizistik und Policywissenschaft 1600 bis 1800), 1988; 2.A., 2012. 自然法の時代からフランス革命までの時代を対象とする。

② Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland, Bd.2 (Staatsrechtslehre und Verwaltungswissenschaft 1800 bis 1914), 1992. ナポレオン戦争時からドイツ統一、第一次世界大戦までの時代を対象とする。19世紀の法律学の時期である。

③ Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland, Bd.3 (Staats- und Verwaltungsrechtswissenschaft in Republik und Diktatur 1914 bis 1945), 1999. ワイマール共和国とナチスの時代を対象とする。

14) Wiegandt, Jurist im Porträt: Michael Stolleis (1941–2021), Recht und Politik. 57 (2021), 228; Paulson, Michael Stolleis zum 70. Geburtstag, JZ 2011, 728; Cancik, Michael Stolleis (20. 7. 1941 – 18. 3. 2021), JZ 2021, 459; GND: 120990040.

④ Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland, Bd 4 (Staats- und Verwaltungsrechtswissenschaft in West und Ost 1945 bis 1990), 2012. 第二次世界大戦の終了から東西冷戦の時代を対象とする。1990年のドイツ再統一までの時期である。

ほかにも、業績は多い。

Deutsche Juristen jüdischer Herkunft (hrsg. v. Heinrichs /Franzki / Schmalz u. a.), 1993. (後述 II 10参照)。

Staatsdenker im 17. und 18. Jahrhundert, (hrsg.), 1977, 2.A. 1987, 3.A. 1995.

Pecunia nervus rerum, 1983.

Hermann Conring 1606-1681, 1983.

Staat und Staatsraison in der frühen Neuzeit, 1991.

Recht im Unrecht, 1994, 2. A. 2006.

Juristen (hrsg.), 1995 (Taschenbuchausgabe 2001).

Staatsrechtslehre und Politik, 1996.

Der lange Abschied vom 19. Jahrhundert, 1997.

Rechtsgeschichte als Kunstprodukt, 1997.

The Law Under the Swastika - Studies on Legal History in Nazi Germany, 1998.

Stato e ragione di stato nella prima età moderna, 1998.

Histoire du droit public en Allemagne 1600-1800, 1998.

Staats- und Verwaltungsrecht für Hessen (hrsg. v. Meyer /Stolleis) 5. A. 2000.

Konstitution und Intervention, 2000.

Public Law in Germany, 2001.

Geschichte des Sozialrechts in Deutschland, 2003.

A History of public law in Germany, 2004.

Das Auge des Gesetzes, 2004, 2. A. 2004 (フランス語、イタリア語、英語に訳されている)。

Sozialistische Gesetzlichkeit - Staats- und Verwaltungswissenschaft in der

DDR, 2009.

Ausgewählte Aufsätze und Beiträge, (hrsg. v. Ruppert /Vec), 2011.

Freiheit und Unfreiheit durch Recht, 2011.

Herzkammern der Republik: die Deutschen und das Bundesverfassungsgericht (hrsg.), 2011.

Öffentliches Recht in Deutschland, 2014.

Nahes Unrecht fernes Recht, 2014 (自伝的な解説がある).

Margarethe und der Mönch - Rechtsgeschichte in Geschichten, 2015.

また、Zeitschrift für europäische Rechtsgeschichteの共同編者である (hrsg. Simon / Stolleis)。

(2) 同名の E. シュトライス (Erich Stolleis, 1906.7.7-1986) は、政治家である。

彼は、1906年に、Gimmeldingen (bei Neustadt an der Weinstraße) で生まれた。1986年に、Mußbach (bei Neustadt an der Weinstraße) で亡くなった。父は、ぶどう園主であった。ミュンヘン大学で法律学を学び、1929年に、第二次国家試験に合格した。1931年にナチスに加盟し (1933年に、大管区長)、1931年に、エルランゲン大学で学位をえた (Das internationale Arbeiterschutzrecht, 1931)。弁護士となり、1935年には、Landauの郡のリーダーとなり、Landauの市長。1937年に、Ludwigshafen (am Rhein) の市長となり、ナチスの政策を遂行した。第二次世界大戦で自発的に兵士として志願をし、1940年に、兵士の訓練所に入り、1941年に、下士官となったが、北アフリカで、イギリスの捕虜となった。戦争中オーストラリアで抑留され、1947年に解放された。弁護士となり、1950年にぶどう園を取得し、1953年に、年金に関する行政訴訟で敗訴した。1967年に、政治的活動 (元首相の Helmut Kohlとの関係から) から準年金をうけた¹⁵⁾。

7 クレー (Ernst Klee, 1942.3.15-2013.5.18, Personenlexikon zum Dritten Reich, 2.Aufl., 2017)

15) M.シュトライスによる Michael Stolleis, Nahes Unrecht fernes Recht, 2014, S.134ff.

(1) 「第三帝国に関する人名辞典」は、第三帝国時代の、ナチスに関係した多数の者が網羅されている。いわば、ナチス時代の社会的エリートの人名辞典である。司法、経済、公共、政治、学術、教会、医療、福利厚生、文化、警察、軍などの重要人物が対象となっている(2版で、731頁)。法律家に限定されないが、キール学派の学者や著名な法律家も多数包含されている。被弾圧者の側は掲載されていないので、ナチス人名辞典ともいる。対象者の戦後の活動も記載されていることから、第三帝国時の著名人が、戦後もかなり各界に残存し、枢要な地位にいたことをも示している。

(2) 著者のクレーは、1942年に、フランクフルト(マイン)で生まれた。神学と社会教育学を学んだ。1973年から1982年まで、フランクフルト専門大学の障害者教育学の講師をした。1970年代に、ホームレス、精神病患者や障害者などの被差別グループにつきジャーナリストと社会活動家としての活動をした。また、アウシュヴィッツやナチスの医療やその犠牲者に関する本では、1997年に、Geschwister-Scholle 賞をとった(この賞は、戦時中、反ナチス活動をした白バラ事件のショーレ兄妹を記念して1980年にミュンヘン市ほかによって設けられた)。さらに、2001年に、「第三帝国におけるドイツ医療」(Deutsche Medizin im Dritten Reich)によって、フランクフルト市の表彰をうけた(Goetheplakette der Stadt Frankfurt am Main)。

「第三帝国に関する人名辞典」(Personenlexikon zum Dritten Reich)は、彼のスタンダードワークをなし、第三帝国時代と戦後のドイツの政府機関や裁判所ほかの各界の人的継続性の研究の集大成となった。障害者に対する彼の貢献から、Mettingen の身体障害者学校は、2005年に、彼の名を学校名に冠した(Ernst-Klee-Schule)。その貢献は多方面にわたり、著書も多いが、2013年に、長い病気のために、フランクフルトで亡くなった。上記のほか、賞(Kurt-Magnus-Preis、テレビファイルム賞、Adolf-Grimme-Preis)、メダル(Wilhelm-Leuschner-Medaille)をうけている¹⁶⁾。

16) Klee, Personenlexikon zum Dritten Reich, 2017 の前文 (Vorwort) 参照。

Kleeには、第三帝国時代に関する一連の著作がある。② Das Kulturlexikon zum Dritten Reich, Wer war was vor und nach 1945, 2007, ③ Deutsche Medizin im

(3) 似た企画として、Robert Wistrich, *Wer war wer im Dritten Reich : ein biographisches Lexikon : Anhänger, Mitläufer, Gegner aus Politik, Wirtschaft, Militär, Kunst und Wissenschaft* (英訳もある。Joachim Rehorkによる。Hermann Weißによる増補版, Fischer Taschenbuch), 1987。日本語訳では、*ヴェストリヒ・ナチス時代ドイツ人名辞典* (滝川義人訳)、2002年。こちらは、ナチス関係者だけではなく、亡命者などの被害者側も含められている。

ナチス期の一般的な研究であるが、Dieter Süß/ Winfried Süß (hrsg.), *Das »Dritte Reich«, Eine Einführung*, 2.A., 2008がある。当時の社会、女性、教会などについても詳しい。編者のDieter Süßは、1973年生まれ、イエナ大学で学び、学位論文で、ライブニッツ賞と、バイエルンの教授資格促進賞をえた。Winfried Süßは、1966年生まれ、ポツダム大学で学び、学位論文で、ミュンヘン大学の学位賞とドイツ医師研究賞をえた。

医師に特化したものでは、Klee, *Deutsche Medizin im Dritten Reich : Karrieren vor und nach 1945*, 2001がある。ナチス期の医師の犯罪については、*バステイアン・恐ろしい医師たち* (2005)、原題は、Bastian, *Furchtbare Ärzte*, 2001。優生学から安楽死、医学実験などが行われた。

(4)(a) ユダヤ系の法学者については、前記の Sinzheimer (I (1)参照) による歴史的研究があるが(また、後述II 7 (5)、10参照)、ナチスに迫害されたユダヤ系の法律家については多数のものがあり、たとえば、Göppinger, *Juristen jüdischer Abstammung im »Dritten Reich«, Entrechtung und Verfolgung*, 1963, 2.Aufl., 1990 があり、かなり多数の者を網羅している。

ほかにも、分野ごとに多くの研究がある。以下は、一部にすぎない。この領域では、地域ごとの研究も豊富なことが特徴である。性質上、地域研究には、あまり立ち入りえない。

Dritten Reich, *Karrieren vor und nach 1945*, 2001。②は、文化人や批評家に関するもので、人名辞典であるが、③は、医療関係者についての分野ごとの包括的な研究である。また、ナチスの優生保護法や人種論に医師が加担したことが知られているが、これについては、ティル・バステイアン (山本啓一訳)・*恐ろしい医師たち : ナチ時代の医師の犯罪*, 2005年がある。

Bergemann, Richter und Staatsanwälte jüdischer Herkunft, 2004.

Bergemann/Ladwig-Winters, Jüdische Richter am Kammergericht nach 1933, 2004.

Breunung, Walther, Die Emigration deutschsprachiger Rechtswissenschaftler ab 1933, Ein Bio-Bibliographisches Handbuch, 2012.

Gruchmann, Justiz im Dritten Reich 1933-1940, 2001.

Heinrichs/Franzki/Schmalz/Stolleis, Deutsche Juristen jüdischer Herkunft, 1993. (後述Ⅱ 10参照)。

Krach, Jüdische Rechtsanwälte in Preußen, 1991.

Morisse, Jüdische Rechtsanwälte in Hamburg Ausgrenzung und Verfolgung im NS-Staat, 2003.

Ostler, Die deutschen Rechtsanwältinnen 1871-1971, 1982.

Schiller, Das Oberlandesgericht Karlsruhe im Dritten Reich, 1997.

Reinhard Weber, Das Schicksal der jüdischen Rechtsanwälte in Bayern nach 1933, 2006.

Rheinland-Pfalz, Ministeriums der Justiz, Justiz im Dritten Reich, Justizverwaltung, Rechtsprechung und Strafvollzug auf dem Gebiet des heutigen Landes Rheinland-Pfalz, Teil 1/2, 1995.

公証人については、Schmoeckel / Schubert, Handbuch zur Geschichte des deutschen Notariats seit der Reichsnotariatsordnung von 1512. 2012の中に、Gsänger, Das Notariat im „Dritten Reich“. がある (S.169ff.)。

もっと網羅的には、Philo-Lexikon : Handbuch des jüdischen Wissens (hrsg. Emanuel bin Gorion), 2003.

(b) もと連邦司法相の Heiko Maasの編になるものとして、Furchtlose Juristen, Richter und Staatsanwälte gegen das NS-Unrecht, 2017がある。ユダヤ系に限らず、ナチスに反対した裁判官と検察官の研究であり、学者のほか、裁判官、検察官など16人の手によるものである。Bräuninger, Dohnanyi, Ehret, Gauger, Heldmann, Van Husen, Kreyßig, Lenz, Mosler, Reichling, Sauerländer, Steinmetz, Strassmann, Weiler, Wintersberger, Zürcherを対象とする (写真

付)。Dohnanyiと Steinmetzのほかは、従来あまり知られていない。当時の法曹界の状況を知るのに有益である。

(c) ナチス関係者の研究は、ユダヤ系被害者の研究と対になるが、これも多数になることから本稿ではあまり立ち入らない。近時の重要なものとしては、連邦司法省の委託研究であるGörtemaker/ Safferling, Die Akte Rosenberg, Das Bundesministerium der Justiz und die NS-Zeit, 2016がある。また、Görtemaker/ Safferling (hrsg.), Die Rosenberg. Das Bundesministerium der Justiz und die NS-Vergangenheit - eine Bestandsaufnahme, 2.Aufl., 2013があり(同名の論文がZRG GA, 132 (2015), 702にもある)。こちらは、論文集である(編者のほか、Herbert, Rückert, Dreier, Rüthers, Vormbaum, Thoessen, Schwab, Stolleisによる)。ナチスに追随し、付度した司法関係者は多数にのぼり、戦後も多数の者が残り、政策に影響を与えた。戦後70年を経て、ようやく公式の反省が行われたのである。

これに、先立つものでは、Perels, Das juristische Erbe des „Dritten Reiches“ : Beschädigungen der demokratischen Rechtsordnung, 1999 (Wissenschaftliche Reihe des Fritz Bauer Instituts ; Bd. 7, Studien- und Dokumentationszentrum zur Geschichte und Wirkung des Holocaust). ただし、学界や政界などを広く対象とするものであり、司法省の検証が個人に着目したのに対し、かなり概括的である。また、ここでいうFritz Bauerはアウシュヴィッツ裁判などで著名な検事長である。【歴史】567頁参照。

司法よりも外務省の研究が早く行われている。Conze, Das Amt und die Vergangenheit : deutschen Diplomaten im Dritten Reich und in der Bundesrepublik (Weinke / Wiegeshoff 協力), 2. Aufl. 2010. 翻訳もある。コンツェ(稲川照芳, 足立ラーベ加代, 手塚和彰訳)ドイツ外務省「過去と罪」: 第三帝国から連邦共和国体制下の外交官言行録(2018)。日本では、杉原千畝(1900-86)の退職理由も「不明」とされている。1947年に帰国後、職を転々とし、1949年2月から10月に参院資料課に勤務した。朝日新聞2019年10月24日、同年12月21日)。履歴書では、行政整理の対象とされたという。

(5) ユダヤ系法学者で著名なのは、ビスマルクの懐刀の Gneist と Levin

Goldschmidtであるが、Goldschmidt という名の者は多い。ワイマール期の早い時期にベルリン大学に赴任した James Goldschmidtが著名であるが、彼に限られない。以下の (a) (b)は、彼の息子であり、(c) (d) (e) もユダヤ系の法律家である。彼らの事績を知るには、Kleeや Göppingerの研究が有益である。(f) (g)は、やや古い時代であり、同名であっても、ユダヤ系とはされていない。古い時代に、ユダヤ系の者は法律職につけなかったからである。名前のみでユダヤ系かどうかを判断するのは早計である（独法106号130頁注167参照。Jakob や Cohen, Levyといった名、Steinのような姓でも同様である）。

(a) R.ゴールドシュミット (Robert Goldschmidt, 1907-?) は、1907年にベルリンでユダヤ系の家庭に生まれた。父は James Goldschmidtであった。法学を学び、1932年に、ベルリン大学の助手、1933年に、亡命し、ベネズエラで教授となった¹⁷⁾。

Grundfragen des neuen schweizerischen Aktienrechts, 1937.

(b) W.ゴールドシュミット (Werner Goldschmidt, 1910.2.9-1987.7.21) は、1910年に、ベルリンで生まれた。父は、James Goldschmidt であった。ベルリン、キール、ハンブルクの各大学で法学を学び（ハンブルクでの師は、Eberhard Schmidt）、第一次国家試験に合格、1931年に学位 (Das Bewusstsein der Rechtswidrigkeit entwickelt an der Lehre vom Hausfriedensbruch, 1931) をえた。1932年に、キール大学の助手となったが、1933年に、修習生を解雇された。同年、スイスに亡命。その後、スペインを経由して、1949年に、アルゼンチンの Tucumán大学の教授。1958年に、ブエノスアイレスのカトリック大学教授。1984年に定年となった。1987年7月21日に、ブエノスアイレスで亡くなった。専門は、国際法である¹⁸⁾。

17) Göppinger, Juristen jüdischer Abstammung im >Dritten Reich<, 2. A. 1990, 283.

なお、Jakob Goldschmidtは、トーマス・マンのじゅうたん売買事件に登場する著名な弁護士であり、その他の事件でも登場することがある。拙稿「ドイツ法における暴利規定の生成と展開」中田裕康先生古稀記念・民法学の承継と展開（2021年）161頁、166頁。

18) Göppinger, a.a.O., 283; Breunung, Die Emigration, 159, ユダヤ系法律家で著名な

(c) F.ゴールドシュミット (Fritz Goldschmidt, 1871.12.19-1944) は、1871年に、ブレスラウでユダヤ系の家庭に生まれた。法律学を学び、国家試験に合格し、ブレスラウで商事裁判官となったが、1941年に、Theresienstadtの収容所に送られ、次いで、アウシュヴィッツに移され、そこで亡くなった¹⁹⁾。

(d) 同名のF.ゴールドシュミット (Fritz Goldschmidt, 1893.11.13-1968.6.28) は、1893年に、ブレスラウでユダヤ系の家庭に生まれた。グライフスヴァルト大学で法律学を学び、1916年に学位 (Die Nachlasspflegschaft des Bürgerlichen Gesetzbuchs eine Pflegschaft über ein selbständiges Sondervermögen, 1905)。社会学の学位も取得した (Die Grundbesitzverteilung in der Kurmark Brandenburg um das Jahr, 1800)。シレジアで、試補となり、1926年に、区裁判官。1928年に、ケルン大学でイギリス法の予算外の員外教授。1932/33年に、宮廷裁判所の補助裁判官。ドイツのユダヤ教市民の中央協会の会長 (CV, Centralverein deutscher Staatsbürger jüdischen Glaubens)。1933/38年、CVの法律顧問。1933/39年に、ユダヤ人の自助組織 (Reichsvertretung der Deutschen Juden)の助言者。ユダヤ人の互助組織 (B'nai B'rith) の会員。1938年に、ザクセンハウゼンの収容所に拘留され、1939年に、イギリスに亡命し、ユダヤ人難民委員会に勤務。1948年に、ロンドンの回復組織の法律問題の調査員、1952年に、訴訟会議のメンバー、ロンドンの互助組織 (B'nai B'rith) の支部会長をした。1968年に、ロンドンで亡くなった²⁰⁾。

(e) H.ゴールドシュミット (Hans Goldschmidt, 1881.10.19-1940.1.29) は、

のは、シュタウプである (Samuel Hermann Staub, 1856.3.21-1904.9.2)。積極的債権侵害の概念発見で重要であり、シュタウプ自身は、早世したので迫害を免れたが、娘のDora Ernaは1943年に、Lublinの収容所で亡くなった (NDB 25, 78f.)。また、ナチスの時代に、著作から名前が抹消されたり、変更されたりした。次女のIlseは、1914年に亡くなった。Vgl. Hamann, Dr.Faust, Rechtsanwalt - Ein fast vergessenes Schauspiel auf der Kreuzung juristischer Zeitgeschichte(n), NJW 2022, 721. これにつき、独法119号199頁。

19) Göppinger, ib., S. 244.

20) Göppinger, ib., S. 283.

1881年に、ベルリンでユダヤ系の家庭に生まれた。1940年に、大西洋上で行方不明になり、1942年1月19日に死亡宣告をうけた（戦争中で、亡命途中に、船舶の沈没で不明になった者は多い）。フライブルク（ブライスガウ）、ベルリンの各大学で法律学を学び、1905年に、ベルリン大学で学位。1913年に、ケルンのラント裁判所の裁判官。1925年に、ケルン高裁の裁判官。1933年に、強制休暇。1934年に、強制的に定年となった。1939年に、イギリスに研究滞在。拘留され、カナダ行きの船に乗ったが、1940年に、ドイツの艦艇により撃沈された²¹⁾。

(f) K.ゴールドシュミット (Karl Leopold Goldschmidt, 1787.4.3-1858) は、1787年に、フランクフルト（マイン）で生まれた。法律学を学び、学位。フランクフルト（マイン）で弁護士となり、1812年からは法律顧問となった。1858年に、フランクフルトで亡くなった。専門は、民訴法である²²⁾。

Über Litiskontestation und Einreden, 1812.

Abhandlungen aus dem deutschen gemeinen Zivilprozess, 1818.

Bemerkungen zum Entwurfe einer erneuerten und erweiterten Wechsel- und Merkantilordnung, 1827.

(g) L.ゴールドシュミット (Ludwig Goldschmidt, 1856.11.2-?) は、1856年に、プレスラウで生まれた。ゲッティンゲン大学でイェーリングに学び、1892年に、ルール・Gelsenkirchen の区裁判官。1894年に、ボーフムの郡長となった²³⁾。

Kritische Erörterungen zum Entwurf eines Bürgerlichen Gesetzbuchs, 1889.

Die Grundsätze der neuen Reichsverfassung über das Grundeigentum und

21) Göppinger, ib., S.283; Bergemann, Richter und Staatsanwälte jüdischer Herkunft, 2004, 185.

22) ZRG GA 34 (1913), 447, DBA 407,57-59, DBI 2.

23) Ebel, Catalogus professorum Gottingensium 1734-1962, 1962, S.69 (J7, 182 (私講師)). 後掲Ⅲ5 (7) (b) 参照。なお、一般的なものであるが、Jewish Encyclopediaがある (1901/06)。

der bestehende Rechtszustand, 1921.

(6) ユダヤ系とは逆に、キリスト教やキリスト教理論を主軸とした法律家の検討として、Schmoeckel / Witte (hrsg.), *Great Christian Jurists in German History*, 2020 がある。もともとの〈Christian〉が伝統であるという前提では、とくに断る必要はなかったのであろうが、ジンツハイマー以来、〈Jüdische〉や女性、少数者に注目が集まったことから、近時ではむしろ斬新な感がある。

Johannes Teutonicus, Eike von Repgow, Albertus Magnus, Johann von Buch, Conrad Peutinger, Johann Oldendorp, Andreas Gail, Matthew Wesenbeck, Johannes Althusius, Dominicus Arumäus, Benecict Carpzov, Samuel Pufendorf, Gottfried Wilhelm Leibnitz, Christian Thomasius, Carl Gottlieb Svarez, Savigny, Eichhorn, Sylvester Jordan, Berthamann-Hollweg, Stahl, Max von Seydel, Sohm, Konrad Adenauer, Hans Nawiaskey, Eugen Bolz, Stephan Georg Kuttner が対象となっている。著者ではなく、理論対象による区別であるから、ユダヤ系法学者の Stahl や Nawiaskey, Kuttner も含まれている。なお、Konrad Adenauer は、政治家であるが、そのキリスト教的信仰が扱われている。その部分の著者は、祖父と同名の孫である(後注74)をも参照)。ドイツには、縁戚で法律家という例やコンメンタールの承継をする例は多いが、先祖が研究対象となる例がそう多いわけではない。Witteについては、後述Ⅲ5(7)(g)参照。

先祖の研究では、オーストリアの教育改革のトゥーンに関して、Graf von Thun und Hohenstein, *Bildungspolitik im Kaiserreich: Die Thun-Hohenstein'sche Universitätsreform insbesondere am Beispiel der Juristenausbildung in Österreich*, 2015. 同書の筆者は、同名でトーンの子孫である。独法118号53頁注46)。【法実務家】327頁。後注74)。

以下では、古い者を除き²⁴⁾、若干の者にだけふれる。ArmäusからEichhornま

24) Johannes Teutonicus (13世紀前半に死亡)は、13世紀のカノン法の注釈者。本書のほか、Kuttner, Stephan, Johannes Teutonicus, NDB 10 (1974), S. 571; Schulte, von, Johannes Teutonicus, ADB 14 (1881), S.475f.

また、Albertus Magnus (ca.1193-1280) は、13世紀の哲学者、神学者であり、レー

では著名人なので割愛する。Berthamann-Hollweg, Stahl はベルリン大学教授。Sohmからあとの者も著名なので省略する。

(a) Johann von Buch (ca.1290-1352 より後) は、14世紀の法律家、ザクセンシュピーゲルの注釈者で、ザクセン・アンハルトのSalzwedel の都市書記である²⁵⁾。

(b) Conrad Peutinger (1465.10.15-1547.12.28) は、著名な人文主義者で都市書記である。1465年に、アウグスブルクで生まれた。バーゼル、パドア、ボローニアの各大学で法律学を学び、1490年に、アウグスブルクで市の行政職についた。1491年に、パドア大学の法学博士。1497年から1534年の間、アウグスブルク市の都市書記となった。皇帝カール5 世の顧問、外交官。宗教改革の鑑定人や仲介をした。1534年に、アウグスブルク市が宗教改革をしたことから、職を辞した。1547年に、アウグスブルクで亡くなった²⁶⁾。

ゲンスブルクの司教。Grabmann, Martin, Albertus Magnus, NDB 1 (1953), S. 144ff.; Hertling, von, Albertus Magnus, ADB 1 (1875), S. 186ff.

25) Liermann, Hans, Buch, Johann von, NDB 2 (1955), S. 697f.; Steffenhagen, Buch, Johann von, ADB 3 (1876), S. 463f. DBE 2 (1995), 180.

同名の Johann Buch (ca.1640-?) は、1640年ごろ、Zerbstで生まれ、1660年イエナ大学で法律学を学び、1663年に、1663年に、学位をえた。著作に De tempore, 1663 (Dissertation) がある。

Johann Christoph Buch (1715-1774) は、1715年に、カッセルで生まれた。父は、弁護士であった。Rinteln 大学で法律学を学び、1734年に学位 (De relaxatione iurisiurandi dolo malo elicit, 1734)。弁護士となった。1774年に亡くなった。

26) Künast, Hans-Jörg; Müller, Jan-Dirk, Peutinger, Conrad, NDB 20 (2001), S.282ff.; Lier, Hermann Arthur, Peutinger, Conrad, ADB 25 (1887), S.561ff.; Bosls bayerische Biographie, 8000 Persönlichkeiten aus 15 Jahrhunderten, (hrsg.) v. Bosl, 1983, 582; DBE 7 (1998), 630.

また、Johannes Oldendorp (1488-1567.6.3) は、1488年にハンプルクで生まれた。父は商人で、伯父のAlbert Krantz (1467-1493) は歴史家であった。1504年から、ロシュトック、ケルン、ボローニアで法律学を学び、1515年に、ボローニア大学で学位 (Lizentiat)。1516年に、グライフスヴァルト大学教授、1517年に、学長。1518年に、学位。1520年に、フランクフルト (オーダー) 大学教授、1521年に、グライフスヴァ

Briefwechsel (hrsg. v. Erich König), 1923 がある。

(c) Andreas Gail (1526.11.12-1587.12.11) は、1526年に、ケルンで、都市貴族の家系に生まれた。ケルン、オルレアン、ルーヴェンの各大学で法律学を学び、1555年に、ボローニア大学で学位をえた。ケルンで弁護士となり、シュパイエル лайヒ帝室裁判所の陪席となった。1566年に、アウグスブルクのライヒ議会に参加(トリアの Johann von der Leyden大司教の顧問)。1569年に、ウィーンのライヒ宮廷会議の顧問官。1583年に、ケルンの大司教区の理事長。

ルト大学教授、1526年に、ロシュトック大学教授、都市法律顧問。1534年に、リュエベックの法律顧問、Wullenweverの市長の顧問。1538年に、ケルン大学教授、1540年に、マールブルク大学教授。1544年に、ラント伯のPhilipp von Hesse の顧問となった。1553年に、大学改革。1567年に、マールブルクで亡くなった。専門は、ローマ法、国法学、自然法である。中世のマールブルク大学ではもっとも著名な学者である。

Wat Byllick vnn recht ys, 1529. (この本の扉は、Heidorn, Heitz, Kalisch, Olechno, Geschichte der Universität Rostock 1419-1969. Festschrift zur Fünfhundertfünfzig-Jahr-Feier der Universität, Bd 1にもあり、代表作とされる。また、S.16-S.17の間の写真7頁目。また、Albert Krantzの写真は、4頁目)。

Van radtslagende, 1530.

Formula investigandae actionis, 1538.

Eisagoge iuris naturalis sive elementaria introductio iuris naturae gentium et civilis, 1539.

De iure et aequitate, 1541.

Collatio iuris civilis et canonici, 1541.

Vgl. DBE 7 (1998), 486 ; DGB 7 (2004), 523; Luig, Klaus, Oldendorp, Johannes, NDB 19 (1999), S.514f.; Landsberg, Ernst, Oldendorp, Johannes, ADB 24 (1887), S.265ff.; E. Wolf, Große Rechtsdenker, 4. A. 1963; Catalogus professorum academiae Marburgensis, I 1927, 78; Kosegarten, Geschichte der Univ. Greifswald, 1856f. 172; Döhring, Geschichte der deutschen Rechtspflege, 1953, 429; Zu seinem 400. Todestag, JuS 1967, 248 (Laufs); Kleinheyer/Schröder, Deutsche und Europäische Juristen aus neun Jahrhunderten, 1996, S.313ff.; Stolleis, Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland, 1. Bd., Reichspublizistik und Policeywissenschaft 1600-1800, 1988, 85f., 346.

1587年に、ケルンで亡くなった²⁷⁾。

著作に、*Practicarum observationum libri duo*, 1578 がある。

(d) Matthaeus Wesenbeck (1531.10.25-1586.6.5) は、1531年に、アントワープで生まれた。ルーヴァン大学とパリ大学で法律学を学び、1550年に、学士 (Licentiat)、1557年に、イエナ大学教授、1558年に、イエナで学位を取得し、1569年に、ヴィッテンベルク大学教授、宮廷裁判所アセソールとなった。1586年に、ヴィッテンベルクで亡くなった²⁸⁾。

Oeconomia juris, 1564.

Paratitla, 1565.

Commentarius in Pandectas juris civilis, 1582.

Tractatus et responsa quae vulgo consilia appellantur, Bd. 1ff. 1601ff.

(e) Johannes Althusius (1557-1638.8.12) は、1557年に、Diedenshausenで生まれた。父は、学長で宮廷説教師であった (Lubbert Althusius)。1578年から、マールブルク、バーゼルの各大学で法律学を学び、1597年からハイデルベルク、ジュネーブの各大学で神学を学んだ。1586年に、バーゼル大学で学位 (De successione ab intestato, 1586)。1586年に、Herbornのギムナジウムで法学の教師となった。1590年に、Herborn大学教授。1597年に、Siegenのアカ

27) Gschließer, Oswald von, Gail, Andreas von, NDB 6 (1964), S.38f.; Ennen, Leonhard, Gail, Andreas von, ADB 8 (1878), S. 307; Döhring, Geschichte der deutschen Rechtspflege, 1953, 395; Kleinheyer/Schröder, Deutsche und europäische Juristen aus neun Jahrhunderten, 4.A. 1996, S.477; DBE 3 (1996), 558; Stintzing/Landsberg, Geschichte der deutschen Rechtswissenschaft Abt. 1, 1880, 495; Stolleis, Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland, 1. Bd., Reichspublizistik und Policywissenschaft 1600-1800, 1988, 128.

28) Eisenhart, August Ritter von, Wesenbeck, Matthäus, ADB 42 (1897), S.134ff.; Stintzing/Landsberg, Geschichte der deutschen Rechtswissenschaft Abt. 1, 1880, 351ff., Neud. 1957, Dekkers R., Het humanisme en de rechtswetenschap 1938, 191, Döhring, Geschichte der deutschen Rechtspflege, 1953, 458; Lück H., Ein Niederländer in Wittenberg, Jb. d. Zentrums f. Niederlande-Studien, 1991, 199, Kleinheyer/Schröder, aa.O. (前注27)), S.519; DBE 10 (1999), 455.

デミーの学長、1604年から38年に、Emden の都市法律顧問。1638年に、Emden で、亡くなった²⁹⁾。

Juris Romani libri duo ad leges methodi Rameae conformati, 1586.

Iurisprudentia Romanae, 1586.

Tractatus tres quorum I. De poenis. II. De rebus fungibilibus. III. De iure retentionis. Omnibus tam in scholis quam foro versantibus apprime utiles et necessarii nunc primum in lucem editi et publici iuris facti, 1611.

(f) Sylvester Jordan (1792.12.30-1861.4.14) は、1792年に、チロールの Omes bei Axams で生まれた(インスブルック近郊)。父は、靴職人であった。当初靴作りを習ったが、1806年に、伯父と司祭の援助で、インスブルックのギムナジウムに入った。1811年に卒業し、1813年から、Landshut大学とウィーン大学で法律学と哲学を学び、1815年に、Landshut大学で哲学の学位。1817年に、法学の学位。Landshutのラント裁判所に勤務。ミュンヘンで弁護士となった。1820年に、バーデンの内務省の許可をえて、ハイデルベルク大学の私講師、1821年に、ハイデルベルク大学でハビリタチオンを取得。1821年に、マールブルク大学の員外教授、1822年に、マールブルク大学の正教授となった。1830年に、大学代表として、クールヘッセンの制憲議会に参加し、1831年の憲法を起草。1839年に、大逆罪の疑いをうけ逮捕された。1843年に、マールブルクの裁判所で有罪となったが、1845年に、カッセルの上級控訴裁判所で無罪。1848年には、ライヒ議会議員となった。フランクフルト(マイン)の予備議会で議員、1850年まで、連邦議会のクールヘッセンの代表、1861年に、カッセルで亡くなっ

29) Mitteis, Heinrich, Althusius, Johannes, NDB 1 (1953), S.224ff.; Stintzing, Roderich von, Althusius, Johannes, ADB 1 (1875), S. 367; Döhring, Geschichte der deutschen Rechtspflege, 1953, 371; Stolleis, Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland, Bd. 1, Reichspublizistik und Policywissenschaft 1600-1800, 1988, 105ff., 175, 240; DBE 1 (1995), 102; Würdigung Westfälische Jurisprudenz 2000, 95 (Wyduckel); LARS Biographisches Repetitorium der Juristen - CD.

なお、Dominicus Arumäus (1579-1673) は、16世紀の国法学者である。Muther, Theodor, Arumäus, Dominicus, ADB 1 (1875), S.614f.; DBE 1 (1995), 199.

た³⁰⁾。

Über die Auslegung der Strafgesetze, 1819.

Programma observationes quosdam in doctrinam de Morgengaba germanica continens, 1821.

De conatu delinquendi, 1826.

Versuche über allgemeines Staatsrecht mit Bezugnahme auf Politik, 1828.

Lehrbuch des allgemeinen und deutschen Staatsrechts, 1831.

Aktenstücke zum Teil mit Anmerkungen über die Frage ob der § 71 der kurhessischen Verfassungsurkunde auch auf die Abgeordneten der Landes-Universität anwendbar sei? 1833.

Bewusstsein über seine Schuld oder Unschuld, 1845.

(g) Max Anton Wilhelm von Seydel (1846.9.7-1901.4.23) は、1846年に Gernersheim で生まれた。祖父は、デュッセルドルフで大尉であった。父は、要塞建築の理事官、少佐であった。1854年に、ミュンヘンに移動。病気のため、難聴となった。ミュンヘン、ヴェルツブルク (Felix Dahn)、ミュンヘンの各大学で法律学を学んだ。1869年に、ヴェルツブルク大学で学位 (成績は、summa cum laude、論文は、Die gemeinschaftliche Lehre vom mazedonianischen Senatsbeschlusse, 1869)、1871年に、第二次国家試験に合格して、バイエルンの公務員となった (郡政府、内務省の文化・教育局など。Johann Freiherr von Lutz の後援があった)。1873年に、バイエルンの郡アカデミーの教授、1880年に、政府顧問官。1881年に、ミュンヘン大学教授。1893年に、バイエルンの一代貴族となった。901年に、ミュンヘンで卒中のために亡くなった³¹⁾。専門は、国法学、行政法、法史である。

30) Klötzer, Wolfgang, Jordan, Sylvester, NDB 10 (1974), S. 603 f.; Wippermann, Karl, Jordan, Sylvester, ADB 14 (1881), S. 513ff.; Catalogus professorum academiae Marburgensis, I 1927, 124; Klingelhöfer, Marburger Juristenfakultät, 1972, 78; Stolleis, Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland, Bd. 2, Staatsrechtslehre und Verwaltungswissenschaft 1800-1914, 1992, 88f., 168f.; DBE 5 (1997), 363. 独法106号66頁参照。

Der Bundesstaatsbegriff, 1872.

Kommentar zur Verfassungsurkunde für das deutsche Reich, 1873, 2. A. 1897.

Bayerisches Staatsrecht, 1884ff.

Das Staatsrecht des Königreichs Bayern, 2. A. 1894.

(h) Eugen Bolz (1881.12.15-1945.1.23) は、1881年に、Rottenburg (Neckar) で生まれた。父は、植民地の商人であった。チュービンゲン、ベルリン、チュービンゲンの各大学で学び、1905年に第一次国家試験、1909年に、第二次国家試験に合格し、ヴュルテンベルクで司法職についた。1917年に、ブリュッセルでライヒ賠償庁に勤め、1918年に、区裁判官。1919年に、ヴュルテンベルクの司法大臣、1923年に、内務大臣、1928年に、州大統領、1933年 2月に、シュトゥットガルトの宮殿をヒトラーの選挙運動に使用することを拒否した。同年 3月、州大統領を解任され、ラント議会における資格も失い、保護検束された。カリタス会（カトリックの福祉団体）の顧問。税理士、企業（Deckensteinfabrik C. H. Bauer & Co.）の共同出資者。1942年、抵抗運動に参加（Carl Goerdeler）、1944年8月に、逮捕された。1944年12月には、退職公務員として釈放されたが、4 日後に、反逆罪で死刑判決をうけ、1945年1 月に Berlin-Plötzenseeの刑務所で死刑となった³²⁾。

(i) Wolfgang Lauterbach (1893.10.2-1973.3.13) は、本書とは関係がない。1893年に、プレスラウ近郊の Stabelwitz で生まれた。著名な自然法学者 Wolfgang Adam Lauterbach (1618-1678) はその先祖である。父は、植物学者

31) Landau, Peter, Seydel, Max von, NDB 24 (2010), S.288f.; Nawiaskyの追悼記事 (Max von Seydel, 1953) がある。Bosls bayerische Biographie, 8000 Persönlichkeiten aus 15 Jahrhunderten, (hrsg. v. Bosl), 1983, 725; Stolleis, Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland, Bd. 2, Staatsrechtslehre und Verwaltungswissenschaft 1800-1914, 1992, 287ff., 366; ders., Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland, Bd. 3, Staats- und Verwaltungsrechtswissenschaft in Republik und Diktatur 1914-1945, 1999, 133; DBE 9 (1998), 297.

32) Miller, Max, Bolz, Eugen, NDB 2 (1955), S. 437; DBE 2 (1995), 13.

であった (Dr. Carl Lauterbach)。1913年から、法律学、国民経済学を、プレスラウ大学で学んだ。1914年には、兵役に服し、1920年に、第一次国家試験に合格。1923年に、プレスラウ大学の Rudolf Leonhardの下で学位。1923年に、第二次国家試験に合格し、1924年に、ドレスデンの企業の法律顧問となった。1927年に、ベルリンの裁判所試補。1929年に、ベルリンI のラント裁判所裁判官、Berlin-Mitteの区裁判官、1934年に、ベルリンの宮廷裁判所の補助裁判官、1936年に、宮廷裁判所の裁判官。終戦時に、裁判官をやめた。1947年に、イギリス地区の司法中央部で、民事の参与となった。1948年に、ハンブルクの上級政府顧問官、裁判官となった。1950年に、高裁裁判官。1952年に、ハンブルクの高裁長官。1961年に退職した。1973年に、リューベックで亡くなった³³⁾。専門は、民法、民訴法、国際法である。

Leske/Loewenfeldの Rechtsverfolgung im internationalen Verkehr, 1930 (改版 1963) や、Palandtの BGBコンメンタールにも寄稿している。

Baumbach/Lauterbach, Zivilprozessordnungは、18. A. 1947 から 48. A. 1990

- 33) Juristen im Portrait 1988, 511 (Albers). 顕彰記事がある。NJW 1963, 1817 (Danckelmann); NJW 1968, 1920 (Zweigert). 追悼記事は、NJW 1973, 650 (Danckelmann); JZ 1973, 430 (Beitzke).

先祖の Wolfgang Adam Lauterbach (1618.12.27-1678.8.18) は、著名な自然法学者である。1618年に、Schleiz (Vogtland) で生まれた。父は、市長であった。イエナ、ライプツヒで法律学を学び、1647年に、学位。1648年に、チュービンゲン大学教授。学長。1658年に、大学監督官 (Inspektor Collegium illustre)。ヴェルテンベルクの宮廷裁判所の陪席。1677年に、枢密顧問官。宗務局長。1678年に、シュトゥットガルト近郊の Schloss Waldenbuch で亡くなった。専門は、私法である。

死後に出版された Compendium iuris (hrdg. v. Schütz), 1679.

Collegium theoretico-practicum ad quinquaginta pandectarum libros (hrsg. v. Lauterbach U.), Bd. 1ff. 1690ff.

Vgl. Luig, Klaus, Lauterbach, Wolfgang Adam, NDB 13 (1982), S.736ff.; Eisenhart, August Ritter von, Lauterbach, Wolfgang Adam, ADB 18 (1883), S. 75ff.; DBE 6 (1997), 273; Döhring, Geschichte der deutschen Rechtspflege, 1953, 415; Kleinheyer/Schröder, aa.O. (前注27)), S.493.

まで出ている 74. A. 2016がある。

(7) 本稿では、あまり立ち入りえないが、ユダヤ関係では、公的な報告書が多数ある。連邦レベルのものに限らず、州などによる地域研究や統計もある。比較的言及したことのあるものとしては、ラインラント・ファルツ州の以下の報告書がある（前述Ⅱ7(4)(a)参照）。1930年代の原資料も多数引用されている。

Justiz im Dritten Reich, Justizverwaltung, Rechtsprechung und Strafvollzug auf dem Gebiet des heutigen Landes Rheinland-Pfalz, Teil 1, 1995; Teil 2, 1995. (Schriftenreihe des Ministeriums der Justiz 3).

個人や大学、団体（弁護士会や公証人団体など）による第三帝国時代の司法に関する文献も多数あるが、本稿では立ち入りえない。

裁判所に特化した研究もある。Schiller, Das Oberlandesgericht Karlsruhe im Dritten Reich, 1997 (Schriften zur Rechtsgeschichte ; Heft 69).

8 スティンツィング ((Johann August) Roderich von Stintzing, 1825.2.8-1883.9.13, Geschichte der deutschen Rechtswissenschaft, 1880/98)

(1) これは、ドイツ法史に登場する法学者を中心とした歴史である。事典ではないが、法学者の経歴や業績を中心とした記述であり、法学者の人物を知るうえで、欠かせない著作となっている。スティンツィングにより書かれ、ランズベルクにより継続された。近時、種々の小型の評伝が出版されるまでは、人名を調べるには、ほとんど唯一の包括的な著作であった。

① Abt.1 und 2, 1880 (Neud.1978)

Abt.1 von Stintzing, bis zur ersten Hälfte des 17.Jh. 【17世紀前半まで】

Abt.2 von Stintzing, hrsg.v.Landsberg, 2.Hälfte des 17.Jh. 【17世紀後半】

② Abt.3 Halbband 1, Text und Noten, von Landsberg, Das Zeitalter des Naturrechts (Ende 17 bis Anfang 19.Jh), 1898 (Neud.1978)

【17世紀末から19世紀初頭、自然法の時代】

③ Abt.3 Halbband 2, Text von Landsberg, 19.Jh bis etwa 1870, 1910 (Neud.1978) 【19世紀の1870年ごろまで】

④ Abt.3 Halbband 2, Noten von Landsberg, 1910 (1978) 【注である】

この④は、かなり詳細な人名録となっている。

(2) スティンツィングは、1825年に、ハンブルクの Altona で生まれた。父は医師であった。イエナ、ハイデルベルク、キール、ベルリンの各大学で法学を学び、1849年に Plön で弁護士、公証人となった。1852年に、ハイデルベルク大学で学位をえた (Über bona fides und titulus in der Usukapionslehre, 1852)。ハビリタチオンを取得し、1854年に、バーゼル大学で正教授となった。1857年に、エルランゲン大学教授、1870年に、ボン大学教授となった。1883年に、バイエルン南端のOberstdorf(オーストリアとの国境、アルプス) で、山岳事故のために亡くなった。専門は、法史である³⁴⁾。

今日では、上記のGeschichte der deutschen Rechtswissenschaft, 1880/98 (Landsberg E.により継続)により、著名である。近代ドイツの法学者や学説史を参照するには不可欠の著作となっている。

Das Verhältnis der legis actio sacramento zu den Verfahren durch sponsio praeiudicialis, 1853.

Ulrich Zasius - ein Beitrag zur Geschichte der Rechtswissenschaft im Zeitalter der Reformation, 1857.

Friedrich Carl von Savigny - ein Beitrag zu seiner Würdigung, 1862.

Geschichte der populären Literatur des römisch-kanonischen Rechts in Deutschland, 1867.

Das Sprichwort Juristen böse Christen in seinem geschichtlichen Bedeutungen, 1875.

Macht und Recht, 1876.

34) Vgl. Müllenbach B., Zum 100. Todestag von Roderich von Stintzing, ZRG GA 101 (1984), 312; Bosls bayerische Biographie, 8000 Persönlichkeiten aus 15 Jahrhunderten, (hrsg. v. Bosl, Karl), 1983, S.757; Wendehorst, Geschichte der Universität Erlangen Nürnberg 1743-1993, 1993; ADB 36, 249ff.

スティンツィングについては、ほかに、Georg Friedrich Stintzing (1793-1835, DBA 1229,357-359, DBI 4, 1982a)、Wolfgang Stintzing (1856-?, DBA 1229,367, DBI 4, 1982a) がいる。

(3) ランズベルク (Ernst Landsberg, 1860.10.12-1927.9.29) は、1860年に、ラインラントの Stolberg でユダヤ系の家系に生まれた。父は、エンジニアであった (Elias Landsberg、マインツ出身)。1876年から、ボン大学で法律学を学んだ。師は、Endemann, Haelschner, Hüffer, Loersch, Ritter von Schulte, von Stintzingなどであった。1878/79年、ライプツヒ大学でも学び、1879年に、ボン大学に戻り、1879年に、19歳で第一次国家試験に合格、1879年に学位をえた (成績は、cum laude で、賞をとった。Über die Entstehung der Regel Quidquid non agnoscit glossa non agnoscit forum, 1879)。アーヘンで修習生となり、Colmarで兵役に服した。1882年に、ボン大学でハビリタチオンを取得した (Die Glosse des Accursius und ihre Lehre vom Eigenthum, 1883)。まだ、22歳であった。ボン大学で最初のユダヤ系の法学のハビリタチオン取得者であった。師は Stintzing であった。1883年に、第二次国家試験に合格し、1885年に、ハビリタチオンの対象を刑法にも拡大した (Über die heutige Anwendbarkeit der actio iniuriarum aestimatoria, 1885。これは、刑法のためのハビリタチオン論文である。1887年に、員外教授となり、1891年から、Stintzingの Geschichte der deutschen Rechtswissenschaftを改訂した。1895年に、予算内の員外教授となり、Wilhelm Endemannの後継となった (1875-1895年、ボン大学教授。Studien in der römisch-kanonistischen Wirtschafts- und Rechtslehre Bd. 1f. 1874ff.で著名。同名のFriedrich Endemannは、ハイデルベルク大学教授である。こちらは、Lehrbuch des bürgerlichen Rechts Bd. 1ff. 1896ff., 9. A. 1909で著名)。1899年に、員外の正教授、1922年に、正規の正教授となった。1927年に、心筋梗塞のためボンで亡くなった。専門は、ローマ法、法史である³⁵⁾。

Muther Theodor Johannes Urbach, (hrsg.) 1882.

Iniuria und Beleidigung, 1886.

35) Vgl. Gedächtnisschrift für Ernst Landsberg (hrsg. v. Anna Landsberg/Paul Landsberg) 1953; Kleinheyer/Schröder, aa.O. (前注27)), S.491f.; DBE 6 (1997), 219; NDB 13, 511f.; 最近のモノグラフィーでは、Siebels Volker, Ernst Landsberg (1860-1927), 2011 (著作目録が付されている)。

Die questiones des Azo, 1888 (bzw. Die questiones des Azo).

Die sogenannten Commissivdelikte durch Unterlassung im deutschen Strafrecht, 1890, Neud. 1995.

Geschichte der deutschen Rechtswissenschaft, Abt. 3 1898/1910, Neud.1957.

Das Recht des Bürgerlichen Gesetzbuches, 1904.

Der Geist der Gesetzgebung in Deutschland und Preußen 1883-1913, 1913.

Die Gutachten der rheinischen Immediat-Justiz-Kommission und der Kampf um die rheinische Rechts- und Gerichtsverfassung 1814-1819, 1914, Neud.2000.

(4) 同名のランズベルクで著名なのは、ワイマール共和国の政治家で、司法大臣となった O.ランズベルク (Otto Landsberg, 1869.12.4-1957.12.9) である。こちらは政治家である。

彼は、上シレジアの Rybnik で生まれた。父は医事顧問官であった。ベルリン大学で法律学を学び、1895年に、マゲデブルクで弁護士となった。1890年からSPD に属する。1912/18 年に、ライヒ議会議員、1919年に、国民議会議員、ライヒ司法省の次官、ライヒ司法大臣、ヴェルサイユ条約に反対して辞任、1920年に、ブリュッセル大使、1924年に、ライヒ議会議員、弁護士、1933年にオランダに亡命した。1957 年に、ユトレヒト近郊の Baarn で亡くなった³⁶⁾。

9 クラインハイヤー・シュレーダー

(1) ドイツの法学者の簡易な辞典である。初版の邦訳がある（この本については、後述 (6) 参照）。以下は、クラインハイヤー・シュレーダーに関する法学者の系譜である。

著名なゾームの弟子に、リーチェルがおり、そのリーチェルの弟子に、プラニッツがいる。プラニッツの弟子に、ゲッシャーがおり、そのゲッシャーの弟子に、コンラートがいる。コンラートの弟子にあたるのが、クラインハイヤーである。

クラインハイヤーは、ボン大学教授で、ほぼ100 年前のランズベルクも、ボ

36) 【法実務家】208 頁。

ン大学の教授であった。ボン大学には、長い法制史の伝統がある。

(2) リーチェル (Siegfried Rietschel, 1871.2.18-1912.9.20)

彼は、1871年に、ザクセンの Rüdigsdorf で生まれた。父は、プロテスタントの神学者 Georg Rietschelであり、母も、牧師の娘であった (Karoline Müllensiefen)。1889年から、マールブルク大学とライプチッヒ大学で、歴史と法律学を学んだ。ライプチッヒ大学では、Wilhelm Arndt と Rudolph Sohm に学び、1893年に Rudolph Sohm の下で学位をえた (Die Civitas auf deutschem Boden bis zum Ausgange der Karolingerzeit, 1894)。1895年に、修習生となり、1897年に、ハレ大学でハビリタチオンを取得した (Markt und Stadt in ihrem rechtlichen Verhältnis, 1897)。専攻は、ドイツ法史、私法、国法学、教会法である。1899年にチュービンゲン大学で員外教授となり、1900年に、正教授となった。プラニッツの師である。1912年に、チュービンゲンで病気のため亡くなった³⁷⁾。まだ、41歳であった。

Das Burggrafenamt und die hohe Gerichtsbarkeit in den deutschen Bischofstädten während des früheren Mittelalters, 1905.

Festgabe der Tübinger Juristenfakultät für Friedrich von Thudichum (hrsg.), 1907, Neud. 1979.

(3) プラニッツ (Hans Planitz, 1882.5.4-1954.1.16)

プラニッツは、1882年に、ドレスデン近郊の Kaditz で生まれた。父の家系は16世紀まで遡るマイセンの手工業者の家系である。父は牧師であった。1897年から、チュービンゲン、ライプチッヒの各大学で法律学を学んだ。前者では、Siegfried Rietschel に、後者では、Karl Lamprecht に学んだ。短期間法実務をして、1906年に、ライプチッヒ大学で学位をえた (Das Wesen des kaufmännischen Zurückbehaltungsrechtes geschichtlich entwickelt, 1906)。1909年に、ライプチッヒ大学でハビリタチオンを取得し (Die Vermögensvollstreckung im deutschen mittelalterlichen Recht, 1912)、員外教授となった (著作権法)。1913年に、バーゼル大学で、Andreas Heusler の

37) 追悼記事がある。ZRG GA 33 (1912), VII (Schultze).

後継となった。1914年に、新設のフランクフルト（マイン）大学教授、兵役に服し、馬蹄で蹴られ心臓に障害をうけた。1919年に、新設のケルン大学の教授、1928/29 年に、学長。1941年に、ウィーン大学教授、1953年に定年となった。専門は、法史、民法、商法である。オーストリア学術アカデミーの会員、バイエルン学術アカデミーの会員、1952年に、ケルン大学の哲学の名誉博士号をうけた。1954年に、心臓病で亡くなった³⁸⁾。

Grundzüge des deutschen Privatrechts, 1925, 2. A. 1931, 3. A. 1949.

Germanische Rechtsgeschichte, 1936, 2. A. 1941, 3. A. 1944.

Die Kölner Schreinsbücher des 13. und 14. Jahrhunderts, 1937.

Quellenbuch der deutschen österreichischen und Schweizer Rechtsgeschichte, 1948.

Grundzüge des deutschen Privatrechts, 1949.

Deutsche Rechtsgeschichte, 1950.

Planitz / Buyken, Bibliographie zur deutschen Rechtsgeschichte, 1952.

Die deutsche Stadt im Mittelalter, 1954, 2. A. 1954, 5. A. 1980, Neud. 1997.

(4) ゲッシャー (Franz Gescher, 1884.7.1-1945.10.15)

ゲッシャーは、1884年に、エッセンで生まれた。1923年に、ケルン大学でハビリタチオンを取得し、1930年に、プレスラウ大学で正教授となった。この時期に、コンラートの師であった。第二次世界大戦末期の 1945 年に、東からの逃亡中に、シレジアの Bad Kudowa で亡くなった。専門は、ドイツ法、法史である。カノニストでもある³⁹⁾。

(5) コンラート (Hermann Conrad, 1904.10.21-1972.3.18)

1904年に、ケルンで生まれた。ライン・カトリックの法律家の家系であった。祖父は、高裁判事であった。父 Paul Conradは、戦時裁判官や行政官吏をした。ケルンのギムナジウムを出たが病気をして、1925年から、ケルン大学で法律学

38) 自伝がある Autobiographie, in Österreichische Geschichtswissenschaft der Gegenwart in Selbstdarstellungen (geleitet v. Grass), 1951, Bd. 1, 137. 追悼記事として、ZRG GA 71 (1954), XIII (Conrad).

39) Vgl.ZRG KA 65,354.

を学んだ。師は、Franz Gescher で、1928年に、第一次国家試験に合格、1930年に、ケルン大学で、学位をえた (Die iurisdictio delegata im römischen und kanonischen Recht, 1930)。主査は、Franz Gescher で、カノン法や神学に興味をもった。助手となり、1932年に、ベルリンで、第二次国家試験に合格した。短期間、Köln-Mülheimの区裁判官、1932/37年に、ケルン大学助手 (師は Hans Planitz, Hans Carl Nipperdey)。1935年に、ケルン大学でハビリタチオンを取得した (ドイツ法史、ドイツ私法、民法。論文、Liegenschaftsübereignung und Grundbucheintragung in Köln während des Mittelalters, 1935)。1936年に、私講師となり、ロシュトック、フライブルク (ブライスガウ) でも教えた。1940/41年には、ブレスラウ大学で教えた。ケルン大学で員外教授となり、1941年に、マールブルク大学で正教授となった。1945年に、マールブルク大学の執行部、非ナチス化運動にあい、1948年に、ボン大学教授。クライハイヤーは、ボン時代の弟子である。1972年に、循環器不全のために、ボンで亡くなった。専門は、ドイツ法、民法、法史である。1965年にボルドー大学、1966年にインスブルック大学の名誉博士号をうけた⁴⁰⁾。

Deutsche Rechtsgeschichte, Bd. 1, 1954, 2. A. 1962.

Deutsche Rechtsgeschichte, Bd. 2, 1966

ドイツ民法典制定の第2委員会の非常勤委員で、ハレ大学教授のコンラート (Johannes Ernst Conrad, 1839.2.28-1915.4.25) とは関係がない (独法119号190頁)。

(6) クラインハイヤー (Gerd Kleinheyer, 1931.8.2-) は、1931年に、ベルリンで生まれた。1959年に、ボン大学で学位をえて (Staat und Bürger im Recht, 1959)、1967年に、ボン大学の Hermann Conrad の下でハビリタチオンを取得した (Vom Wesen der Strafgesetze in der neueren Rechtsentwicklung, 1968)。1967年に、レーゲンスブルク大学の正教授となった。1973年に、ボン

40) 追悼記事として、ZRG KA Bd. 89 (1972), 499 (Bader), ZRG GA 90 (1963), 487 (Kleinheyer); Beiträge zur Rechtsgeschichte (Gedächtnisschrift, hrsg. v. Kleinheyer /Mikat), 1979 (文献目録S.621ff.); Dedenkrede Karl Siegfried Baders in Bonn 17. 11. 1972, (in) Die deutsche Rechtsgeschichte in der NS-Zeit 1995, 327.

大学教授。同大学で定年となった。70歳の祝賀論文集がある⁴¹⁾。Festschrift für Gerd Kleinheyer zum 70. Geburtstag, (hrsg. v. Dorn /Schröder J.) 2001.

Die kaiserlichen Wahlkapitulationen, 1968.

Akkusationsprozess und peinliche Frage, 1971.

Das allgemeine Landrecht für die Preußischen Staaten, 1995.

シュレーダーとの共著、「5 世紀間の法学者」は、当初ドイツ人法律家のみを対象としていたが、4 版から時代と地域を拡大して、広くヨーロッパの法律家を対象として、法の歴史を学ぶ者の座右の書となっている。

Kleinheyer /Schröder, Deutsche Juristen aus fünf Jahrhunderten, 1976, 2. A. 1983, 3. A. 1989.

Kleinheyer /Schröder, Deutsche und europäische Juristen aus neun Jahrhunderten, 4. A. 1996, 5. A. 2008, 6.A. 2017.

(7) シュレーダー (Jan Schröder, 1943.5.28-) は、1943年に、ベルリンで生まれた。1962年から、チュービンゲン、ミュンヘン、ボン、ハンブルクの各大学で法律学を学び、1966年に、第一次国家試験に合格し、1969年に、ハンブルク大学の Eberhard Schmidhäuser の下で学位をえた (Der bedingte Tatentschluss, 1969)。1972年に、第二次国家試験に合格し、レーゲンスブルク、ボン大学で、学術助手となった。1978年に、ボン大学の Gerd Kleinheyer の下で、ハビリタチオンを取得した (Wissenschaftstheorie und Lehre der praktischen Jurisprudenz auf deutschen Universitäten an der Wende zum 19. Jahrhundert, 1979)。1982年に、ボーフム大学教授、1989年に、チュービンゲン大学の正教授となった。2008年に、定年となった。民法、ドイツ法史を専門とする。ZNR の共同編者である。ストックホルム大学の名誉博士号をうけた⁴²⁾。祝賀論文集がある。Festschrift für Jan Schröder zum 70. Geburtstag am 28. Mai 2013 (hrsg. v. Kiehle /Mertens /Schiemann) 2013.

Kleinheyer /Schröder, Deutsche Juristen aus fünf Jahrhunderten, 1976, 2. A.

41) Who's who, S.343; Vgl. Kürschner 1970, 2005.

42) Who's who, S.638; Kürschner 2005.

1983, 3. A. 1989. 以下は、本書の対象をドイツ以外のヨーロッパにも拡大した改版である。

Kleinheyer /Schröder, Deutsche und europäische Juristen aus neun Jahrhunderten, 4. A. 1996, 5. A. 2008. (上述 (6))

Gesetzesauslegung und Gesetzesumgehung, 1985.

Justus Möser als Jurist, 1986.

40 Jahre Rechtspolitik im freiheitlichen Rechtsstaat, 1989.

Christian Thomasius und die Reform der juristischen Methode, 1997.

Recht als Wissenschaft, 2001, 2. A. 2012.

Gesetz und Naturgesetz in der frühen Neuzeit, 2004.

Verzichtet unser Rechtssystem auf Gerechtigkeit?, 2005.

Rechtswissenschaft in der Neuzeit, (hrsg. v. Finkenauer /Peterson /Stolleis), 2010.

Theorie der Gesetzesinterpretation im frühen 20. Jahrhundert, 2011.

(8) シュレーダーという法律家は3人おり、以下は、別のシュレーダーである。

Rainer Schröder, Angela Klopsch, Kristin Klebert (hrsg.), Die Berliner Juristische Fakultät und Ihre Wissenschaftsgeschichte von 1810 bis 2010, 2010. (III 1 (1)参照)。

R.シュレーダー (Rainer Schröder, 1964-) は、1964年に生まれた。ミュンスター大学で、法律学、政治学、哲学などを学んだ。1998年に、同大学で学位をえて (Rechtsfrage und Tatfrage in der normativistischen Institutionentheorie Ota Weinbergers, 2000)、2006年に、ハビリタチオンを取得した (Verwaltungsrechtsdogmatik im Wandel, 2007)。2007年、ドレスデン工科大学の講師。行政法、法史が専門である⁴³⁾。

43) Who's who, S.638. 政治家のシュレーダー (Gerhard Fritz Kurt Schröder, 1944.4.7-) は、長期のコール政権のあと (1990年に再統一)、1998年に、SPD 政権を樹立し (第7代連邦首相)、2004年に、メルケル連立政権に代わった (2021年までのメルケル政権の安定は、シュレーダー政権による構造改革の成果ともいえる。もっとも、日本

Storr /Schröder, Allgemeines Verwaltungsrecht, 2010.

(9) Klaus-Peter Schroeder, „Eine Universität für Juristen und von Juristen“, Die Heidelberger Juristische Fakultät im 19.und 20.Jahrhundert, 2010.

(a) K.-P. シュレーダー (Klaus-Peter Schroeder, 1947.2.24) は、1947年に、ハイデルベルクで生まれた。1966年から、法律学を学び、1970年に、第一次国家試験に合格し、1973年に、第二次国家試験に合格した。1973年に学位をえて (Wimpfen - Verfassungsgeschichte einer Stadt, 1973)、1974年から2006年に、JuS の編者 (Schriftleiter Juristische Schulung)、1989年に、ハビリタチオンを取得した (Das alte Reich und seine Städte, 1991)。1991年に、私講師となり、1996年に、ハイデルベルク大学の員外教授。冒頭の、19世紀から20世紀のハイデルベルク大学の法学者に関する著述で名高い⁴⁴⁾。

Vom Sachsenspiegel zum Grundgesetz, 2001, 2. A. 2011.

(b) Vom Sachsenspiegel zum Grundgesetz, Eine deutsche Rechtsgeschichte in Lebensbildern, 2001では、歴史上著名なEike von Reggow, Ulrich Zasius, Johann Freiherr von Schwarzenberg, Samuel von Pufendorf, Anton Thibaut, Robert von Mohl, Gottlieb Planck, Aodlf Wach, Erwin Bumke, Hilde Benjamin, Carlo Schmidが対象とされている。

10 ユダヤ系法学者に関する Heinrichs, Franzki, Schmalz, Stolleis, Deutscher Juristen jüdischer Herkunft, 1993

この編者のうち、すでにふれたフランクフルト大学教授の Stolleis (前述Ⅱ 6)を除いた者についてふれる。この著作には、翻訳「ハイリッヒスほか・ユダヤ出自のドイツ法律家」(2012年、森勇ほか訳)がある(なお、前述7(4)参照)。

ほどではないが、経済格差がもたらされた。【倫理】243頁以下参照)。ドイツの首相には、議会の解散権がないことから、内閣信任案を与党に否決させることで(与党は欠席。空の議場は当時話題となった)、不信任による解散をした。4年(2期で8年)の任期を全うするのが通例のドイツの首相では例外的存在となった。同名のGerhard Schröder, 1910.9.11 - 1989.12.31) は、CDU の政治家で、外務大臣や国防大臣をした。

44) Who's who, S.639.

(1) ハインリヒス (Helmut Heinrichs, 1928.1.13-) は、元高裁長官、ブレーメン大学の名誉教授である。ドイツには、Döringなど、深い学識のある裁判官が多い。裁判官の数も多く、日本の裁判官のように過重な負担をおっていないこともあり、著述にいそしむ者もいる。

1928年に、ブレーメンで生まれた。キール大学で法律学を学び、1952年に、第一次国家試験に合格、1956年に、第二次国家試験に合格した。1956年に、ブレーメンで裁判官となり、1973年に、ブレーメンのラント裁判所所長、1981年に、ブレーメン高裁の長官となった。1992年に退職した。ミュンヘン大学の名誉博士、ブレーメン大学の名誉教授。1982年には、債務法改正委員会の委員となった。2001年には、連邦と州の債務法現代化の作業グループで、給付障害法の委員となった⁴⁵⁾。

パーラント (2021年から、グリュネベルクに改称)・コンメンタール、およびミュンヘナー・コンメンタールに執筆している。

Palandt, Bürgerliches Gesetzbuch (Allgemeiner Teil - Allgemeines Schuldrecht ABGB Fernabsatzgesetz), 27. A. 1968, 63. A. 2003.

Münchener Kommentar zum BGB, Allgemeines Schuldrecht, 1978ff.

共著として、Aktuelle Rechtsfragen zur Freizeichnung nach dem AGB-Gesetz 1985., Freizeichnungen im Bankrecht, 1987 などがある。

45) Who's who, S.256. なお、ライヒ大審院の裁判官については、その設立50周年の祝賀録に、その時までの387裁判官の網羅的な記録がある。Lobe, Fünfzig Jahre Reichsgericht am 1. Oktober 1929, 1929. 裁判官のほか、院長、部長、ライヒ大審院付きの弁護士、大審院内に設置された国家裁判所、懲戒裁判所、名誉裁判所、労働裁判所の裁判官もわかる (正規の裁判官は、1945年までに468人である)。ライヒ大審院の前身のライヒ上級商事裁判所の29裁判官、長官、部長も記述されている。S.337ff. ライヒ労働裁判所の名誉裁判官で唯一の女性裁判官Katharina Müllerも記録されている。S.436. 1927年7月1日の発足時に任命された。使用者側の者は、企業の管理職、法律顧問、司法顧問官 (弁護士)、大土地所有者などであるが、労働者側の者には、労働組合と秘書の肩書が多い。ライヒ大審院内に設置された国家裁判所や労働裁判所については、【歴史】661頁以下参照。これらは、戦後の連邦憲法裁判所や連邦労働裁判所の前身となっている。

記念論文集 *Recht im Spannungsfeld von Theorie und Praxis*, Festschrift, (hrsg. v. Heldrich /Schlechtriem /Schmidt E.), 1988. および、顕彰文 NJW 1998, 288 (Medicus Dieter), NJW 2003, 189 (Heldrich Andreas), NJW 2008, 135 (Schmidt Eike) がある。

(2) 共編者のフランツキ (Harald Franzki) は、元高裁長官、シュマルツ (Klaus Schmalz) は、連邦弁護士会の名誉総裁である。

(3) ユダヤ系法律家については、ナチスの時代の迫害との関係で、亡命法律家についての研究がまとまっている (前述II 7 (4))。また、日本のお雇い外国人の中のユダヤ系の者については、【法学上の発見】182頁、独法103号25頁以下、75頁。

Ⅲ 大学史、社史、各国史などに特化した研究

1 ベルリン大学の200 年史に関する人物

19世紀に設立されたベルリン大学の歴史は、わずか200年にすぎないが⁴⁶⁾、多くの大学は、400 年や500 年の記念論文集を有している。ヨーロッパの大学の起源は古いことから、1500年ごろの創設だと、2000年には、容易に500 周年となる。なお、ベルリン大学の歴史については、【法律家の歴史】401 頁参照。

Stefan Grundmann, Michael Kloepfer, Christoph G.Paulus, Rainer Schröder, Gerhard Werle, Festschrift 200 Jahre Juristische Fakultät der Humboldt-Universität zu Berlin, Geschichte, Gegenwart und Zukunft, 2010.

(1) グルントマン (Stefan Grundmann, 1958.6.1-) は、1958年に、ミュンヘンで生まれた。ミュンヘン大学のほか、Aix-en-Provence, Lausanne, Lissabon, Berkeley の各大学で、法律学、哲学、文化史を学び、1985年に学位をえた (Qualifikation gegen die Sachnorm, 1985)。1987年に、哲学の学位も

46) 他大学については、あまり立ち入らないが、ボン大学関係の文献については、独法120号122頁参照。

えた(Tizian und seine Vorbilder, 1987)。1994年に、ハビリタチオンを取得した。1995年に、ハレ大学教授、2001年に、エルランゲン大学教授、2004年に、ベルリン(HU)大学教授。民法、ヨーロッパ法、銀行法、会社法、国際私法などを専門とする。ヨーロッパ契約法学会(Society of European Contract Law, SECOLA <http://www.secola.org>)を創設し会長となった⁴⁷⁾。

Deutschsprachige Zivilrechtslehrer des 20. Jahrhunderts in Berichten ihrer Schüler (hrsg. v. Grundmann /Riesenhuber), 2007.は、ドイツ語を話す民法学者の評伝である(後述Ⅲ 4)。

① Festschrift 200 Jahre Juristische Fakultät der Humboldt-Universität zu Berlin (hrsg. v. Grundmann /Kloepfer/Paulus /Schröder /Werle), 2010は、ベルリンのフンボルト大学法学部の200年にわたる歴史である。この①は、以下の②と紛らわしい。名称が似ているだけでなく、編者の一部も重複している。

② Schröder, Klopsch, Kleibert (hrsg.), Die Berliner Juristische Fakultät und ihre Wissenschaftsgeschichte von 1810 bis 2010, Dissertationen, Habilitationen und Lehre, 2010. この②も、200年にわたる法学部の歴史である。DVDが付属し、各種の統計が豊富である(後述(6)参照)。

ほかに、以下の著作がある。

Das europäische Bankaufsichtsrecht wächst zum System, 1990.

Systembildung und Systemlücken in Kerngebieten des europäischen Privatrechts (hrsg.), 2000.

Der Treuhandvertrag, 1997.

Europäisches Schuldvertragsrecht, 1999.

Europäisches Kaufgewährleistungsrecht (hrsg.), 2000.

Ebenroth/Boujong/Joost, HGB, 2001 (Bankrecht).

Party Autonomy and Information in the Internal Market (hrsg.), 2001.

Grundmann /Bianca Cesare M., EU-Kaufrechtsrichtlinie, 2002.

Europäisches und internationales Gesellschaftsrecht, 2003.

47) Who's who, S.224; Kürschner 2005.

Europäisches Gesellschaftsrecht, 2004.

Anleger- und Funktionsschutz durch Kapitalmarktrecht (hrsg. v. Grundmann /Schwintowski/Singer/Weber M.), 2006.

Finanzkrise und Wirtschaftsordnung (hrsg. v. Grundmann /Hofmann C./ Möslein), 2009.

Recht und Sozialtheorie im Rechtsvergleich (hrsg. v. Grundmann / Thiessen), 2015.

(2) クレーパー (Michael Kloepper, 1943.9.1-) は、1943年に、ベルリンで生まれた。1962年から、ベルリン (FU) 自由大学で法律学を学び、1967年に、第一次国家試験に合格、1969年に、学位をえて (Grundrechte als Entstehenssicherung und Bestandsschutz, 1970)、第二次国家試験に合格した。1973年に、ミュンヘン大学でハビリタチオンを取得した (Vorwirkung von Gesetzen, 1974)。1974年に、ベルリン自由大学教授、1976年に、トリア大学の正教授となった。1977/96年、ラインラント・ファルツの行政高裁の判事を兼任した (OVG)。1992年に、ベルリン自由大学教授。専攻は、ヨーロッパ法、財政法、国法学、環境法などである。日本にも来たことがある。ローザンヌ、スタンフォードで客員教授。ベルリン学術協会の会長 (1999/2001, Berliner wissenschaftliche Gesellschaft)。祝賀論文集がある⁴⁸⁾。Festschrift für Michael Kloepper zum 70. Geburtstag (hrsg. v. Franzius Claudio u. a.), 2013.

著作には、環境法関係の文献が多い。

Zum Umweltschutzrecht in der Bundesrepublik Deutschland, 1972.

Deutsches Umweltschutzrecht Sammlung des Umweltschutzrechts der Bundesrepublik Deutschland (Lbl.), 1972-1980.

Bibliographie Umweltrecht, 1981.

Chemikaliengesetz, 1982.

Umweltrecht (Messerschmidt K. と共著), 1989, 2. A. 1998 (Brandner T. と共著), 3. A. 2004.

48) Who's who, S.346.

Kloepfer/Vierhaus, Umweltstrafrecht, 1995, 2. A. 2002.

Kloepfer /Heger, Umweltstrafrecht, 3. A. 2014.

Zur Geschichte des deutschen Umweltrechts, 1995.

Innere Pressefreiheit und Tendenzschutz, 1996.

Öffentliches Recht (M. Malornyと共編), 3. A. 1984.

Umweltschutz Textsammlung des Umweltrechts der Bundesrepublik Deutschland, (Lbl.), 36. A. 2002, 48. A. 2007, 52. A. 2009.

Informationsrecht, 2002.

Fortbildungskompetenz der Rechtsanwaltskammern, 2006.

Umweltschutzrecht, 2008, 2. A. 2011.

以下は、国法や公法関係である。

Verfassungsrecht, Bd. I, II, 2010.

Finanzverfassungsrecht, 2014.

Dichtung und Recht, 2008.

以下の共著もある。

Umweltgesetzbuch und Gesetzgebung im Kontext Liber discipulorum (Brandner Thilo, Franzius Claudio, Lewinski Kai von, Meßerschmidt Klaus, Rossi Matthias, Schilling Theodor, Wysk Peter), 2008.

(3) パウルス (Christoph G.Paulus, 1952.9.21-)

1952年に、東フリースラントの Sande で生まれた。1973年から、ミュンヘン大学で法律学を学び、1977年に、第一次国家試験に、1980年に、第二次国家試験に合格した。1981年に、ミュンヘン大学で学位をえて (Richterliches Verfügungsverbot und Vormerkung im Konkurs, 1981)、1983/84年に、カリフォルニアのバークレイで、LL. M.を取得した。1991年に、ミュンヘン大学でハビリタチオンを取得した (Die Idee der postmortalen Persönlichkeit im römischen Testamentsrecht, 1992)。ミュンヘン大学、ハイデルベルク大学、ザールブリュッケン大学などで教え、1992年に、アウグスブルク大学で員外教授となった。1994年に、ベルリン・フンボルト大学の正教授となった。破産法、民法、訴訟法、ローマ法などを専門とする。日本では、おもに詐欺行為取消権

に関するパウルス説で著名である。1998/99 年、国際通貨基金の破産法参与 (insolvenzrechtlicher Berater Internationaler Währungsfonds) をした⁴⁹⁾。

Zivilprozessrecht, 1996, 2. A. 2000, 5. A. 2013.

Römermann / Paulus, Schlüsselqualifikationen für Jurastudium Examen und Beruf, 2003.

Insolvenzrecht, 2009, 2. A. 2012.

Bankenkommnetar zum Insolvenzrecht (hrsg. v. Cranshaw /Paulus / Michel), 2. A. 2012.

(4) ヴェーレ (Gerhard Werle, 1952.3.11-)

1952年に、マンハイムで生まれた。1970年から、ハイデルベルク、チュービンゲンの各大学で法律学を学び、1975年に、第一次国家試験に、1977年に、第二次国家試験に合格。1980年にハイデルベルク大学のKarl Lacknerの下で学位をえた (Die Konkurrenz bei Dauerdelikt Fortsetzungstat und zeitlich gestreckter Gesetzesverletzung, 1981)。1982/89 年、弁護士となった。1988年に、同じくハイデルベルク大学でハビリタチオンを取得した (Justiz-Strafrecht und polizeiliche Verbrechensbekämpfung im Dritten Reich, 1989)。1989年に、エルランゲン大学で教授、1993年に、ベルリンのフンボルト大学で正教授となった。ドイツ刑法、国際刑法、刑訴法などを専門とする。1997/98 年に、DAAD派遣により南アフリカの Western Cape 大学で、DAADの教授となった⁵⁰⁾。

Werle/Wandres, Auschwitz vor Gericht, 1995.

Marxen/Werle, Die strafrechtliche Aufarbeitung von DDR-Unrecht, 1999.

Strafjustiz und DDR-Unrecht - Dokumentation Band 1 Wahlfälschung, 2000.

Völkerstrafrecht, 2003, 3. A. 2012.

Strafjustiz und DDR Unrecht - Spionage, Bd. 4 (hrsg. v. Werle /Marxen), 2003.

49) Who's who, S.509.

50) Who's who, S.779.

MfS-Straftaten (hrsg. v. Marxen /Werle), 2006.

(5) Angela Klopschは、R.Schröderの弟子で、博士取得者であるが、詳細は、不明である。Humboldt Forum Recht, Nr. 4, 2012, S. 33-75に、2人の共著で、Der juristische Dokortitel (法学の学位) の論文を掲載している。

Kristin Kleibertも詳細は不明であるが、NDB上に、Kristin Kleibert, Streit, Josef, NDB 25 (2013), 536 (東ドイツの検事総長) ほかがある。

(6) ベルリン大学の200周年記念には、前述(1)②のSchröder, Klopsch, Kleibert (hrsg.), Die Berliner Juristische Fakultät und ihre Wissenschaftsgeschichte von 1810 bis 2010, Dissertationen, Habilitationen und Lehre, 2010もある。こちらは、DVD付きで、A 1810年から1990年までの学位論文の全リスト、年ごとの数、B 同年のハビリタチオン論文の全リスト、年ごとの数、C 学部長、教授のリストや教授陣に関する統計的数字、D 教育内容(講義数や分野別の数など)、E 1810年から1951年の学生数など、統計的数字やグラフが詳細である。教授や建物の写真もある。法学上の研究にも、たんなる思い付きや推測ではなく、しだいにこうした統計的・実証的検証が必要になるであろう。

統計による数字には興味深いものが多い。たとえばベルリン大学におけるALRの授業数である。1810年からの学期ごとの講義数が分野ごとに明らかであるが、1827年まではALRの講義は1つも行われていない。大学でのALRの講義について、サヴィニーが否定的であったことによるものである(彼は、法典論争ではALRを評価するが、実際には、神聖ローマ帝国型のローマ法に民族精神が宿ると思っていたのである。しかし、現実には、ALRによって変形した普通法が民法典の基礎となった。ヘーゲル流の現実主義である。【歴史】466頁)。二段階、あるいは三段階法曹養成制度の起源の1つにもなっている。ALRはおもに司法研修で教えられたからである。

ALRの講義は、1827/28年の冬学期にようやく週91時間の講義時間中3時間のみが行われた(サヴィニーは、1817年にプロイセン司法省、1819年に上級裁判所判事、1820年に、ALRの改正委員。1842年に大法官、立法担当大臣)。その後も、せいぜい2~5時間である。1860年代に増加し(1861年にサヴィニー死

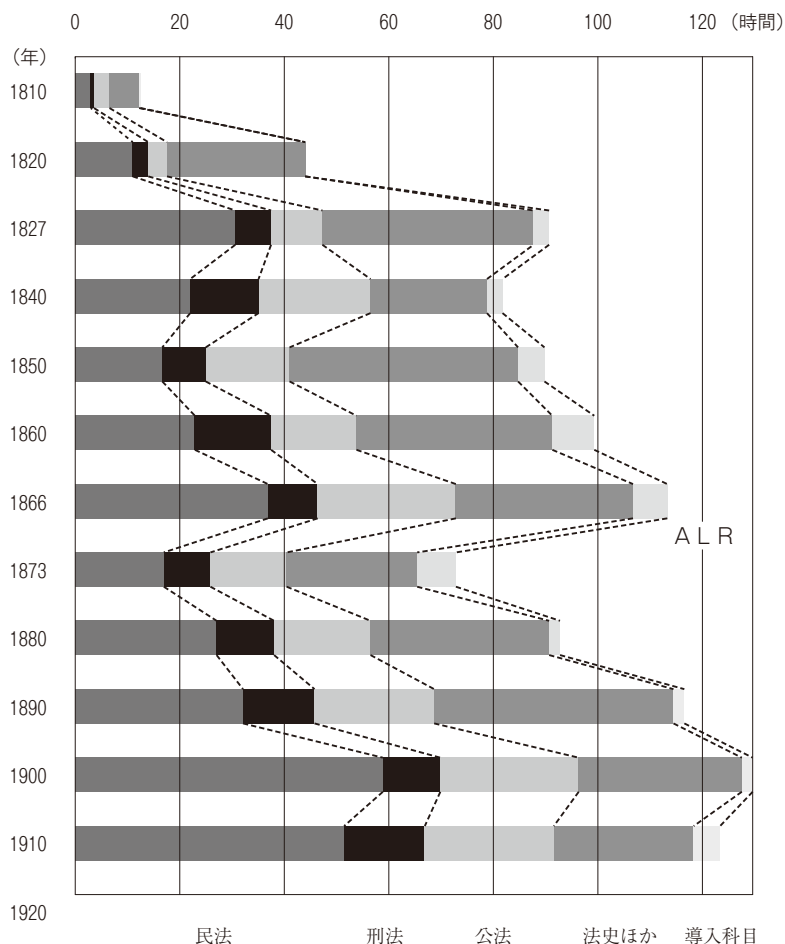
亡)、4~8時間であるが、1873年ごろには減少し、2時間程度となり、1880/81年の冬学期からはゼロとなった。ドイツ民法の編纂作業の進んでいた時期であり、プロイセンにおいてもALRの実務的価値は大幅に減退していたといえる (Vgl.D 10 Gesamtzahl der Semesterwochenstunden im Verhältnis zum Allgemeinen Preußischen Landrecht (ALR))。比較までに、1860年夏の民法法の講義は、23時間 (全99.5時間)、1866年夏では、37時間 (全113.5時間) である。刑事法は、14.5時間と3.5時間 (冬は7.5時間)、公法は、16.5時間と26.5時間である (D 4~6)。さらに、法史 (法哲学を含む) は意外に多く、37.5時間と34時間である。これは、実定法科目以外の多様な科目が法史科目としても算入されているからであろう (年によっては、50時間を超えることもある。1900年以降減少したが、それでも帝政末期でも、おおむね20時間を超えている。D 7)。

このように、パンデクテン法学の時代に、ALRは、プロイセンにおいても、必ずしも評価されていたわけではない。そこで、プロイセンに併合された地域の大学 (たとえばヘッセンのマールブルク大学) にもALRの講義が導入されたが、その勉学の負担はあまり重いものとはならなかったのである (【歴史】86頁、注12参照)。国家試験の対象とはなったが、2万条もある法文の主要部分は、パンデクテン的解釈をほどこされ、普通法に埋没した。ALRの注釈書には、初期の自然法的解釈によるものと、後代の歴史法学的解釈によるものとがあり、解釈学に参照する場合には、厳密に区別する必要がある。また、変化の歴史の変遷は、法史上も重要である。

総時間数にも、年によってかなりの差があることが特徴である。表の順に、12.5; 44; 91; 82; 90; 99.5; 113.5; 73; 93; 116.75; 131; 123.75; 124.75時間である。初期に少ないのは、教授も学生も数が少ないからであるが、その後の変化は、それだけではなく、教授が減っても補充されない、あるいは学生が増加しても教授が増員されないことなども原因となっている。その場合には、多人数講義が行われたのである。逆に、教授数が多い場合には、並行講義も行われた。

1873年に全授業数が減少しているのは、学生数の減少によるものである。1866年、1873年、1880年の全学生数は、それぞれ1916人、1661人、3365人である。

ベルリン大学の(週)講義時間の比較



1880年を転換期として、ALRの講義が消え、1889年から導入科目が新設されたことから（1820年代と1847年、1876年に0.5時間のみ、先例がある）、もともとALR科目には、導入科目的性格があったのかとも思われる。総計2万条と

もいわれるALRは、私法だけではなく、公法をも含めた法律の全体を対象としているからである。もっとも、1880年代は、ALR科目も導入科目もおかれていない。連邦法の整備が進んだことにより、ALR科目の減少は避けられない状況であった（ドイツ民法典第1草案は1888年、第2草案は1896年）。

2 個別の大学史

個別のものは、無数にあるので、一部の大学をあげるにとどめる。歴史の長い大学には、とくに多数ある。時代の節目ごとに、記念出版が行われるからである。最古のハイデルベルク大学やライプツヒ大学は、すでに創設から600年にもなる。100年ごとの記念特集も多い。1900年ごろに500周年となったことから、その当時にも出されたし、550周年の戦後の業績もある。個別の学部や法学部に限定した歴史も多数ある。

(1) 古い大学であるライプツヒ大学には、以下のシリーズがある (hrsg. Franz Häuser, im Auftrag des Rektors der Universität Leipzig)。

Geschichte der Universität Leipzig 1409-2009, Bd.1: Spätes Mittelalter und frühe Neuzeit 1409-1830/31, hrsg.Senatskommission zur Erforschung der Leipziger Universitäts- und Wissenschaftsgeschichte, 2010. (中世後期と近世初期)

Geschichte der Universität Leipzig 1409-2009 Bd.2: Das neunzehnte Jahrhundert 1830/31-1909, hrsg.Senatskommission zur Erforschung der Leipziger Universitäts- und Wissenschaftsgeschichte, 2011. (19世紀)

Geschichte der Universität Leipzig 1409-2009 Bd.3: Das zwanzigste Jahrhundert 1909-2009, hrsg.Senatskommission zur Erforschung der Leipziger Universitäts- und Wissenschaftsgeschichte, 2010. (20世紀)

Geschichte der Universität Leipzig 1409-2009, Bd.4: Fakultäten, Institute, Zentrale Einrichtungen, hrsg. v. Ulrich von Hehl, Uwe John, Manfred Rudersdorf, 2009. (学部やその他の組織)

Geschichte der Universität Leipzig 1409-2009 Bd.5: Geschichte der Leipziger Universitätsbauten im urbanen Kontext, hrsg. Michaela Marek, Thomas

Topfstedt, 2009. (大学建築物)

ライプツヒ大学とライプツヒ市については、これ以外にも、多数の研究があるが、本稿では立ち入りえない。ライプツヒ大学に関する別稿による。

【変容】445頁注72。Bd.1の簡略版もある。Rudersdorf, Weichenstellung für die Neuzeit, Sonderdruck aus Bd.1. Geschichte der Universität Leipzig, 1409-2009, 2009.

(2) ケルン大学の大学史シリーズもかなり大部である。18世紀までの旧大学 (Alte Universität) と1919年に再建された新大学 (Neue Universität) をともに対象に含み、内容的にも、種々の学問領域や、ケルン大学の教員とナチス (Bd.8)、ケルン大学のユダヤ人学生 (Bd.11) といった特殊テーマをも対象とする。

その他の個別の大学についても、特徴ある大学史があり、いちいち立ち入ることはできない。シリーズにならなくても、300年記念や400年記念の祝賀論文集で、大学史を振り返る場合も多い (IV参照)。

1. Die Studentenschaft der Handelshochschule Köln, 1901 bis 1919 / hrsg. Margaret Asmuth, 1985. (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln; Bd. 1).

2. Naturwissenschaften und Naturwissenschaftler in Köln zwischen der alten und der neuen Universität (1798-1919) / hrsg. Martin Schwarzbach, 1985. - (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln; Bd. 2).

3. Die jüngere Geschichte des Anatomischen Instituts der Universität zu Köln, 1919-1984 : 65 Jahre in bewegter Zeit / hrsg. Rolf Ortmann, 1986. (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln; Bd. 3).

4. Hochschulstudium für kommunale und soziale Verwaltung in Köln, 1912-1929 : eine Studie zur Wiedererrichtung der Universität zu Köln / hrsg. Jochen Bolten, 1987. (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln ; Bd. 4).

5. Französische Juristenausbildung im Rheinland 1794-1814 : die Rechtsschule von Koblenz / hrsg. Luitwin Mallmann, 1987. (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln; Bd. 5). ライン左岸は、フランス革命期か

らライン・フランス法の適用領域であり、その法曹養成についてふれる。

6. Betriebswirte in Köln: über den Beitrag Kölner Betriebswirte zur Entwicklung der Betriebswirtschaftslehre / hrsg. Friedrich-Wilhelm Henning, 1988. (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln ; Bd. 6).

7. Kölner Volkswirte und Sozialwissenschaftler: über den Beitrag Kölner Volkswirte und Sozialwissenschaftler zur Entwicklung der Wirtschafts- und Sozialwissenschaften / hrsg. Friedrich-Wilhelm Henning, 1988. (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln ; Bd. 7).

8. Kölner Universitätslehrer und der Nationalsozialismus: personengeschichtliche Ansätze / hrsg. Frank Golczewski, 1988. (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln; Bd. 8).

9. Handelsakademie, Handelshochschule, Wirtschafts- und Sozialwissenschaftliche Fakultät: Der Weg von der Handelsakademie und Handlungswissenschaft des 18. Jahrhunderts zur Wirtschafts- und Sozialwissenschaftlichen Fakultät und Betriebswirtschafts / hrsg. Friedrich-Wilhelm Henning, 1990. (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln ; 9).

10. Humanismus in Köln = Humanism in Cologne / hrsg. James V. Mehl, 1991. (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln; Bd. 10).

11. Jüdische Studierende an der Universität zu Köln: 1919-1934 / hrsg. Peter Lauf, 1991. (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln; Bd. 11).

12. Die wirtschafts- und sozialwissenschaftliche Lehre in Köln: von 1901 bis 1989/1990 / hrsg. Hannelore Ludwig, 1991. (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln; Bd. 12).

13. Die Bursen der Kölner Artisten-Fakultät : bis zur Mitte des 16. Jahrhunderts / hrsg. Götz-Rüdiger Tewes, 1993. (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln; Bd. 13).

14. Naturkunde und Naturwissenschaften an der alten Kölner Universität / hrsg. Gunter Quarg, 1996. (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln; Bd. 14).

15. Das Gymnasium Montanum in Köln, 1550 - 1798: zur Geschichte der Artes-Fakultät der alten Kölner Universität / hrsg. Dorothea Fellmann, 1999. (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln; Bd. 15).

16. Bildnerhochschule und Wissenschaftsanspruch : Lehrerbildung in Köln 1946 - 1965 / hrsg. Ernst Heinen, 2003. (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln; Bd. 16).

17. Ringen um Demokratie : Studieren in der Nachkriegszeit : die akademische Jugend Kölns (1945-1950) / hrsg. Karin Kleinen, 2005. (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln; Bd. 17).

18. Die Universität zu Köln im Übergang vom Nationalsozialismus zur Bundesrepublik / hrsg. Leo Haupts, 2007. (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln; Bd. 18).

19. Wissenschaft mit Zukunft : die "alte" Kölner Universität im Kontext der europäischen Universitätsgeschichte / hrsg. Andreas Speer, Andreas Berger, 2016. (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln; Bd. 19).

なお、Hermann Keussen: Die alte Universität Köln. Grundzüge ihrer Verfassung und Geschichte (Festschrift zum Einzug in die neue Universität zu Köln), 1934もある。これは旧大学の詳細な歴史であり、学長や各学部長、各教授の系譜などの資料も詳細である。

また、より新しいシリーズであるKölner Universitätsgeschichte のシリーズにも、以下がある。

Pabst, Das 19. und 20. Jahrhundert, 1988 (Kölner Universitätsgeschichte ; Bd. 2); Meuthen, Die alte Universität , 1988 (Kölner Universitätsgeschichte ; Bd. 1); Meuthen, Die neue Universität : Daten und Fakten, 1988 (Kölner Universitätsgeschichte ; Bd. 3) などである。

(3) フライブルク (ブライスガウ) 大学のシリーズも、40冊以上になるが、以下の文献は、法学と一般的な分野に関するものだけである (Beiträge zur Freiburger Wissenschafts- und Universitätsgeschichte)。

3. Nauck, Das Frauenstudium an der Universität Freiburg i Br., 1953.

10. Maack, Grundlagen des Studentischen Disziplinarrechts, 1956.
 13. Vincke, Freiburger Professoren des 19. und 20. Jahrhunderts, 1957.
 15. Hans Julius Wolff, Aus der Geschichte der Rechts- und Staatswissenschaften zu Freiburg i. Br., 1957.
 22. Bauer, Aufsätze zur Freiburger Wissenschafts- und Universitätsgeschichte, 1960.
 30. Schott, Rat und Spruch der Juristenfakultät Freiburg i. Br., 1965. 判決団研究である。
 32. Waibel, Die Rechtsprechung auf dem Gebiet des Hochschulrechts Seit 1945 : Zugleich ein Beitrag zur Wissenschaftlichen Bearbeitung des Hochschulrechts, 1966.
 33. Vincke, Zur Geschichte der Universität Freiburg i. Br., 1966.
 38. Merkel, Die Doktorpromotionen der Juristischen Fakultät der Albert-Ludwigs-Universität Freiburg im Breisgau, 1976.
- 個別の研究もある。Zeiler, Frank, Statik und Wandel, Die Freiburger Rechtsfakultät im universitären Expansionsprozess des Deutschen Kaiserreichs. 2009. (新しいシリーズである。Freiburger Beiträge zur Wissenschafts- und Universitätsgeschichte, 5)
- Mertens /Smolinsky, 550 Jahre Albert-Ludwigs-Universität Freiburg, Festschrift, Von der hohen Schule zur Universität der Neuzeit. 1455年設立で、2005年に550周年となったフライブルク大学の記念誌である。2007/07. 304 S. (550 Jahre Albert-Ludwigs-Universität Freiburg, 2). なお、2007年から、Freiburger Rechtswissenschaftliche Abhandlungenのシリーズもある。
- (4) ドイツで最古の大学であるハイデルベルク大学でも、以下がある。同大学そのものについては、【歴史】189頁参照。
- Marcks, Die Universität Heidelberg im 19. Jahrhundert : Festrede zur Hundertjahrfeier ihrer Wiederbegründung durch Karl Friedrich gehalten in der Stadthalle am 7. August 1903, 1903.
- Buselmeier, Harth, Jansen, Auch eine Geschichte der Universität

Heidelberg, 1985, 1986 (2 版).

Weisert, Geschichte der Universität Heidelberg : kurzer Überblick, 1386-1980 , 1983.

Winter, Die Verfassung der Universität Heidelberg: Überblick, 1386-1952, 1974 (Abhandlungen der Heidelberger Akademie der Wissenschaften : Philosophisch-Historische Klasse ; Jg.1974, Abh. 2).

Winters, Die Heidelberger Universität : Ein Stück deutscher Geschichte, 1936.

Hautz, Geschichte der Universität Heidelberg : nach handschriftlichen Quellen nebst den wichtigsten Urkunden, Bd.1, 1862, Bd.2.1864.

Drüll, Dagmar, Heidelberger Gelehrtenlexikon 1386-1651 (Berlin 2002); 1652-1802 (Berlin 1991); 1803-1932 (Berlin 1986); 1903-1986 (Berlin 2009).

Schroeder, Eine Universität für Juristen und von Juristen, Die Heidelberger Juristische Fakultät im 19. und 20. Jahrhundert, 2010.

Edmunds-Trill, Petra, Die Privatdozenten und Extraordinarien der Universität Heidelberg 1803-1860, 1997.

Klaus-Peter Schroeder, Immer gerettet und aufrecht geblieben: Die Juristische Fakultät der kurpfälzischen Universität Heidelberg von ihren Anfängen bis zum Jahr 1802, 2014.

Lukas Ruprecht Herbert, Die akademische Gerichtsbarkeit der Universität Heidelberg: Rechtsprechung, Statuten und Gerichtsorganisation von der Gründung der Universität 1386 bis zum Ende der eigenständigen Gerichtsbarkeit 1867, 2018.

Riese, R., Die Hochschule auf dem Wege zum wissenschaftlichen Großbetrieb, Die Universität Heidelberg und das badische Hochschulwesen 1860-1914, 1977.

Ritter, Die Heidelberger Universität: Ein Stück deutscher Geschichte, 1936.

(5)(a) 以下は、大学に関する歴史的な通史の一部である。個別の大学には、あまり立ち入らないので、これらを出発点とされたい。比較的古いものが多い

が、新しいものでも、戦後の部分は付加が概略にすぎないものが占めており、新たな発見は、比較的乏しい。書籍としては、1900年前後のものは紙質が悪く、崩壊しそうなものも多いことから、復刻もかなり行われている。

Anger, Hans, Probleme der deutschen Universität, 1960.

Becker, H., Gedanken zur Hochschulreform, 1919.

Bornhak, C., Geschichte der preußischen Universitätsverwaltung bis 1810, 1900.

Classen, P., Die ältesten Universitätsreform und Universitätsgründungen des Mittelalters, in Heidelberger Jahrbücher XII, 1968, S.72ff.

Denifle, H., Die Entstehung der Universitäten des Mittelalters, 1885, 2.A., 1956 (復刻版) .

Eulenburg, Fr., Die Frequenz der deutschen Universitäten von ihrer Gründung bis zur Gegenwart, in Abhandlungen der Philologisch-historischen Klasse der Königlich-Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften, Bd.24, II, 1904. 統計的数字が豊富である。

Goldschmidt, L., Rechtsstudium und Prüfungsordnung, Ein Beitrag zur Preußischen und Deutschen Rechtsgeschichte, 1887.

Hoeber, K., Das deutsche Universität- und Hochschulwesen, 1912. 個別の大学の研究がある。S.87ff. 個別の専門大学の研究もある。S.154ff.

Kaufmann, Die Geschichte der deutschen Universitäten, 1888.

Moulin Eckart, Geschichte der deutschen Universitäten, 1929も、大学別の記述であるが、プラハ大学から、新しいボン大学やシュトラスブルク大学までを対象としているが、オーストリアとBasel, Zürich, Bernのスイスの大学を含んでいる。

Paulsen, Geschichte des gelehrten Unterrichts : auf den deutschen Schulen und Universitäten vom Ausgang des Mittelalters bis zur Gegenwart, Bd.1 3. erweit. Aufl. / hrsg. und in einem Anhang fortgesetzt von Rudolf Lehmann, 1919, 1965 (復刻版) .

Paulsen, Die deutschen Universitäten und das Universitätsstudium, 1902.

Quetsch, C., Die zahlenmäßige Entwicklung des Hochschulbesuchs in den letzten fünfzehn Jahren, 1960. 本書でも、統計的資料が豊富である。

Raumer, Die deutschen Universitäten, 1882.

Schnell, Das Unterrichtswesen der Großherzogtümer Mecklenburg-Schwerin und Strelitz, Bd.1, 1907, Urkunden und Akten zur Geschichte des mecklenburgischen Unterrichtswesens, Mittelalter und das Zeitalter der Reformation, (Monumenta Germaniae paedagogica).

Schnell, Das Unterrichtswesen der Großherzogtümer Mecklenburg-Schwerin und Strelitz, Bd.2-3, 1909 (Monumenta Germaniae paedagogica).

Steinmetz, Geschichte der deutschen Universitäten und Hochschulen, 1971.

Zarncke F., Die deutschen Universitäten im Mittelalter, 1857.

(b) また、① Lexis, Die Universitäten im Deutschen Reich, unter Mitwirkung zahlreicher Universitätslehrer, Bd. 1 Die Universitäten, 1904は、序と各学部概観のほか(法学部はS.102ff.)、各論として、各大学の詳細を検討している。S.313ff. また、② Lexis, Die Deutschen Universitäten, für die Universitätsausstellung in Chicago, Bd.1, 1893は、総論のあと、各学部にそくした検討をしている。法学部は、S.279ff. Bd.1は、神学部と法学部、哲学部までであり、Bd.2に自然哲学部を詳細に検討している。自然哲学部の巨大化が反映されている。個別の大学に関する文献は多数にのぼるので、本稿では省略する。

(6) 網羅的な大学関係の文献の検索には、Erman und Horn, Bibliographie der Deutschen Universitäten, Systematisch geordnetes Verzeichnis der bis Ende 1899 gedruckten Bücher und Aufsätze über das Deutsche Universitätswesen, Bd.1 Allgemeiner Teil. 1904; Bd.2 Bosender Teil, 1904 (1899年までの大学ごとの詳細な書誌である。たとえば、ボン大学は比較的新しい大学であるが、25頁になり、ライプツヒ大学は、85頁にもなる); Bd.3, Register, 1905, Neud.1965. 同書は、1900年以前の書誌であるが、この分野の研究の豊富なことに驚かされる。

3 Juristen im Portrait, Verlag und Autoren in Jahrzehnten, Festschrift zum 225jährigen Jubiläum des Verlages C.H.Beck, 1988.

本書は、法律出版社 Beck の創立225 年記念論文集である。ドイツ最大の法律書の出版社 Beck の創設は、1763年 9月 9日とされる。225 年というのは中途半端であるが、創設から本書の出版時までの年数である。初代は、Carl Gottlob Beck (1733-1802) であった。企業のつねとして、しばしば危機にみまわれた。最大のものはナチス期におけるナチスへの傾倒である (Heinrich Beck, 1889-1974)。他方で、ユダヤ系のOtto Liebmannの出版社のシリーズや雑誌 (とくにDJZ, Deutsche Juristenzeitung) の買収に成功した (S.28. これにつき、【大学と法律家の歴史】647 頁)。ベックは、これによってミュンヘンからベルリンへの進出と、法律学の分野への拡大を成し遂げたのである。今日では、オンライン化による業界の再編が課題である。現在のところ、Beck Online は、電子化の波に乗っている。

もっとも、ドイツは出版業においても分権的であるから、少なくとも紙の出版では、フランスでパリに出版が集中するような独占的な地位を占める場所はない。20世紀の前半までは、Beckも、ミュンヘンの地方出版社という感じであった。寡占化がみられるのは、20世紀の末からである。電子化の時代は、ドイツでも寡占の時代でもある (Beckによる他社の吸収)⁵¹⁾。国際的なデータベースは

51) 電子化の時代は、寡占化でもあり、世界的な独占はより苛烈である。出版不況の時代に、世界の大手学術出版社は、30%以上の利益率を確保している。有田正規・学術出版の来た道 (2021年) 1 頁以下。2022年のロシアによるウクライナ侵略以降の物価高騰と円安の影響から、日本の大学は、外国書とデータベースの高騰に悩んでいる。国内でも、とくに法学部では判例データベースの高騰は早からの悩みである。ロースクールの経費では、最大割合を占めている (半分以上となることが多い)。およそデータベースは一度契約すると止められず、毎年の上値に悩むことになる。外国雑誌のデータベースの上値は、全学部に共通した問題である。

世界規模でみると、日本の大学や図書館には自前のものが乏しく、世界的出版社の端末となっているから、そのいいなりになるほかはないのである (図書館側も手間のかからない雑誌データベースの導入に積極的である。将来の利用者は、所有す

さらなる寡占下の状態にある。本書では、社史のほか、Otto Bachof, Johannes Bärmann など、71人の法律家を概観している。

また、Kurzkommentarや他の出版物にまつわるエピソードもあり、出版界の裏事情に関する読み物としても興味深く有益である。ベック社をめぐり近時の話題は、パーラント・民法コンメンタールとシェーンフェルダー法令集の改題（PalandtからGrüneberg、SchönfelderからHabersack）であるが、これについては、独法117号69頁参照。時間的に後のことから、同書の改題についてはふれられてはいない。改題は、基本法のコンメンタール（Maunz/Dürig）や刑法コンメンタール（Schwarz/Dreher）にも及んでいるが、これらはもともと複数人がタイトルに用いられていることから、変遷を重ねていても、あまり目立つことはなかった。いずれも、親ナチスの法律家の名を冠することが、現在では不適切とされたのである。

4 Stefan Grundmann, Karl Riesenhuber, Deutschsprachige Zivilrechtslehrer des 20.Jahrhunderts in Berichten ihrer Schüler, Bd.1, 2007; Bd.2,2010.

これは、それぞれ、20人と23人の比較的新しいドイツ語圏の法学者についてふれている。そのうち、グルントマン（Stefan Grundmann）については、1(1)でふれた。

リーゼンフーバー（Karl Riesenhuber, 1967.5.16- ）は、1967年に、Kufstein

る自前の重要文献の欠如に驚くであろう）。学術リポジトリ（日本では、2006年ごろから）や古い文献のオープン・アクセスは発足が遅く、コンテンツが不足している。パブリック・ドメインの拡充が必要であることは当然として（商業出版に比して遅く、かつ国ごとに分断されている。消極的な大学もある）、最新の学術研究が国費を原資としていながら、商業的に一部の企業に独占されることが問題である。情報技術の独占化については、GAFAが言及されることが多いが、それに限定されるものではなく、国家やその世界的連帯による情報主権の回復が課題である。【変容】v、独法118号54頁。個々の大学や国家では力不足であるから、国際的連携によって、税金を原資とする研究の公開や回復をする必要がある（商業出版によるフリーライドの規制）。

で生まれた。1986年から、フライブルク大学（ブライスガウ）で、法律学を学んだ。1990年に、第一次国家試験に合格し、1991年に、テキサス大学で、M. C. J.を取得し、1994年に、第二次国家試験に合格し、ポツダム大学の Detlev W. Bellingの下で研究員となり、1997年に、学位をえた（Die Rechtsbeziehungen zwischen Nebenparteien, 1997）。2000年に、ケンブリッジ大学の助教（Assistant Lecture）となった。2002年に、エルランゲン大学で、ハビリタチオンを取得した（System und Prinzipien des europäischen Vertragsrechts, 2002）。2004年に、フランクフルト（オーダー）大学で教授となり、2006年に、ボーフム大学教授。専門は、民法、労働法、ヨーロッパ法、経済法などである⁵²⁾。

Europäisches Vertragsrecht, 2003, 3.A. 2013.

Die Auslegung und Kontrolle des Wahrnehmungsvertrags, 2004.

Recht und Praxis der GEMA (hrsg. v. Kreile/Becker/Riesenhuber), 2005, 2. A. 2008.

Europäische Methodenlehre, (hrsg.), 2006.

Wahrnehmungsrecht in Polen Deutschland und Europa, (hrsg.), 2006.

Die Europäisierung des Privatrechts, (hrsg.), 2006.

Systembildung im europäischen Urheberrecht, (hrsg.), 2007.

Die Identität des deutschen und des japanischen Zivilrechts in vergleichender Betrachtung (hrsg. v. Kitagawa/Riesenhuber), 2007.

Privatrechtsgesellschaft (hrsg.), 2008.

Entwicklungen nicht-legislatorischer Rechtsangleichung im Europäischen Privatrecht, (hrsg.), 2008.

Perspektiven des Europäischen Schuldvertragsrechts, (hrsg.), 2008.

52) ボーフム大学に、Riesenhuber のサイトがある。<http://www.ruhr-uni-bochum.de/lr-riesenhuber/> 同人に限らず、所属の教授のHPは充実していることが多い。著名教授では、引退後も大学や関連のInstitutのHPに記録が残されていることも少なくない。ただし、主観的なものであるから、あわせて雑誌の記事や人名辞典などにより検証する必要がある。

Das Prinzip der Selbstverantwortung, (hrsg.), 2011.

Europäisches Vertragsrecht, 2013.

5 その他

そのほかにも、人と業績を知るには、多数の文献がある。代表的なものにふれるにとどめる。

(1) ヴェーゼンベルク (G.Wesenberg) の *Neue deutsche Privatrechtsgeschichte im Rahmen der europäischen Rechtsentwicklung*, 1954, 4.Aufl., 1985 (2 版から, G.Wesener による)。

(a) ヴェーゼンベルク (Gerhard Wesenberg, 1908.10.16-1987.12.6) は、1908年に、Kolberg で生まれた。法律学を学び、1935年に、ケーニヒスベルク大学で学位をえた (*Der Zusammenfall in einer Person von Hauptschuld und Bürgschaftsschuld im klassischen römischen Recht*, 1935)。1936年に、第二次国家試験に合格し、1943年に、チュービンゲン大学でハビリタチオンを取得。1950年に、キール大学で員外教授となった。1956年に、ウィーン大学の員外教授、教授。1987年に、ウィーンで亡くなった。専門は、民法、ローマ法、法史である⁵³⁾。

Verträge zugunsten Dritter, 1949.

Savigny Friedrich Karl von, *Juristische Methodenlehre (nach der Ausarbeitung des Jakob Grimm)*, 1951 (hrsg.).

Neuere deutsche Privatrechtsgeschichte, 1954.

同書 *Neuere deutsche Privatrechtsgeschichte* (Wesenerによる改定), 2. A. 1969, 4. A. 1985.

(b) 上記の本を改定した Wesenerについては、【法実務家】370 頁参照。

(2) エルラー (A.Erler und Ek.Kaufmann) の *Handwörterbuch zur deutschen Rechtsgeschichte*, Bd.1, 1971, Bd.3, 1984. (begründet von W. Stammler, unter philologischer Mitarbeit von R.Schmidt-Wiegand).

53) 追悼記事 ZRG GA RA 75 (1958), 507ff. (Kunkel).

(a) エルラー (Adalbert Erler, 1904.1.1.-1992.4.19) は、1904年に、キールで生まれた。北ドイツの牧師や官吏の家系であった。父は、海軍の将校で、のち提督となった。ベルリンで成長し、ハイデルベルク大学で Hans Fehr に習い、ベルリン大学で、Ulrich Stutz や Ernst Heymann から学んだ。第一次国家試験に合格、1928年に、グライフスヴァルト大学の Günther Holstein (1930 年に死亡) の下で学位をえた (Die Stellung der evangelischen Kirche in Danzig seit dem Jahr 1918, 1929)。1930年に、第二次国家試験に合格。1932年に、プロイセンの財務の役人となった。1934年に、Hanau に越して、同年、Hedwich Marechaux (geb. Schmidt) と結婚した。1939年に、フランクフルト大学の Rudolf Ruth の下でハビリタチオンを取得 (Bürgerrecht und Steuerpflicht im mittelalterlichen Städtewesen, 1939)。1941年に、シュトラスブルク大学で、員外教授となった。兵役についたが、軍務は免れた。1946年に、マインツ大学教授、1950年に、フランクフルト大学教授、1972年に、名誉教授となった。1992年に、フランクフルト (マイン) で亡くなった。専門は、民法、ドイツ法、法史、教会法である。宗旨はプロテスタントである⁵⁴⁾。

70歳の祝賀論文集がある。Rechtsgeschichte als Kulturgeschichte (hrsg. v. Becker / Dilcher), Festschrift, 1976 (業績目録がある。665 頁); Recht Gericht Genossenschaft und Policy (hrsg. v. Dilcher / Diestelkamp), Festschrift, 1986 (業績目録、221 頁)。

Friedlosigkeit und Werwolfglaube, 1940.

Kirchenrecht, 1949, 2. A. 1957, 5. A. 1983.

54) 追悼記事として、NJW 1992, 1869 (Sellert), ZRG KA 79 (1993), 559 (Becker), ZRG GA 110 (1993), 680 (Dilcher); Klee, Das Personenlexikon zum Dritten Reich, 2003, 139.

Kaufmannについては、Catalogus professorum academiae Marburgensis, II 1979, 110f. 70歳の記念論文集 Überlieferung Bewahrung und Gestaltung in der rechtsgeschichtlichen Forschung (hrsg. v. Buchholz / Mikat / Werkmüller), Festschrift, 1993. および追悼記事がある。ZRG GA 129 (2012), 977 (Holzhauer). 【歴史】 439頁。

Das Straßburger Münster im Rechtsleben des Mittelalters, 1956.

Thomas Murner als Jurist, 1956.

Die Mainzer Stiftsfehde 1459-1463 im Spiegel mittelalterlicher Rechtsgutachten, 1963.

Aegidius Albornoz als Gesetzgeber des Kirchenstaates, 1970.

Handwörterbuch zur deutschen Rechtsgeschichte (angeregt durch Stammler Wolfgang) hrsg. v. A.Erler/E.Kaufmann, 1971ff.

Lupa Lex und Reiterstandbild im mittelalterlichen Rom, 1972.

Der Loskauf Gefangener, 1978.

(b) カウフマン (Ekkehard Kaufmann, 1923.2.17-2010.6.26) は、1923年に、フランクフルト (マイン) で生まれた。両親は、ともに自然科学者であった。第二次世界大戦中に兵役につき、アメリカ軍の捕虜収容所。帰還後に、フランクフルト (マイン) 大学で、歴史、哲学、法律学を学び、1950年に哲学の学位 (Geschichte und Verfassung der Reichsdörfer Soden und Sulzbach, 1951, 1981年に再版)、1956年に法学の学位をえた (Die Erfolgshaftung, 1958)。1958年に、フランクフルト (マイン) 大学で、ハビリタチオンを取得 (Aequitatis iudicium - Königsgericht und Billigkeit in der Rechtsordnung des frühen Mittelalters, 1959)。私講師。1963年に、予算外の教授、弁護士となり、1965年に、マールブルク大学の正教授。1991年に、定年。2010年に、マールブルクで亡くなった。専門は、ドイツ史、民法、商法である。

Glaube Irrtum Recht - Zum Lehrzuchtverfahren in der evangelischen Kirche unter besonderer Berücksichtigung des Falles Baumann, 1961.

Deutsches Recht, 1984.

Handwörterbuch zur deutschen Rechtsgeschichte (hrsg. v. Erler / Kaufmann / Werkmüller Schmidt-Wiegand, Bd. 1ff. 1971ff.

(c) なお、カウフマンという者は多い。Arthur Kaufmann (1923.5.10-2001.4.11) は、刑法学者であり、1950年に、アメリカの連合国高等委員会 (Allied High Commission for German) の裁判所の刑事弁護人をした。1952年からカールスルーエのラント裁判官、ハイデルベルク大学で講師もして、1960年に、同

大学でハビリタチオンを取得、同年、ザールブリュッケン大学の正教授。1969年に、ミュンヘン大学に転じ、1989年に定年となった。2001年に、ミュンヘンで亡くなった。

Erich Kaufmann (1880.9.21-1972.11.5) は、ユダヤ系の国法学、行政法の学者であり、ベルリン、ハイデルベルク、ハレ、エルランゲンの各大学で学んだ。ハイデルベルク大学でJellinekに学び、ハレ大学で学位。キール大学でハビリタチオンを取得。1912年に、同大学で員外教授。1913年にケーニヒスベルク大学教授。1917年にベルリン大学教授。1920年ボン大学教授。1927年に、外務省の法律顧問。1934年に、公職を解かれた。1939年に、オランダに亡命。1946年に、帰国し、ミュンヘン大学教授。1972年に、カールスルーエで亡くなった。

【歴史】 438頁参照。

(3) E.ヴォルフ (Erik Wolf, 1902-1977)

Große Rechtsdenker der deutschen Geistesgeschichte, Der deutschen Geistesgeschichte, 4.Aufl., 1963. 古典的な人名評伝である。対象となっているのは、法制史上の著名人である。1.Eike von Repgow, 2. Lupold von Bebenburg, 3.Ulrich Zasius, 4.Johann Freiherr von Schwarzenberg, 5.Johann Oldendorp, 6.Johannes Althusius, 7.Hermann Conring, 8.Hugo Grotius, 9. Samuel Pufendorf. 10.Christian Thomasius, 11.Carl Gottlieb Svarez, 12. Friedrich Carl von Savigny, 13.P.J.Anselm von Feuerbach, 14.Bernhard Windscheid, 15.Rudolf von Jhering, 16.Otto von Gierke など16人である。2, 11は、1944年版で追加された。

筆者のヴォルフ (Erik Wolf, 1902.5.13-1977.10.13) は、1902年に、ヴィースバーデン近郊の Biebrich で生まれた。1902年に、Freiburg (im Breisgau) で亡くなった。祖父の Johannes Jacob Burckhardt は、バーデン出身の法律家であり、父は、化学博士であった。肺結核になり、バーゼルで、家庭教師から学んだ。1920年に、フランクフルト (マイン) でアビトゥーアを取得し、フランクフルト、イエナ大学で、経済学と法学を学んだ。1924年に、イエナ大学で学位をえて (Grotius Pufendorf Thomasius - Drei Kapitel zur Gestaltgeschichte der Rechtswissenschaft, 1924)、1927年に、ハイデルベルク大学で、ラートブルフ

の下でハビリタチオンを取得した(刑法、法哲学, 論文は *Strafrechtliche Schuldlehre*, 1928)。1928年に、ロシュトック大学の正教授となった。1930年に、キール大学教授、さらに、Johannes Nagler の後任として、フライブルク(ブライスガウ)大学の教授となった。1933年に、学部長。ときの学長は、Martin Heidegger であった。1935年から教会法を担当し、1946年に、法哲学とプロテスタント教会法の演習講座を創設した。1967年に、名誉教授となった。専攻は、刑法、法哲学、教会法である。宗旨は改革派である⁵⁵⁾。

記念論文集がある。Existenz und Ordnung (hrsg. v. Württenberger/Maihofer/Hollerbach, Festschrift) 1962, Quaestiones et responsa (Festschrift) 1968; Mensch und Recht (hrsg. v. Hollerbach/Maihofer/Württenberger, Festschrift) 1972; Fortschritte des Verwaltungsrechts (hrsg. v. Menger Christian-Friedrich), 1973 (業績目録がある。504 頁以下)。

おもな業績は以下のとおりである。

Das Rechtsideal des nationalsozialistischen Staates, 1934.

Große Rechtsdenker der deutschen Geistesgeschichte, 1939, 2. A. 1944, 3. A. 1951, 4. A. 1963. (上述)

Vom Wesen des Rechts in der deutschen Dichtung, 1948.

Rechtsgedanke und biblische Weisung, 1948.

Das Problem der Naturrechtslehre, 1955, 3. A. 1964.

Griechisches Rechtsdenken, Bd. 1ff. 1950ff.

Recht des Nächsten, 1958.

Ordnung der Kirche, 1961.

Ordnung der Liebe, 1963.

Ausgewählte Schriften, (hrsg. v. Hollerbach), Bd. 1ff. 1972ff.

(4) H.J.ヴォルフ (H.J.Wolff)

55) 顕彰文がある。JZ 1972, 290 (Hollerbach Alexander). 追悼文もある NJW 1978 203 (Krämer Achim), ZRG KA Bd. 96 (1979), 455 (Hollerbach Alexander), ZRG GA 95 (1978), 485 (Hollerbach), Kleinheyer/Schröder, aa.O. (前注27)), S.520; DBE 10 (1999), 564; Das Personenlexikon zum Dritten Reich 2003, 685.

Aus der Geschichte der Rechts- und Staatswissenschaften zu Freiburg i.Br., 1957. フライブルクの法学者を対象とする (Würtenbergerの序文がある)。フライブルク大学の法学部の歴史である。

(a) 家族法のヴォルフ (Hans Julius Wolff, 1902.8.27-1983.8.23) は、1902年に、ベルリンで生まれた。ユダヤ系の家系であった。父は、病理学者であった。比較法学者のラーベルと同僚のヴォルフ (Martin Wolff, 1872-1953) の縁戚と思われる。このM.Wolffの縁戚の法律家が多い (【変容】161頁)。H.J.Wolffは、ベルリンとロシュトック大学で、哲学と法律学を学び、Thesaurus linguae Latinaeの研究補助員となった。1932年に、ベルリン大学で学位をえた (Zur Stellung der Frau im klassischen römischen Dotalrecht, 1933)。代理裁判官となったが、1933年に免職となり、パナマに亡命した。1935年に、カナダ、1939年に、アメリカに移った。最初、パン屋に勤め、1945年に、オクラホマ女子大、1946年に、オクラホマ市立大学で教え、1950年に、ミズーリ州のカンサス私立大学で私講師、1952年に、ドイツに帰国。マインツ大学の正教授となった。1955年に、フライブルク大学の教授となった。婚姻法や家族法を専門とした。1983年に、フライブルク (ブライスガウ) で亡くなった⁵⁶⁾。フライブルク大学では、Adolf Schönke (1908.8.20-1953.5.1) がほぼ同期であったが (1938年から)、同人が早世したことから、その後任は、1954年からHans-Heinrich Jescheck (1915.1.10-2009.9.27)、その後任は、1985年から、Rainer Frank (1938.7.14-) であった。

記念論文集がある。Hengstl Joachim (hrsg.) Griechische Papyri aus Ägypten als Zeugnisse des öffentlichen und privaten Lebens (Festschrift), 1978.

アメリカ時代の業績は英語である。

Marriage law and family organization in ancient Athens, 1944.

The origin of judicial litigation among the Greeks, 1946.

56) Göppinger, a.a.O (前注17)), S.368. なお、Martin Wolffについては、【法学上の発見】151頁の後、Gerhard Dannemann: Martin Wolff zum 150. Geburtstag, ZEuP 2022, 635がある。前注3) 参照。

Roman law, 1951, 2. A. 1964.

Beiträge zur Rechtsgeschichte Altgriechenlands und des hellenistisch-römischen Ägypten, 1961.

Das Justizwesen der Ptolemäer, 1962, 2. A. 1970.

Normenkontrolle und Gesetzesbegriff in der attischen Demokratie, 1970.

Die Bedeutung der Epigraphik für die griechische Rechtsgeschichte, 1973.

(b) 公法のヴォルフ (Hans Julius Wolff, 1898.10.3-1976.11.5) は、1898年に、Elberfeld で生まれた。父は、繊維工場主であった。ゲッチンゲン、ボン、ハレ、ミュンヘンの各大学で、法律学、社会学を学んだ。1925年に、ゲッチンゲン大学で学位をえた (Julius Hatschek の指導、論文は、Die Grundlagen der Organisation der Metropole, 1925)。カッセル、フランクフルトで行政官となる。1929年に、フライブルク大学の Friedrich Gieseの下で、ハビリタチオンを取得した (Organschaft und juristische Person, 1929)。1933年に、フランクフルト大学で正教授となった (Hermann Hellerの後任)。1935年から1939年には、Riga大学教授、1941年に、プラハ大学教授、1946年に、ミュンスター大学教授、1947年に、イギリス地区の行政法・公法の諮問委員。ミュンスターの高等行政裁判所の判事を兼任した。1976年に、Münster で亡くなった。専門は、公法、行政法である⁵⁷⁾。

75歳の祝賀論文集がある。Fortschritte des Verwaltungsrechts (hrsg. v. Menger Christian-Friedrich), Festschrift, 1973.

行政法の3巻のテキストは、版を重ねている。

Verwaltungsrecht, begründet v. Wolff Hans Julius (fortgef. v. Bachof Otto; neubearb. v. Stober Rolf), Bd. 1 1956, 2. A. 1958, 13. A. 2015.

Verwaltungsrecht, begründet v. Wolff Hans Julius (fortgef. v. Bachof Otto;

57) 顕彰記事がある。Hans Julius Wolff zum 70. Geburtstag ZRG RA 89 (1972), X. 追悼文は、NJW 1977, 28 (Kriele), JZ 1977, 69 (Bachof), JZ 1983, 815 (Liebs); Juristen im Portrait 1988, 694 (Kriele), DBE 10 (1999), S.572; Stolleis, Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland, Bd. 3, Staats- und Verwaltungsrechtswissenschaft in Republik und Diktatur 1914-1945, 1999, 266; Münsteraner Juraprofessoren, 2014, 249 (Erichsen).

neubearb. v. Stober Rolf), Bd. 2. 1962, 2. A. 1967, 7. A. 2010.

Verwaltungsrecht, begründet v. Wolff Hans Julius (fortgef. v. Bachof Otto; Neubearb. v. Stober Rolf), Bd. 3. 1966, 2. A. 1967, 12. A. 2007.

(c) Alexander Hollerbach, Jurisprudenz in Freiburg, Beiträge zur Geschichte der Rechtswissenschaftlichen Fakultät der Albert-Ludwigs-Universität, 2007. (Freiburger Rechtswissenschaftliche Abhandlungen 1).

内容は、I フライブルク (ブライスガウ) 大学の一般的な歴史、II Zasius や教会法、法哲学など、専門領域の歴史、III Rosin (1855-1927), Marschall, Hans Liermann, Großmann-Doerth, Erik Wolf (1902-1977), Pringsheim, Wolf, Maunzなどの歴史上の著名人の研究、IV Gerhart Husserl† (1974), Alfred Schühly (1977), Winfried Löwenhaupt (1975) などの追悼文から成る。上記 H.J.Wolffの続編ともいえる。

著者の Hollerbach (1931.1.23-) は、1931年、バーデンの Gaggenau で生まれた。父は、市長であった。1950年から、フライブルク、ボン、ハイデルベルクの各大学で法律学を学び、1954年に、第一次国家試験に合格し、1956年に、学位をえた (Der Rechtsgedanke bei Schelling, 1957)。1959年に、第二次国家試験に合格、Erik Wolf の助手となった。1964年に、Wolfの下で、ハビリタチオンを取得した (Verträge zwischen Staat und Kirche in der Bundesrepublik Deutschland, 1965)。1966年に、マンハイム大学の正教授。1969年に、フライブルク大学教授。専門は、教会法、国法学、法哲学、法学史である。1978年から、ハイデルベルク学術アカデミー会員である⁵⁸⁾。

Neuere Entwicklungen des katholischen Kirchenrechts, 1974.

Selbstbestimmung im Recht, 1996.

Religion und Kirche im freiheitlichen Verfassungsstaat, 1998.

Katholizismus und Jurisprudenz, 2004.

58) Köbler, Wer ist wer (Alexander Hollerbach); Kürschner 1970, 2005. 以下の祝賀論文集がある。Verfassung - Philosophie - Kirche, Festschrift für Alexander Hollerbach (hrsg. v. Bohnert), 2001; Gelebte Wissenschaft Geburtstagssymposium (hrsg. v. Robbers), 2012.

Das selbstgeschaffene Recht der Wirtschaft (hrsg. v. Blaurock / Goldschmidt /Hollerbach), 2005.

Ausgewählte Schriften (hrsg. v. Robbers mit Bohnert /Gramm / Kindhäuser /Lege /Rinken), 2006.

Das Recht der Staatskirchenverträge - Colloquium (hrsg. v. Mückl), 2007.

(5) Thomas Hoeren, Münsterer Juraprofessoren, 2014.

(a) ミュンスター大学の法学者の評伝である。対象となっているのは、Anton Matthias Sprickmann (1749-1833), Rudolf His (1870-1938), Hans Pagenkopf (1901-1983), Karl Peters (1904-1998), Ottmar Bühler (1884-1965), Walter Ermann (1904-1982), Harry Westermann (1909-1986), Max Kaser (1906-1997), Helmut Schelsky (1912-1984), Hans Jurius Wolff (1898-1976), Johannes Wessels (1923-2005), Alfred Hueck (1889-1975), Rolf Dietz (1902-1971), Werner Hoppe (1930-2009), Hans Brox (1920-2009), Helmut Kollhosser (1934-2004) である。

(b) 著者の Hoeren (1961.8.22-) は、1961年に、ルール北西のDinslakenで生まれた。1980年から、神学と法律学を、ミュンスター、チュービンゲン、ロンドンの各大学で学び、1986年に、神学の修士となった。1987年に、第一次国家試験に合格し、1989年に学位をえた (Softwareüberlassung als Sachkauf, 1989)。1991年に、第二次国家試験に合格し、1994年に、ミュンスター大学でハビリタチオンを取得した (Selbstregulierung im Banken- und Versicherungsrecht, 1994)。1995年に、デュッセルドルフ大学教授、1996年に、デュッセルドルフ高裁の裁判官を兼任。1997年に、ミュンスター大学教授となった。専門は、民法、経済法、民訴法のほか、教会法から法情報学まで広い⁵⁹⁾。

Kirchen und Datenschutz, 1987.

ITM Informations- Telekommunikations- und Medienrecht (hrsg. v. Hoeren /Holznagel /Geppert), 1999, 2. A. 2001, 3. A. 2002.

Handbuch Multimedia-Recht (hrsg. v. Hoeren /Sieber), 1999, 2. A. 2001, 24.

59) Köbler, wer ist wer (Thomas Hoeren); Kürschner 2005.

A. 2010, 27. A. 2011.

Grundzüge des Internetrechts, 2001, 2. A. 2002.

Schulze /Dörner /Ebert /Eckert /Hoeren /Kemper /Saenger/Schulte-Nölke /Staudinger A., BGB, 2001, 8. A. 2014.

Allgemeine Geschäftsbedingungen bei Internet- und Softwareverträgen, 2009.

Big Data und Recht (hrsg.) 2014.

(c)(i) Hoeren, Zivilrechtliche Entdecker, 2001 は、特筆すべき編著で、民事上の法学上の発見に関する諸学者の評伝である。まず、Johan Apel, Savigny, Jhering, Laband, Staub であり、ここまでは法学史上の大家である。ついで、Caemmerer, Ernst Wolf, Canaris, Reinhard Zimmermann など、比較的現代的な者が対象となっている。

(ii) 対象者の1人カーザーは、著名なローマ法学者である。

カーザー (Max Kaser, 1906.4.12-1997.1.13) は、1907年に、ウィーンで生まれた。父は、のちに歴史の教授となった (Kurt Kaser, 1870-1931.11.1)。1924年から、グラーツ、ミュンヘンの各大学で学び、1928年に、グラーツ大学の Artur Steinwenterの下で学位。1928年に、ギーセン大学の Otto Egerの助手。1931年に、同じく Egerの下で、ハビリタチオンを取得 (Restituere als Prozessgegenstand, 1932, 1968年に2版)。1931年に、ギーセン大学で私講師。1933年に、ミュンスター大学で、正教授となった (Hans Krellerの後継)。戦争中兵役に服し、1945年に捕虜収容所。1946年に帰還。1959年に、ハンブルク大学教授となり、1971年に定年となった。ザルツブルク大学の名誉教授も勤めた。専門は、ローマ法、法史である⁶⁰⁾。雑誌 Zeitschrift für Rechtsgeschichte

60) Juristen im Portrait 1988, 447 (Medicus); Jansen/Lohsse, Max Kaser (1906-1997)- Digesten eines Gelehrtenlebens, in Münsteraner Juraprofessoren (hrsg. v. Hoeren), 2014, 201; Stolleis, Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland, Bd. 3, Staats- und Verwaltungsrechtswissenschaft in Republik und Diktatur 1914-1945, 1999, 340. 顕彰記事がある。NJW 1986, 1156 (Medicus); NJW 1996, 1121 (Knütel); NJW 1997, 1492 (Knütel).

の共同編者。多数の大学から名誉博士号をうけている。1959年に、ゲッティンゲン学術アカデミー会員、1972年に、オーストリア学術アカデミー会員。1971年に、Accademia nazionale dei Lincei Romの会員。1973年に、バイエルン学術アカデミー会員。1977年に、British Academy会員。1997年に、バイエルンのAinringで亡くなった。70歳と80歳の記念論文集がある。Festschrift, 1973; Festschrift Kaser (hrsg. v. Medicus/Seiler), 1976; Iuris professio (hrsg. v. Benöhr/Hackl/Knütel/Wacke), Festschrift, 1986.

Quantia res est, 1935.

Römisches Recht als Gemeinschaftsordnung, 1939.

Eigentum und Besitz im älteren römischen Recht, 1943.

Das altrömische ius, 1949.

Römische Rechtsgeschichte, 1950, 2. A. 1967.

Das römische Privatrecht, 2 Bde. 1955/1959, 2. A. 1971/1975.このテキストが大部であるのに対し、つぎの Beck の Kurzlehrbuch のシリーズは、ハンディーで版を重ねた。Römisches Privatrecht, 1960, 2. A. 1962, 15. A. 1989 (以下は Knütel と共著) Römisches Privatrecht 16. A. 1992, 20. A. 2013. 柴田光蔵訳・ローマ私法概説(1979年)がある(原著10版、1977年の翻訳)。

Das römische Zivilprozessrecht, 1966.

Kaser /Hackl, Das römische Zivilprozessrecht, 2. A. 1996.

Zur Methodologie der römischen Rechtsquellenforschung, 1972.

Ausgewählte Schriften, 2 Bde., 1976f.

Über Verbotsgesetze und verbotswidrige Geschäfte im römischen Recht, 1977.

Ein Jahrhundert Interpolationenforschung an den römischen Rechtsquellen, 1979.

Römische Rechtsquellen und angewandte Juristenmethode, 1986.

(d) ミュンスター大学法学部は、2003年に、100周年を記念した。ドイツでは比較的新しい大学である。Pieroth, Bodo (hrsg.), Juristenausbildung zwischen Staat und Hochschule, Dokumentation der 100-Jahr-Feier der

Rechtswissenschaftlichen Fakultät Münster und des Justizprüfungsamtes Hamm, 2003. わずか56頁の小冊子であるが、2003年の記念大会の記録で、法曹養成の変遷に関する講演録である（大学も1902年設立）。

編者の Pieroth (1945.6.13-) は、1945年に、Chemnitzで生まれ、1965年から、ミュンヘン、ボン、フライブルク（ブライスガウ）で法律学を学び、1969年に、第一次国家試験、1973年に、第二次国家試験に合格、1974年から、ハイデルベルク大学で助手、1975年に、学位（Störung Streik und Aussperrung an der Hochschule, 1976）。1979年に、ハビリタチオンを取得した（Rückwirkung und Übergangsrecht, 1981）。1993年に、ボーフム大学の教授。1989年に、マールブルク大学、同年、ミュンスター大学教授となった。専攻は、公法、憲法、憲法史などである。業績は、省略する（Who's who, S.522）。

(6) ハンブルク大学

(a) Lebensbilder hamburgischer Rechtslehrer, Veröffentlichung von der Rechtswissenschaftlichen Fakultät aus Anlaß des 50jährigen Bestehens der Universität Hamburg, 1919-1969, 1969. ハンブルク大学の法学者を対象とする。

ただし、ハンブルク大学は、新設の大学である。日本のお雇い外国人であったラートゲン（Karl Rathgen, 1856.12.19-1921.11.6）が、1907年に、新設のハンブルクの植民地研究所（Kolonialinstitut）に招聘され、第一次世界大戦後の1919年に、それが改組されたハンブルク大学の初代学長となった⁶¹⁾。【変容】422頁。

(b) さらに50年を経て出されたものでは、100 Jahre Rechtswissenschaft an der Universität Hamburg, hrsg. Repgen, Jessberger, Kotzur, 2019がある。

編者のレプゲン（Tilman Repgen, 1964.3.26-）は、法律学を学び、第一次国

61) ラートゲンについては、お雇い外国人に関する別稿による。独法103号25頁、52頁以下参照。ラートゲンは、日本に関する著述もしている（Die Japaner in der Weltwirtschaft, 2.A., 1911. 日本で働くことを彼に勧めたSchmollerに献呈されている）。1867年からの日本の歳入、歳出、その内訳などが興味深い。S.140ff. マールブルク大学の国法学の講座については、独法108号76頁以下参照。【大学と法律家の歴史】43頁。

家試験に合格、1993年に、ケルン大学で学位をえた (Vertragstreue und Erfüllungszwang in der mittelalterlichen Rechtswissenschaft, 1994)。第二次国家試験に合格、2000年に、同大学でハビリタチオンを取得した (Kein Abschied von der Privatautonomie, 2001)。2002年に、ハンブルク大学教授。専門は、民法、ローマ法史、ドイツ法史である。Die soziale Aufgabe des Privatrechts, 2001.

また、イエスベルガー (Florian Jeßberger, 1971-) は、1990年から、ザールブリュッケン、ロンドン、ケルンの各大学で法律学を学び、1995年に、第一次国家試験に合格、1999年にケルン大学で学位 (Kooperation und Strafzumessung, 1999)、2000年に、第二次国家試験に合格した。2001年に、ベルリン自由大学で研究員、2007年に、同大学で、教授。2008年に、ハビリタチオンを取得した (Der transnationale Geltungsbereich des deutschen Strafrechts, 2011)。2010年に、ハンブルク大学教授。専門は、刑法、刑訴法である。

さらに、コッツウール (Markus Tobias Kotzur, 1968.7.29-) は、バイエルンの Coburg で生まれ、1988年から、フライブルク (ブライスガウ)、バイロイトの両大学で法律学を学び、1993年に、第一次国家試験に合格、1994年に、Durham大学 (North Carolina) で、LL. M.を取得し、1996年に、第二次国家試験に合格。1997年に、バイロイト大学で研究員、2000年に、同大学で学位 (Theorieelemente des internationalen Menschenrechtsschutzes, 2001)。2002年に、同大学でハビリタチオンを取得した (Grenznachbarschaftliche Zusammenarbeit in Europa, 2004)。2005年に、ライプツヒ大学で、教授。2011年に、ハンブルク大学教授。専門は、公法、国際法である。

Geiger /Khan /Kotzur, Kommentar EUV/AEUV, 5. A. 2010.

European Union Treaties, (hrsg. v. Geiger /Khan /Kotzur), 2015.

(c) ハンブルク大学では、ヘンケル (Heinrich Henkel, 1903.9.12-1981.2.28) が著名である (100 Jahre Rechtswissenschaft, a.a.O. 前述(b), S.235)。彼は、1903年に、ギーセン近郊の Braunfelsで生まれた。父は、郵便局員であった。1922年から、フランクフルト (マイン)、フライブルクの両大学で法律学を学

び、1925年に、第一次国家試験に合格、1927年に学位 (Die Rechtsnatur des Notstandes, 1927)、1929年に、第二次国家試験に合格。1930年にハビリタチオンを取得した。1932年に、フランクフルトで区裁判官。ラント裁判官。反セム主義的意見を述べた。ナチスを支持。1933年に、フランクフルト大学教授。1934年に、マールブルク大学教授。1935年に、Arthur Wegnerの後任で、プレスラウ大学教授。高裁裁判官。1945年に、戦時収容所。1949年に、フランクフルト (マイン) で、弁護士。1951年に、ハンブルク大学教授。1969年に、定年となった。1981年に、ミュンヘン近郊の Stockdorf で亡くなった。専門は、刑法、刑訴法である。70歳の記念論文集がある。Grundfragen der gesamten Strafrechtswissenschaft (hrsg. v. Roxin /Bruns), Festschrift, 1974,

Der Notstand nach gegenwärtigem und künftigem Recht, 1932.

Die Unabhängigkeit des Richters in ihrem neuen Sinngehalt, 1934.

Strafrichter und Gesetz im neuen Staat, 1934.

Das deutsche Strafverfahren, 1943.

Verfahrensrecht - Strafverfahren 1950, 2. A. 1954, 4. A. 1957.

Strafverfahrensrecht, 1950. 2. A. 1968.

Einführung in die Rechtsphilosophie, 1964.

(Vgl. DBE 4 (1996), 585 ; Catalogus professorum academiae Marburgensis, II 1979, 104; Klee, Das Personenlexikon zum Dritten Reich 2003, 245).

同名のヘンケル (Heinrich Henkel, 1802.1.9-1873.6.16) は、Schmalkaldenで生まれ、マールブルク大学で法律学を学んだ。1823年に弁護士、1825年に、検察官。政治家となり、1850年に、禁固刑をうけた。1873年に、司法顧問官。1873年に、カッセルで亡くなった (Vgl. DBE 4 (1996), 585; Wippermann, Henkel, Heinrich, ADB 11 (1880), S.756ff.)。

(d) また、ハンブルク大学は公法分野で著名な者が多い。イプセン (Hans Peter Ipsen, 1907.12.11-1998.2.2) は、1907年に、ハンブルクで生まれた。法律学を学び、第一次国家試験に合格、1932年に、ハンブルク大学で学位 (Widerruf gültiger Verwaltungsakte, 1932)、第二次国家試験に合格。1937年に、Friedrich Justus Perels、ついで Rudolf Edler von Launの下で、ハビリタチ

オンを取得した。1930年代に、ナチス、ナチス法律家連盟などに加入。1939年に、ハンブルク大学教授。1973年定年。1998年に、シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン南東の Mölln (Herzogtum Lauenburg 郡) で亡くなった。専門は、公法、ヨーロッパ法、教会法などである。70歳と80歳の記念論文集がある。Hamburg Deutschland Europa (hrsg. v. Stödter /Thieme W.), 1977. Lüneburger Symposion (hrsg. v. Nicolaysen), Festschrift, 1988.ラーペとシャックの記念論文集の編者である。Festschrift für Leo Raape, 1948; Hamburger Festschrift für Friedrich Schack, 1966.

Staatsrechtslehrer unter dem Grundgesetz, 1993.

Politik und Justiz, 1937.

Von Groß-Hamburg zur Hansestadt Hamburg, 1938.

Europäisches Gemeinschaftsrecht, 1972.

Hefermehl/Ipsen/Schluep/Sieben, Nationaler Markenschutz und freier Warenverkehr in der europäischen Gemeinschaft, 1979.

Öffentliches Wirtschaftsrecht, 1985.

Über das Grundgesetz, 1988.

(Vgl.Stolleis, Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland, Bd. 3, 1999, 274, 417; Klee, Das Personenlexikon zum Dritten Reich 2003, 278. 追悼記事もある。NJW 1998, 2025 (Quaritsch)).

(e) W.ティーム (Werner Thieme, 1923.10.13-2016.6.16) は、1923年に、ツェレで生まれた。父は、市参事会の長、兵役で負傷。1945年から、ゲッチンゲン大学で法学を学び、1948年に、第一次国家試験に合格、1951年に、学位、1952年に、第二次国家試験に合格。大学連盟の職員、1955年に、ハンブルク大学の (d) Hans Peter Ipsen の下でハビリタチオンを取得した (Deutsches Hochschulrecht, 1956, 1986)。1956年に、ザールブリュッケン大学で員外教授、1958年に正教授。1962年に、ハンブルク大学教授。1988年に、定年。ツェレで弁護士となった。専門は、国法学、行政法、学校法である。1962年に、ザールラントの憲法裁判所裁判官。1988年に、ハンブルクの憲法裁判所裁判官 (1998年まで)。65歳と70歳の時に、記念論文集が出された。Festschrift (hrsg. v.

Becker /Bull /Seewald, 1993. 80 歳の論文集もある。Festgabe (hrsg. v. Bull), 2003. なお、顕彰記事がある。FAZ 13. 10. 2003。法史学者のテーマ (Hans Thieme, 1906.8.10-2000.10.3) は、別人である。

Reichskonkordat und Länder, 1956.

Die Anfertigung von rechtswissenschaftlichen Doktorarbeiten, 1958, 2. A. 1960.

Der öffentliche Dienst in der Verfassungsordnung, 1961.

Subsidiarität, 1962.

Integrierte oder administrative Gesamthochschule, 1975, 2. A. 1975, 3. A. 1976.

Grundprobleme des Hochschulrechts, 1978.

Entscheidungen in der öffentlichen Verwaltung, 1981.

Das öffentliche Dienstrecht, 1984.

Verwaltungslehre, 1967, 2. A. 1969, 3. A. 1977, 4. A. 1984.

Privathochschulen in Deutschland, 1988.

Einführung in die Verwaltungslehre, 1995.

Die Verfassungen Europas, 1997.

Verfassung der freien und Hansestadt Hamburg, 1998.

Niedersächsische Gemeindeordnung, 1992, 2. A. 1994.

Kommentar zur niedersächsischen Gemeindeordnung, 1992, 2. A. 1994, 3. A. 1997.

Das deutsche Personenrecht, 2003.

(Vgl. 100 Jahre Rechtswissenschaft, aa.O. 前述(b)参照, S.115).

(f) ハンブルク大学で最初の学長は、前記のお雇い外国人のKarl Rathgen (1919年)であった。最初の法律家の学長は、Rudolf Laun (1924 年)であり、彼は、戦後の1947年にも学長となっている。つぎは、1932年のLeo Raape、1933年の Eberhard Schmidt であった (後述 IV6(1)(c))。戦後の1953年に、Eduard Bötticher、1961年に、Rudolf Sieverts がいる。1970年からは、学長は、1年ごとのRektorから、数年在任するPräsident となったが、1991年から2006

年に、Jürge Lüthjeがなっている。

ドイツの大学の学長 (Rector magnificus) の任期は、中世には、3 か月から半年という短い期間が通常であり、しだいに1年となった。煩雑なので再任したのが通常の期間となったのである。現代的観点からは、1年でも短いがおおむね1960年代までは維持された(例外は、ナチスや東ドイツの時期であり、10年以上になることもあった)。アメリカの学長が完全な事務職・管理職であるのとは異なる。しかし、ドイツでも1970年代から比較的長期の任期に変更されている (Präsidentのように名称が変更される場合も、変更されない場合もある)。長期間就任した場合でも、そのまま完全な事務職に転じることは少なく、任期後に研究職に戻る例が多いようである。

また、中世には、小邦の首長がみずから学長となることも多く、その場合には、最高学長と称した (Rector Magnificensissimus)。名誉職である (たとえば、エルランゲン大学で、1864年から86年の間は、バイエルンのLudwig IIがこの肩書をえた。同国王は、ノイシュヴァンシュタイン城の建築で著名である)。最高学長がおかれる場合には、教授から選任される副学長が、実質的な学長である (独法118号88頁、120号頁)。第一次世界大戦後の君主制の崩壊までみられたが、ラント君主がみなこうした肩書を欲したわけではない。

(i) Rudolf Edler von Laun (1882.1.1-1975.1.20) は、1882年に、プラハで生まれた。母方の祖父は、プラハ大学の教授であった (Franz Schneider)。父は、中尉であった。1900年に、ドイツの大学入学資格をえて、ウィーン大学とパリ大学で法律学、哲学を学び、1906年に学位、1908年に、Adolf Menzelの下でハビリタチオン取得 (Das Recht zum Gewerbebetrieb, 1908)。商務省で行政職についた。1911年に、ウィーン大学の員外教授。1918年に、正教授のタイトルをえた。サン・ジェルマン条約 (第一次世界大戦のオーストリアの講和条約) の代表団のメンバーとなった。1919年に、ハンブルク大学教授。SPDに入党。1934年に、アメリカで客員教授。戦後の1949年に、ベルリンの国家裁判所の長官 (1955年まで)。1955年に、定年となった。1975年に、ホルシュタインの Ahrensburg で亡くなった。専門は、行政法、オーストリア行政法、憲法などである。65歳と70歳の記念論文集がある。Festschrift zu Ehren von

Prof. Rudolf Laun, hrsg. v. Hernmarck, 1947; Gegenwartsprobleme des internationalen Rechtes und der Rechtsphilosophie, Festschrift, hrsg. v. Constantopoulos/Wehberg, 1953; Festschrift für Rudolf Laun, 1962.

Recht und Sittlichkeit, 1924, 3. A. 1935.

Stare decisis - The fundamentals and the significance of Anglo-Saxon case law 1937, 2. A. 1947.

Der Satz vom Grunde - Ein System der Erkenntnistheorie, 1941, 2. A. 1956.

Studienbehelf zur allgemeinen Staatslehre, 1945, 2. A. 1946, 7. A. 1948.

Allgemeine Staatslehre im Grundriss, 8. A. 1961, 9. A. 1964.

Die Haager Landkriegsordnung, 1946, 2. A. 1947, 5. A. 1950.

Der dauernde Friede, 1947, 2. A. 1950, 3. A. 1961.

Das Grundgesetz Westdeutschlands, 1949, 2. A. 1951.

Vgl. DBE 9 (1998), 53; Stadtmüller, Georg, Laun, Rudolf Edler von, NDB 13 (1982), S.715f.; Stollis, Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland, Bd. 2, Staatsrechtslehre und Verwaltungswissenschaft 1800-1914, 1992, 415. 顕彰記事がある。DÖV 1967, 11/2 S. 47 (Ermacora); AÖR Band 92 (1967), 2. S. 230 (Ipsen).

(ii) Leo Raape (1878.6.14-1964.12.7) は、1878年に、Rheydtで生まれた。1896年からボン大学で法律学を学び、1904年に学位。1906年に、ハビリタチオン取得。1908年に、ハレ大学の員外教授。1915年に、同大学の正教授。1924年に、ハンブルク大学教授。1932/33U年に学長。ユダヤ人の同僚の解雇に反対して辞任した。専門は、国際私法、民法、ローマ法である。70歳の祝賀論文集 Festschrift für Leo Raape, hrsg. v. Ipsen, Festschrift, 1948 がある。雑誌 AcP (Archiv für civilistische Praxis) の編者をした。1964年に、ハンブルクで亡くなった。

Internationales Privatrecht, 1938f., 2. A. 1945, 4. A. 1955.

Vgl. DBE 8 (1998), 107; Magnus, Ulrich, Raape, Leo, NDB 21 (2003), S.58. 顕彰記事 Würdigung NJW 1958, 941 (Horst Müller), 死亡記事 Das Standesamt 1965 H.1, NJW 1965, 484 (Schwenn); JZ 1965 H.8, 260 (Makarov) がある。

(iii) Eberhard (Ludwig Ferdinand) Schmidt (1891.3.16-1977.6.17) については、後記IV6(1)(c)。Vgl. DBE 9 (1998), 4.

(iv) Eduard Wilhelm Leonhard Böttcher (1899.12.29-1989.3.31) は、1899年に、ヘッセンのLauterbachで生まれた。1918年からギーセン大学で法学を学んだ(Leo Rosenbergsなど)。1925年に学位、1929年に、ギーセン大学でハビリタチオンを取得(Kritische Beiträge zur Lehre von der materiellen Rechtskraft im Zivilprozess)。1932年に、同大学で員外教授。1934年に、ハイデルベルク大学の正教授。1940年に、ハンブルク大学教授。1942年に、ハンザ高裁の裁判官。1954年に、ハンブルクの憲法裁判所裁判官。1969年に定年となった。1989年に、亡くなった。専門は、民訴法、民法である。70歳の祝賀論文集 Festschrift (hrsg. v. Bettermann/Zeuner), 1969がある。

Vgl. 顕彰記事 NJW 1970, 27 (Bettermann); JZ 1979, 820 (Zöllner) がある。追悼記事もある。NJW 1989, 1719 (Löwisch); Zeitschrift für Arbeitsrecht 1990, 1 (Bettermann); Klee, Das Personenlexikon zum Dritten Reich 2003, 61.

(v) Rudolf (Hubert) Sieverts (1903.11.3-1980.4.28) は、1903年に、マイセンで生まれた。父は、化学者であった(Adolf Sieverts)。グライフスヴァルト、フランクフルト(マイン)、ハンブルクの各大学で法学を学び、1927年に、ハンブルク大学で学位。1934年にハビリタチオンを取得し(Beiträge zur Lehre von den subjektiven Unrechtselementen im Strafrecht, 1934)、同年に、ハンブルク大学の正教授。雑誌(Monatsschrift für Kriminalpsychologie und Strafrechtsreform)の編者。ドイツ法アカデミー会員(少年法部会)。植民地医学アカデミー会員。1971年に定年。1980年に、ハイデルベルクで亡くなった。専門は、刑法、刑事学である。75歳の祝賀論文集 Modelle der gesellschaftlichen Integration, Festschrift, 1978がある。

Das kommende Jugendstrafrecht, 1939.

Handwörterbuch der Kriminologie 2. A. 1966ff.

Vgl. DBE 9 (1998), 322; Auerbach, Catalogus professorum academiae Marburgensis II, 1979, 142; Klee, Das Personenlexikon zum Dritten Reich, 2003, 583f.

(vi) Jürgen Lühje (1941.9.30-) は、1941年に、Dievenowで生まれた。ベルリン自由大学とボン大学で法律学を学び、1967年に、第一次国家試験に合格し、ボーフム大学で学術研究員となった。1969年に、大学情報センター (Hochschul-Informations-System)、1972年に、ボーフム大学の参与員、1973年に、第二次国家試験に合格し、連邦学術省の研究員、1973年に、オルデンブルク大学の Kanzler、1991年に、ハンブルク大学の学長 (Präsident) となった。

Asche/Lühje/Schott, Der numerus clausus oder Wer darf studieren? 1973.
Entwicklung und Profil der Universität Oldenburg, 1984.

(7) その他の大学

他の大学でも、それぞれ大学に所属した教授の名簿や評伝をもっている場合がある。以下は、ごく一部である (【歴史】689頁以下参照)。

(a) F.Elsener, Lebensbilder zur Geschichte der Tübinger Juristenfakultät, aus Anlaß des 500jährigen Bestehens der Fakultät Tübingen, 1977. チュービンゲン大学の法学者を対象とする。

(b) Wilhelm Ebel, Catalogus professorum Gottingensium 1754-1962, 1962. ゲルマニステンであるエベール (独法104号44頁) によるゲッティンゲン大学の学者の詳細な名簿である。

(c) Renate Wittern, Die Professoren und Dozenten der Friedrich-Alexander-Universität Erlangen 1743-1960, 1993. エルランゲン大学の学者の名簿である。

(d) Franz Gundlach, Catalogus professorum academiae Marburgensis 1527-1910, 1927. 設立以来のマールブルク大学の学者の名簿である。

(e) フランクフルト大学については、Diestelkamp/M.Stolleis (hrsg.), Juristen an der Universität Frankfurt am Main, 1989 がある。Sinzheimer, Levy, F.Bayerle, Hallstein, G.Schiedermaier など、20人の学者の名簿である。

Bernhard Diestelkamp (1929.7.6-) は、1929年に、マグデブルクで生まれた。父は、連邦上級文書官であった。1960年に、フライブルク大学で学位 (Die Städteprivilegien Herzog Ottos des Kindes (1204-52), 1961)、1967年に、ハビリタチオン (Das Lehnrecht der Grafschaft Katzenelnbogen (13. Jahrhundert

bis 1479), 1969) を取得した。師は、Thiemeであった。フランクフルト大学教授となり、定年となった。マインツの学術アカデミーの外部会員である⁶²⁾。専門は、ドイツ法、私法である。記念論文集がある。Geschichte der Zentraljustiz in Mitteleuropa (hrsg. v. Battenberg /Ranieri), Festschrift, 1994 (文献目録 S.465ff.)

Gibt es eine Freiburger Gründungsurkunde? 1973.

Urkundenregesten zur Tätigkeit des deutschen Königs- und Hofgerichts bis 1451 (hrsg.), Bd. 1ff. 1986ff.

Die politische Funktion des Reichskammergerichts (hrsg.), 1993.

Rechtsfälle aus dem Alten Reich, 1995.

Oberste Gerichtsbarkeit und zentrale Gewalt in Europa, 1996.

Die Durchsetzung des Rechtsmittels der Appellation im weltlichen Prozessrecht Deutschlands, 1998.

Recht und Gericht im Heiligen Römischen Reich, 1999.

Drei Professoren der Rechtswissenschaft in bewegter Zeit, 2000.

Rechtsgeschichte als Zeitgeschichte - Beiträge zur Rechtsgeschichte des 20. Jahrhunderts, 2001.

Das Reichskammergericht am Ende des alten Reiches und sein Fortwirken im 19. Jahrhundert, 2002.

Das Reichskammergericht - der Weg zu seiner Gründung und die ersten Jahrzehnte seines Wirkens, 2003.

Vom einstufigen Gericht zur obersten Rechtsmittelinstanz, 2014.

(f)(i) やや一時期に限定されるものとして、M.Schmoeckel, Die Juristen der Universität Bonn im »Dritten Reich«, 2004がある。これは、ボン大学の教授に関するが、ナチス政権下のボン大学の人についての研究である。

対象となっているのは、Seligen, Bely, Bruck, Graf zu Dohna, Dölle, Eckhardt, Friesenhahn, Göppert, Grünhut, Heckel, Hentig, Heyer, E.R.Huber,

62) ZNR 3 (1999), S.209ff.

E.Kaufmann, K.T.Kipp, Kunkel, Rauch, Thoman, H.v.Weber, Zychaである。このうち、私法・法史関係の Bely, Bruck, Dölle, Eckhardt, K.T.Kipp, Kunkel, Zychaについては、別稿で扱ったことがある。このキップは、二重効で著名なキップの息子であり、戦時中のエピソード性が高い。

ボン大学の当時の状況については、Hans-Paul Höpfner, Die Universität Bonn im Dritten Reich, 1999もある。

(ii) シュモッケル (Mathias Schmoeckel, 1963.6.7-) は、1963年に、Flensburg で生まれた。1983年から、ボン、ジュネーブ、ミュンヘンの各大学で法律学を学び、1989年に第一次国家試験に合格、1993年に第二次国家試験に合格した。ミュンヘン大学で学位をえて (師は Hermann Nehlsen、論文は Die Großraumtheorie, 1994)、助手となった。1998年に、ミュンヘン大学でハビリタチオンを取得 (Humanität und Staatsraison, 2000)、1999年に、ボン大学で正教授となった。2003に、学部長。2006年に、公証人法インティテュートの所長⁶³⁾。専門は、民法、ドイツ法史、教会法史である。

Auf der Suche nach der verlorenen Ordnung, 2005.

Erbrecht, 2005, 3. A. 2014.

Historisch-kritischer Kommentar zum BGB, Bd. I (hrsg. v. Schmoeckel / Rückert / Zimmermann), 2003, Bd. II 2007, Bd. III 2013.

Fälle aus der Rechtsgeschichte (hrsg. v. Falk / Luminati / Schmoeckel), 2008.

Rechtsgeschichte der Wirtschaft, 2008.

63) Who's who, S. 626. また、ボン大学に、Schmoeckelのサイトがある。http://jura.uni-bonn.de/index.php?id=102 さらに、(h) のSchermaierについては、Who's who, S.606.

SchmoeckelとSchermaierの弟子のYannik Frese, Unmöglichkeit und veränderte Umstände im ALR, Die preußische Gesetzgebung und ihre Grundlage in Vernunftrecht und Usus modernus, 2020は、久々にみる本格的な不能の研究である。Wollschläger, Die Entstehung der Unmöglichkeitslehre, Zur Dogmengeschichte des Rechts der Leistungsstörungen, 1970. (後述IV6 (6) 参照)。

Schmoeckel /Stolte, Examinatorium Rechtsgeschichte, 2008, 2. A. 2016.

Europäische Testamentsformen (hrsg. v. Schmoeckel /Otte), 2011.

Regulierung im Telekommunikationssektor hrsg. v. Kurth /Schmoeckel), 2012.

Das Recht der Reformation, 2013.

(g) シュモッケルには、ほかに Witte と共著の Great Christian Jurists in German History, 2020がある [Große christliche Juristen der Deutschen Geschichte] (前述Ⅱ7 (6))。Witte (John Witte) は、アトランタの Emory大学の宗教学の教授、法と宗教学のセンター長である (Robert W. Woodruff Professor of Law & Religion講座)。

(h) シェルマイヤー (Martin Josef Schermaier, 1963.4.2-) は、同じボン大学の教授である。同人は、1963年に、上オーストリアのAttnang-Puchheimで、生まれた。1981年に、大学入学試験の Maturaに合格し、ザルツブルク大学で、法律学と政治学を学んだ。1983年に、ザルツブルク大学で、Wolfgang Waldsteinの助手、その後、Waldsteinのほか、Theo Mayer-Malyの助手などをした。1991年に、同大学で学位 (Materia - Beiträge zur Frage der Naturphilosophie im klassischen römischen Recht, 1992)。ボン大学の Rolf Knütelの下で、フンボルトの奨学生となり、1995年に、ザルツブルク大学の Mayer-Malyの下でハビリタチオンを取得し (Die Bestimmung des wesentlichen Irrtums von den Glossatoren bis zum BGB, 2000)、助教授。1997年に、ザルツブルク大学の員外教授。1998年に、ミュンスター大学の正教授。2005年に、ボン大学教授となった。専門は、ローマ法、法制史、民法である。共著の Kunkel /Schermaier, Römische Rechtsgeschichte 13. A. 2001, 14. A. 2005がある。

(i) ナチス期の大学については、他の大学のものもある。たとえば、Elisabeth Kraus (hrsg.), Die Universität München im Dritten Reich, Aufsätze, Teil I, 2006 (Beiträge zur Geschichte der Ludwig-Maximilians-Universität München; Bd. 1, 4) があり、その中で、Adelberger, Nützliche Kooperation – Die Juristische Fakultät der Ludwig-Maximilianes-Universität und die

Akademie für Deutsches Recht, S.405ff.は、1933年6月26日にミュンヘン（バイエルン司法省、ライヒ司法委員のFrankによる）で設立されたドイツ法アカデミー（のちにベルリンに移転）とミュンヘン大学との関係を扱っている。

ミュンヘン大学法学部は、ドイツ法アカデミーへの無制限の協力を申し出た最初の学部であった（学部長は、Wilhelm Kisch）。ミュンヘンのあるバイエルンは、ナチスの揺籃地で強力な地盤でもあった。その反省は重要な課題となっている。そして、ナチスの先導的な大学であったキール大学も、その沿革史でしばしばその反省と検証をしている。他の大学については省略する。

Volbehr, Friedrich/Weyl, Richard, Professoren und Dozenten der Christian-Albrechts-Universität zu Kiel 1665-1954, 1956.

Auge, Der Kieler Professor bis zur Mitte des 20.Jh - Eine typologische Annäherung, in Christian-Albrechts-Universität zu Kiel, 350 Jahre Wirken in Stadt, Land und Welt, 2015, S.425.

von Arnould / IAugsberg / Meyer-Pritzl, 350 Jahre Rechtswissenschaftliche Fakultät der Christian-Albrechts-Universität zu Kiel, 2018.

C. Wiener, Kieler Fakultät und 'Kieler Schule' Die Rechtslehrer an der Rechts- und Staatswissenschaftlichen Fakultät zu Kiel in der Zeit des Nationalsozialismus und ihre Entnazifizierung, 2013.

(j) チュービンゲン大学では、Adam, Hochschule und Nationalsozialismus : die Universität Tübingen in Dritten Reich (mit einem Anhang von Setzler), 1977 (Contubernium ; Bd. 23).

個別のものだけではなく、一般的に、大学や大学人に関するものでは、

Heiber, Der Professor im Dritten Reich: Bilder aus der akademischen Provinz, 1991 (Universität unterm Hakenkreuz; T. 1) があり、ベルリン、ボン、フランクフルト、ギーゼン、ゲッチンゲン、ハンブルク、イエナ、キール、ライプツヒ、マールブルク、チュービンゲンなど各大学の状況（学生団体やナチス活動家、教授）が検討されている（S.356ff.）。ボン大学とキール大学については、個別に検討したことがある（息子のキップやキール学派に関連して、【法学上の発見】325頁、474頁参照）。

分野ごとの研究では、Staatsrecht und Staatsrechtslehre im Dritten Reich (hrsg. Ernst-Wolfgang Böckenförde, mit Beiträgen von Martin Brandt; Redaktion: Johannes Hellermann, Ute Sacksofsky), 1985. (Recht, Justiz, Zeitgeschehen ; Bd. 41).

Ulrich Külpér, Die Gesetzgebung zum deutschen Internationalen Privatrecht im „Dritten Reich“, 1976 (Arbeiten zur Rechtsvergleichung : Schriftenreihe der Gesellschaft für Rechtsvergleichung 81).

(8) オーバーコフラー (Gerhard Oberkofler)

Studien zur Geschichte der österreichischen Rechtswissenschaft, 1984. 本書では、オーストリア法の歴史に関して登場する法学者をかなり検索しうる。Brauneder の序文がある。I 1848年の3月革命前のオーストリアの法の状況 (Martini, Zeiller)、II 1848年前のウィーンとプラハ大学の刑法学者、III 1848年前のオーストリアの法曹の伝統 (Thun)、VI 19世紀と20世紀初頭のインスブルック大学のロマニステン、VII インスブルック大学法学部の民法、X インスブルック大学法学部におけるオーストリアのライヒと法の歴史の講義、XI 帝政から共和国にいたるオーストリア民法学など、オーストリアの一般的な法史のほか、インスブルック大学に特化した研究が包含されている。刑法学者も対象となっている (II, IV, V)。政治学についても、VIII, IX (行政は、XII)。

(9) シュールテス (Hans Schultheß)

Schweizer Juristen der letzten Hundert Jahre, 1945. スイスの法学者を対象とする。Max Huber (Genf) の序文と Ed.His (Basel) のスイス法の歴史の概観がある。

対象となっているのは、Bellot (1776-1836), Keller (1799-1860), Bluntschli (1808-1881), Segesser (1817-1888), Planta (1815-1902), Blumer (1819-1875), Heusler (1834-1921), Rivier (1835-1898), E.Huber (1849-1923), Stooss (1849-1934), Roguin (1851-1939), Wieland (1864-1936), Fleiner (1867-1937), W. Burckhardt (1871-1939) である。

スイス民法の起草者 Eugen Huber (1849.7.13-1923.4.23) が対象となっている

るのは当然として、スイス債務法の起草者 Munzingerは対象とされていない⁶⁴⁾。ムンツィンガーは、スイス法の体系を基礎づけた重要人物であるが、不

-
- 64) 小野「スイス債務法 (SOR) とスイス民法 (ZGB)」独法102 号33頁。民法典の起草者のE.フーバーに比して、債務法の起草者のムンツィンガーが不当に等閑視されていることについては、同42頁参照。

スイスの大学は、ドイツの学者の通常のプロモーションの中に位置付けられている (逆に、ドイツの大学も、スイスの学者のプロモーションの中に含まれる)。パーゼル、チューリヒ、ベルンのドイツ語圏の大学が多いが、ジュネーブやローザンヌも含まれている。たとえば、クーレンベックにみられる。

クーレンベック (Ludwig Kuhlenbeck, 1857.4.25-1920) は、1857年に、Osnabrückで生まれた。1920年に、亡くなった。父は、機械工のマイスターであった。1875年から、ゲッチェンゲン、チュービンゲン、ベルリン、ゲッチェンゲンの各大学で法学を学んだ。ゲッチェンゲンでは、イエーリングの教えをうけた。1878年に、第一次国家試験、1884年に、第二次国家試験に合格し、裁判所試験。1885年に、ゲッチェンゲン大学で学位。1902年に、ローザンヌ大学教授。1908年に、Nicolas Herzenとの争いで解雇され、イエナで、弁護士となった。1901/04 年に、雑誌 Juristische Wochenschrift の編者。

Der Check, 1890 (Neud.1970).

Reform der Ehe, 1891.

Der Schuldbegriff als Einheit von Wille und Vorstellung, 1892.

Die Ächtung Bismarcks, 1892.

Die Rechtsprechung des Reichsgerichts, 1895ff.

Von den Pandekten zum bürgerlichen Gesetzbuch, Eine dogmatische Einführung in das Studium des Bürgerlichen Rechts, 1898ff. まだ、ひげ文字 (Fraktur) の多かった時代に、ラテン文字で読みやすいスタイルを採用。

Das Urheberrecht, 1901.

Das Einführungsgesetz zum bürgerlichen Gesetzbuche, 1901.

Im Hochland der Gedankenwelt, 1903.

Natürliche Grundlagen des Rechts und der Politik, 1904 (Neud.1995).

Giordano Bruno in seiner Bedeutung für die Philosophie und Kultur der Zukunft, 1904.

Zwiesgespräche vom unendlichen All und den Welten, 1904, 2. A. 1907, 5. A. 1980.

当に等閑視されている感がある。

(a) この H. シュールテス (Hans Schultheß) 自身の詳細はあまり明確ではない。

(b) 同名の Heinrich Schultheß (1815.9.7-1885.8.31) は、チューリヒ生まれの政治家でジャーナリストである⁶⁵⁾。

E.シュールテス (Edmund Schulthess, 1868.3.2-1944.4.22) は、1868年に、アーガウ州の Villnachern で生まれた。シュトラスブルク、ミュンヘン、ライプツヒ、ベルンの各大学で法律学を学んだ。1891年に、弁護士となった。スイスの機械工場の法律顧問となった。1905年から12年には、アーガウ州の上院議員、抵当銀行の頭取、1912年に、連邦評議会議員、1917年、1921年、1928年、1932年、1933年に、連邦大統領となった。1935年から43年には、銀行委員会の委員長となった。1944年に、ベルンで亡くなった。

(c) ヒス (Eduard His, 1886.12.16-1948.9.16) は、1886年に、バーゼルで生まれた。チュービンゲン、ライプツヒ、バーゼルの各大学で法律学を学んだ。1915年に、私講師、1921年に、バーゼル大学の員外教授となった。1921年に、チューリヒ大学の正教授となった。1927 Privatgelehrter Basel 1948 年に、バーゼルで亡くなった。専門は、国法、行政法である。マールブルク大学の Rudolf His (スイス刑法史で著名) は、従兄弟である (上記の Thomas Hoeren, Münsterer Juraprofessoren, 2014 参照)⁶⁶⁾。

Geschichte des neueren schweizerischen Staatsrechts, Bd. 1ff. 1920ff.

Das Evangelium der Rasse, 1905.

Die Rechtswissenschaft in ihren Beziehungen zu anderen Wissenschaften, 1905.

Recht der Schuldverhältnisse, 1898, 2. A. 1906, 7/8. A. 1912. (Staudinger Kommentar への寄稿)。

Römische Rechtsgeschichte, 1910.

Die Entwicklungsgeschichte des römischen Rechts, 1913.

Das System des römischen Privatrechts, 1913.

65) Rohmer, Schulthess, Heinrich, ADB 32 (1891), S.694f.

66) 追悼記事として、ZRG 66 (1948), 595 (Thieme).

Basler Staatsmänner des 19. Jahrhunderts, 1930.

(d) M.フーバー (Max Huber, 1874.12.28-1960.1.1) の序文がある。彼は、1874年に、チューリヒで生まれた。父は、工場主であった (Emil Huber)。ローザンヌ、チューリヒ、ベルリンの各大学で、法律学を学び、1894年に、スイス商工会議所 (Schweizerischer Handels- und Industrieverein) の秘書、1897年に、学位をえて (Die Staatensuccession, 1897)、研究旅行をした。1902年に、チューリヒ大学の教授、1907年に、ハーグ平和会議の使節、1913年から21年まで、スイスの政治部 (politisches Departement Schweiz) の法律顧問、1918年に、連邦評議会の外交顧問、1919/20 年、パリ平和会議への代表委員、1920/21 年に、国際連盟への代表、1921年に、ハーグの国際司法裁判所の判事、1925年から27年は、その長官。国際仲裁裁判所の判事 (1928 Las-Palmas-Entscheid)。1928年から44年に、赤十字の国際委員会の長。1960年に、チューリヒで亡くなった。国法、国際法、教会法、法史などを専門とする⁶⁷⁾。

Die soziologischen Grundlagen des Völkerrechts, 1910.

60歳と70歳の祝賀論文集がある。Festgabe für Max Huber zum 60. Geburtstag, 1934; Festgabe für Max Huber zum 70. Geburtstag, 1944.

スイス民法典で著名なフーバーは、E.フーバー (Eugen Huber) である⁶⁸⁾。両

67) Vogelsanger, Huber, Max, NDB 9 (1972), S. 681; DBE 5 (1997), 198.

68) ほかに、Huberには、17世紀には、ウルリクス・フベルス (Ulrich Huber, 1636.3.13-1694.11.8) がいる。フベルスは、1636年に、フリースラントの Dockum で、スイス系の家庭に生まれた。Franeker, Utrecht の各大学で法律学を学び、1657年に、Franeker大学で教授となった。当初は、歴史と雄弁術で、のちに、法律学の担当であった。1694年に、亡くなった。

Digressiones Justinianae, 1670.

Repetitae animadversiones ad ius in re et ad rem, 1675.

De iure civitatis, 1676.

Praelectiones iuris civilis, 1686ff.

同人については、GND: 119019892, DBA 575,22-25; Stintzing/Landsberg Geschichte der deutschen Rechtswissenschaft, Abt. 2, 1884, 14; Stolleis, Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland, Bd. 1, Reichspublizistik und Policeywissenschaft

者の関係は明確ではない。

(10) エルセナー (F.Elsener)。以下の2 著もエルセナーの著作で、スイスを対象とするものである。

Ferdinand Elsener, Die Schweizer Rechtsschulen vom 16. bis 19.Jahrhundert unter besonderer Berücksichtigung des Privatrechts, Die kantonalen Kodifikationen bis zum Schweizerischen Zivilgesetzbuch, 1975.

F.Elsener, Geschichtliche Grundlegung, 1969 (Gutzwiller, Schweizerisches Privatrechtのシリーズである)。

Ⅳ 自伝、祝賀論文集、顕彰文、追悼文、女性法律家など

1 自伝

以下の3 つは、総合的な自伝の集成である。個々人の自伝については、限りがなく、いちいち立ち入らない。

(1) プラニッツ (H.Planitz) Die Rechtswissenschaft der Gegenwart in Selbstdarstellungen, 3 Bde. 1924/29. 法学者 22 人の自伝がある。Konrad Cosack, Carl Crome, Viktor Ehrenberg, Otto Fischer, Otto Gradenwitz, Max Hachnburg, Otto Lenel, Max Rümelin, Ernst Zietelmannなどである。

プラニッツ (Hans Planitz, 1882.5.4-1954.1.16) は、ドレスデンの Kaditz で生まれた。父方は、16世紀から続く手工業者の家系であり、父は、牧師であった。1897年から、チュービンゲン大学 (Siegfried Rietschel) とライプツヒ大学 (Karl Lamprecht) で、法律学、歴史を学び、短期間、司法実務についた。1906年に、ライプツヒ大学で学位をえた (Das Wesen des kaufmännischen

1600-1800, 1988, 291f. 生誕370 年の記念論文集がある。Festschrift für Ulrich Huber zum siebzigsten Geburtstag (hrsg. v. Baums /Wertenbruch /Lutter /K. Schmit), 2006. 国際私法の観点から、畑場準一・ウルリクス・フベルス「法抵触論」注解 (1996) がある (De conflict legum diversarum in diversii imperii)。

Zurückbehaltungsrechtes geschichtlich entwickelt, 1906)。1909年に、同大学で、ハビリタチオンを取得 (Die Vermögensvollstreckung im deutschen mittelalterlichen Recht, 1912)。私講師ののち、ライプツヒ大学で員外教授となった。1913年に、バーゼル大学教授。Andreas Heuslerの後継であった。1914年に、新設のフランクフルト (マイン) 大学の教授。兵役に服し、そのおりに馬蹄で蹴られ、心臓に負傷、1919年に、再建されたケルン大学の教授、1928/29 年に、学長。1941年に、ウィーン大学の教授、1953年に、名誉教授となった。1954年に、Herzleidenで亡くなった。専門は、法史、民法、商法である⁶⁹⁾ (II 9(3))。

Grundzüge des deutschen Privatrechts. 1925, 2. A. 1931, 3. A. 1949.

Germanische Rechtsgeschichte, 1936, 2. A. 1941, 3. A. 1944.

Die Kölner Schreinsbücher des 13. und 14. Jahrhunderts, 1937.

Quellenbuch der deutschen österreichischen und Schweizer Rechtsgeschichte, 1948.

Grundzüge des deutschen Privatrechts, 1949.

Deutsche Rechtsgeschichte, 1950.

Planitz /Buyken, Bibliographie zur deutschen Rechtsgeschichte, 1952.

Die deutsche Stadt im Mittelalter, 1954, 2. A. 1954, 5. A. 1980 (Neud.1997).

(2) グラース (Grass, N.) Österreichische Rechts- und Staatswissenschaftler der Gegenwart in Selbstdarstellungen, 1951. こちらは、15人のオーストリアの法学者の自伝である。Heinrich Klang, Artur Steiwerter, Karl Wolffなどである)。

N. グラース (Nikolaus Grass, 1913.7.28-1999.10.5) は、チロール近郊の Ampass bei Hall で生まれた。法律家 (母方の高祖父は、Franz Xaver Weinhart, 1746-1833) や、医師、自然科学者などの家系であった。父は、インスブルックの弁護士であった (Dr. Christian Grass, ? -1918)。弟の Franz

69) 自伝がある。Österreichische Geschichtswissenschaft der Gegenwart in Selbstdarstellungen (hrsg. v. Grass Nikolaus), 1951, Bd.1, S.137. 追悼文として、ZRG GA 71 (1954), XIII (Conrad Hermann).

Grassも法律家である。1931年から、インスブルック大学で歴史、地理、民俗学を学んだ(Hermann Wopfner, Otto Stolz などに学ぶ)。1934年に、歴史クラブ、ついで歴史学部の図書館員となった。1936年に、哲学の学位をえた(Dengel/ Wopfnerによる。Das königliche Stift zu Hall im Inntal, 1936)。1938年のオーストリア併合には、賛同した。インスブルック大学で法律学を学び、1939年に、法学の学位をえた。1940年には、政治学の学位をえた(Die Verwaltung Osttirols im 17. und 18. Jahrhundert, 1942)。ナチスには入らず、1941年に、兵役に服した。1943年に、インスブルックの高裁から修習を拒絶され、ウィーンの国立図書館の参与員となった。カトリックであり、その後もナチスに入党した経験はない。1945年に、除隊。同年、チロールの州政府の法律職についた(49年まで)。1946年に、哲学のハビリタチオンを取得した(師は、Hermann Wopfner, Ignaz Philipp Dengel。経済史では、Otto Stolz。また、ドイツ法史では、Godehard Josef Ebers)。1948年に、法学のハビリタチオンを取得した(オーストリア憲法史、行政法経済史。Beiträge zur Rechtsgeschichte der Alpwirtschaft, 1946)。1949年に、インスブルック大学の員外教授(同年のハレ大学への招聘には応じなかった)。1953年に、正教授格となり、1959年に正教授となった。1983年に定年となった。1999年、チロールのHallで亡くなった。専門は、オーストリア史、経済紙、ドイツ法史などである⁷⁰⁾。

70) スイスのフライブルク大学(im Üchtland)から1976年に、グラーツ大学から1979年に、名誉博士号をうけた。Vgl. ZRG GA 118 (2001), 896 (Carlen); Oberkofler G., Studien zur Geschichte der österreichischen Rechtswissenschaft, 1984, 406; Oberkofler G./Goller P., Geschichte der Universität Innsbruck (1669-1945) 2. A. 1996, 244. 同名のグラスについては、教会法学者に関する別稿による。独法106号119頁注156参照。

なお、オーストリアの法学者を若干補充しておく。クラインツ(Josef Krainz, 1821.2.17-1875.2.22)は、1821年に、Skalis(Steiermark)で生まれた。グラーツ大学で、哲学と法律学を学び、1842年に、哲学の学位をえた。1848/49年に、ライヒ議会の議員、1849年に、法学の学位をえて、ハビリタチオンも取得した。1850/549年に、グラーツ大学で私講師、1855年に、Hermannstadtの法律アカデミーの正教授。1870年に、

インスブルック大学教授 (Josef Oberweisの後継であった)。1871年に、プラハ大学教授。Franz Xaver Schneiderの後継であった。ドイツ系の教授は、プラハ大学から外の大学に転じることが多いので、その逆は、まれである (たとえば、L.Mitteisは、プラハ、ウィーン、ライプツヒの大学の順に移動)。1875年、プラハで亡くなった。専門は、民法である。

System des österreichischen allgemeinen Privatrechts (hrsg. v. Pfaff), 1885ff. 自然法的法典である ABGB のパンデクテン解釈による文献である。

また、プロイセン法のフルステンタール (Johann August Ludwig Fürstenthal, ca.1800-) についてふれる。

彼は、1800年ごろに生まれ、1826年ごろには言及された例がある。没年も不明であるが、著作のみが豊富である。その多くは、プロイセン法の実務書である。肩書は、ケーニヒスベルク高裁の裁判官である。【法実務家】155 頁でも若干ふれたが、詳細はいまだ不明である。著作は多い。前述II 3のDöhringと同じく学識ある裁判官の1人である。また、ケーニヒスベルク大学は、近在に有力な大学がなかったことから、裁判官を講師として用いることが多い (とくに高裁裁判官。日本から帰国後のお雇い外国人のモッセも、裁判官をしながら、同大学で講義をした)。逆に、大学教授が高裁裁判官を兼ねる例も多い。ドイツの学術と実務の垣根は低い。

Real-Encyclopädie des gesamten in Deutschland geltenden gemeinen Rechts, 1826. Corpus iuris civilis, 1828f.

Corpus iuris academicum systematice redactum, 1829.

Repetitorium über sämtliche auf den deutschen Universitäten üblichen juristischen Hauptcollegia, 1829.

以下は、プロイセン法、地域法のテキストである。

Institutionen des allgemeinen preußischen Civil- und Criminalrechts, 1827.

Theoretisch und praktisches Lehrbuch des preußischen Civil- und Criminalprozesses, 1827.

Nachträge zu den Strombeckschen Ergänzungen des allgemeinen Landrechts, 1829., Repetitorium über das allgemeine Landrecht für die preußischen Staaten, 1830., Handbuch über die Departements- Kreis- und Kommunal-Verwaltung, 1831.

Der Schiedsmann in den königlich-preußischen Staaten, 1833, 2. A. 1835.

Preußisches Gesetz-Handbuch, 2. A. 1833, 3. A. 1835.

Die preußische Exekutions- Subhastations- und Kaufgelderliquidations-Prozess- und Tax-Ordnung, 1834.

60歳、70歳、80歳の祝賀論文集がある。Festschrift Nikolaus Grass (hrsg. v. Carlen /Steinegger), 1975 (文献目録 S.585ff.). また、Festschrift Nikolaus Grass (hrsg. v. Ebert Kurt), 1986; Festgabe der Internationalen Gesellschaft für Rechtliche Volkskunde für Nikolaus Grass zum 80. Geburtstag, 1993.

Österreichische Historiker-Biographien, 1957.

Der Wiener Dom die Herrschaft zu Österreich und das Land Tirol, 1968.

Cusanus und das Volkstum der Berge, 1972.

Geschichte des Tiroler Metzgerhandwerks und der Fleischversorgung des Landes 1982, (hrsg.).

Alm und Wein (hrsg. v. Carlen Louis), 1990 (論文集).

Ausgewählte Aufsätze zum 80. Geburtstag (hrsg. v. Carlen /Faussner),

Repertorium über sämtliche das Stadt- Kommunal-Wesen betreffende Gesetze, 1835.

Repertorium über sämtliche das Land-Gemeinde-Wesen die Dorfverfassung und Verwaltung betreffenden Gesetze, 1835, 2. A. 1836.

Allgemeine preußische Civil- und Militär-Kirchen-Ordnung, 1837.

Repertorium über sämtliche durch die Gesetz-Sammlung und die Amtsblätter der Königlichen Regierungen seit ihrer Begründung bis 1836 publizierten das Kirchen und Schul-Verfassungs- Verwaltungs- und Polizeiwesen betreffenden Verordnungen, 1837.

Sammlung aller das Kirchen- und Schulwesen betreffenden Gesetze, 1838.

Allgemeine schlesische Polizei- und Kommunalregistratur, 1840.

Handbuch beim Studium und Gebrauch des preußischen allgemeinen Landrechts, 1847.

Die allgemeine Gerichtsordnung für die preußischen Staaten, 1857.

もっとも著名なのは以下のALR のテキストであり、ALR の解釈では、比較的古い系統のものである。パンデクテン法学の体系で再構成される前の解釈論を反映している。

Das preußische Zivilrecht nach Anleitung und der Titelfolge des Allgemeinen Landrechts, mit Berücksichtigung der neueren Gesetze, der Doctrin, der Praxis und des Römischen Rechts, 1842/44.

1993.

(3) イエッセン (J.Jessen) Die Selbstzeugnisse der deutschen Juristen, Erinnerungen, Tagebücher und Briefe, Eine Bibliographie, 1983 (Rechtshistorische Reihe: Bd.27). 法律家の自伝、日記、手紙 (Autobiographien, Tagebücher, Briefe) を集めたものである。簡単な略歴も記載されている。Hans Hattenhauer, Kielと Gerhard Köbler, Gießen に謝辞が述べられている。

同名の Henning Jessen, (1976-) は、1976年生まれで、1996年から、キール、コペンハーゲンの各大学で法律学を学び、2002年に、第一次国家試験に合格、ハンブルク大学の学術研究員となった。2005年に、ニューオーリンズの Tulane Law Schoolで、LL.M.を取得した。2005年に、ハレ・ヴィッテンベルク大学で学位をえて (WTO-Recht und Entwicklungsländer, 2006)、2006年に、第二次国家試験に合格。連邦の経済協力省 (Bundesministerium für wirtschaftliche Zusammenarbeit und Entwicklung) に勤務した後、ブレーメンの専門大学 (Hochschule Bremen) の教授、2012年に、ハンブルク大学のジュニア・プロフェッサーとなった⁷¹⁾。専門は、海法、海洋国際法である。

2 祝賀論文

それぞれの大学の祝賀論文集には、著名な法学者の研究が収録されることが多い。前述 (Ⅲ2(5)) のLexis, Die Universitäten im Deutschen Reich, 1904年も、各大学の学者による所属大学の紹介である (たとえば、ゲッティンゲン大学はHeinrich Titze, ベルリン大学は、Josef Kohlerである。S.102ff,

71) ジュニア・プロフェッサーは、比較的新しい称号である。伝統的なハビリタチオン論文を前提としない教授職であり、3年の任期つき (最長6年) である。人事の多様化と活性化を目的として、2002年に導入された。若手人材の早期の獲得を目的とする。評価により、テニユア (Tenure Track) のある任期のない職に転換するのが通常である (俸給表では、任期つきのW1から、任期のないW2,W3の教授)。科目が多様化しているおり、ハビリタチオン論文を実務家に求めるのは、むずかしいからである。【法学上の発見】496頁、508頁参照。ただし、安直な軽減のみでは、縁故や官僚の天下り先となる危険性が大きい。

S.122ff.)。

(1) R.Smend, Zur Geschichte der Berliner Juristenfakultät im 20. Jahrhundert, (Studium Berolinese- Afusätze und Beiträge zu Problemen der Wissenschaft und zur Geschichte der Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin に所収), 1960.

スメンド ((Carl Friedrich) Rudolf Smend, 1882.1.15-1975.7.5) は、1882年に、バーゼルで生まれた。父は、神学教授であった。1900年から、バーゼル、ベルリン、ボン、ゲッティンゲン大学で、法律学、哲学、歴史を学び、第一次国家試験に合格、1904年に、ゲッティンゲン大学で学位をえた (Die preußische Verfassungsurkunde im Vergleich mit der belgischen, 1904)。試補となった。1908年に、キール大学でハビリタチオンを取得 (Albert Hänelが師であった。論文は、Das Reichskammergericht 1911)。1909年に、グライフスヴァルト大学で、員外教授となった。1911年に、チュービンゲン大学の正教授となった。1915年に、ボン大学、1922年に、ベルリン大学に転じた。1935年に、ライヒ文部省の指示により、ゲッティンゲン大学の教授となった。Paul Schoen の後任であった。ナチスの政権期間には強制移籍や退職が行われ、ナチスによる追放と考えられている。1945/46年に、学長、1951年に、名誉教授となった。1946年から55年、ドイツ・プロテスタント教会の評議員。1975年に、ゲッティンゲンで亡くなった。

1947年から、MDR の、1948年から、Archiv des öffentlichen Rechtsの、1951年から、Zeitschrift für evangelisches Kirchenrechtの編集者となった⁷²⁾。

72) 顕彰記事がある。NJW 1957, 413 (Scheuner); NJW 1962, 529 (Scheuner); Catalogus professorum Gottingensium 1962, 54; DÖV 1967, 1/2. S. 47; AÖR 92 (1967), 137, 4. 追悼記事、NJW 1975, 1874 (Häberle); Kleinheyer/Schröder, a.a.O. (前注27)), S.512; DBE 9 (1998), 352; Stolleis, Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland, Bd. 3, Staats- und Verwaltungsrechtswissenschaft in Republik und Diktatur 1914-1945, 1999, 112, 174ff.; Koriath Stefan, Rudolf Smend, Festschrift 200 Jahre Juristische Fakultät der Humboldt-Universität zu Berlin, 2010, S.583. スメントについて、【歴史】446頁。

70歳と80歳の祝賀論文集がある。Rechtsprobleme in Staat und Kirche, Festschrift, 1952; Staatsverfassung und Kirchenordnung (hrsg. v. Hesse / Reicke / Scheuner, Festschrift, 1962.

Ungeschriebenes Verfassungsrecht im monarchischen Bundesstaat, 1916.

Politische Gewalt im Verfassungsstaat, 1923.

Verfassung und Verfassungsrecht, 1928.

Bürger und Bourgeois im deutschen Staatsrecht, 1933.

Staatsrechtliche Abhandlungen und andere Aufsätze, 1955, 3. A. 1994.

(2) H. Thieme/ Ch.Determann, Die Rechts- und Staatswissenschaftliche Fakultät 1945-1961 und ihre Seminare, 1961 (フライブルク大学の祝賀論文集である)。Thiemeについては、ゲルマニステンに関する別稿参照⁷³⁾。

(3) E.Hassinger, Bibliographie zur Universitätsgeschichte, Verzeichnis der im Gebiet der Bundesrepublik Deutschland 1945-1971. 1974.(Freiburger Beiträge zur Wissenschafts- und Universitätsgeschichte). これは、西ドイツの大学の歴史に関する書誌である。

(4) G.Köbler, Bibliographie der deutschen Hochschule zur Rechtsgeschichte, 1945-1964, 1969, 2.Aufl. 1972. (Göttinger Studien zur Rechtsgeschichte) これも、戦後の大学の法史の書誌である。ケプラー(Köbler)についても、前述Ⅱ4と、ゲルマニステンに関する別稿参照。

(5) H.Dau, Bibliographie juristischer Festschriften und Festschriftenbeiträge, 1864/1944, -1980/84, 1962-1987. 祝賀論文集には、献呈された人物の経歴と業績が掲載されていることが多い。被献呈者の関与があることも多いことから、網羅的で、文献相互の関係もわかりやすく、手っ取り早い検索手段となる。

ダウ(Helmut Dau, 1926.9.30-)は、法律学を学び、1959年に、ケルン大学で学位をえた。連邦行政裁判所の図書館の部門長となった。

Urheberrechtsreform und Grundgesetz, 1959 は、博士論文である。

73) Thiemeについて、前掲論文(前注10)独法104号)40頁。

上記の Bibliographie juristischer Festschriften und Festschriftenbeiträge, Bd. 1 ff. 1961ff.

祝賀論文集 Im Dienste des Rechts und der Rechtsliteratur, Festschrift zum 65. Geburtstag am 30. 09. 1991, (hrsg. v. Lansky /Walter), 1992 がある。

(6) 個別の学者のための祝賀論文集は列挙にいとまがない。献呈された者の経歴や業績一覧が掲載されることから、その詳細を知るには手っ取り早い。本稿では、いちいち立ち入らない。例示として、類型論で著名なケメラーの70歳の記念論文集を引用するにとどめる。著名人の記念論文集では、それに寄稿する執筆陣も豪華なことが多い(同書は1139頁)。

Festschrift für Ernst von Caemmerer zum 70. Geburtstag, (hrsg. Ficker/König D./Kreuzer K./Leser H./Marschall von Bieberstein W. Frhr. v./Schlechtriem P.), 1978.

また、65歳の時の記念論文Das Haager Einheitliche Kaufgesetz und das Deutsche Schuldrecht, (hrsg. v. Leser H./von Bieberstein Freiherr Marschall W.), 1973も統一テーマであるハーグの統一売買法に関するものであるが、Festschriftと冠されている(こちらは143頁の小冊子である)。

3 顕彰文、追悼文

ドイツの法学雑誌には、60歳、65歳、70歳、80歳などの生誕日に、法律家の顕彰記事が掲載され(Würdigung)、老大家の近況が報じられる。日本では、ほぼ死亡時のみである。亡くなったときには、追悼記事が出される(Nachruf)。5年おきに出されるような場合には、あまり変化もないが、近況を知らせる縁となり、その人の業績と人生を振り返る機会にもなる。弟子筋の者の手によることが多い。本稿では、いちいち引用しえないので、各法律家に関する注を参照されたい。

4 Kritische Justiz (hrsg.), Streitbare Juristen, 1988.

(1) ビスマルク帝国時代、ワイマール期、戦後の著名な法律家(一部政治家、運動家)の評伝である。

対象となっているのは、Ernst Theodor Amadeus Hoffmann (1776-1822), Karl Follen (1796-1840), Julius Hermann von Kirchmann (1802-1884), Karl Marx (1818-1883), Ferdinand Lassalle (1825-1864), Anton Menger (1841-1906), Anita Augspurg (1857-1943), Helene Stöcker (1869-1943), Karl Liebknecht (1871-1919), Paul Levi (1883-1930), Max Alsberg (1877-1933), Felix Halle (1884-1937), Max Hirschberg (1883-1964), Rudolf Olden (1885-1940), Hans Litten (1903-1938), Arnold Freymuth (1878-1933), Hermann Großmann (1878-1937 (?)), Alfred Orgler (1876-1943 (?)). 最後の3人は、ワイマール共和国時代の裁判官で、ナチスの被害者である。

さらに、Wilhelm Kroner (1870-1942), Walther Schücking (1875-1935), Hermann Ulrich Kantorowicz (1877-1940), Karl Korsch (1886-1961), Hermann Heller (1891-1933), Hugo Sinzheimer (1875-1945), Gustav Radbruch (1878-1949), Josef Hartinger (1893-1984), Fritz Goldschmidt (1893-1968), Friedrich Weißler (1891-1937), Lothar Kreyßig (1898-1986), Friedrich Justus Perels (1910-1945), Hans Kelsen (1881-1973), Otto Kahn-Freund (1900-1979), Franz L. Neumann (1900-1954), Otto Kirchheimer (1905-1965), Ernst Fraenkel (1898-1975), Elisabeth Selbert (1896-1986), Fritz Bauer (1903-1968), Adolf Arndt (1904-1974), Gustav W. Heinemann (1899-1976), Wolfgang Abendroth (1906-1985), Richard Schmid (1899-1986) である。

姉妹版の *Streitbare Juristinnen*, 2016 もあり、こちらは、女性法律家と、上記本を補充する法律家の評伝である。こちらを、第2巻とすれば、前者は第1巻となるが、第1巻にも、若干の女性法律家は掲載されていた。したがって、表題とは異なり、男女で区別されているわけではない。

Alfred Apfel (1882-1941), Otto Bauer (1881-1938), Margarete Berent (1887-1965), Marie Munk (1885-1978), Sebastian Cobler (1948-1989), Franz-Josef Degenhardt (1931-2011), Hedwig Dohm (1831-1919), Eugen Ehrlich (1862-1922), Helga Einsele (1910-2005), Winfried Hassemer (1940-2014), Werner Holtfort (1920-1992), Barbara Just-Dahmann (1922-2005), Franz Kafka (1883-1924), Leopold Kohr (1909-1994), Anna Mackenroth (1861-1936),

Nora Platiel (1896-1979), Diether Posser (1922-2010), Marie Raschke (1850-1935), Helmut Ridder (1919-2007), Wiltraut Rupp- v.Brünneck (1912-1977), Magdalene Schoch (1897-1987), Jürgen Seifert (1928-2005), Helmut Simon (1922-2013), Kurt Tucholsky (1890-1935), Edda Weßlau (1956-2014) と、いくつかのインタビュー (S.557ff.) が載っている (1段階法曹養成制度や女性法律家、ナチス期の司法行政など)。

(2) 同書を編集した Kritische Justiz (Die Kritische Justiz. Vierteljahresschrift für Recht und Politik) は、1968年からNomos により発行される法律雑誌である。当初は、法政策や社会運動を対象としていた。Nomos のHPに、解説がある。<http://www.kj.nomos.de/>

5 オーストリアの学者

(1) Brauner (hrsg.), Juristen in Österreich, 1200-1980, 1987. は、近代オーストリア法上の著名学者の簡単な人名辞典であるが、アルファベット順ではなく、中世、自然法、法典編纂、1850年から1900年、1900年から1980年と、年代順の記述となっている。人による法制史ともいえるが、Anhangには、アルファベット順に概略と業績、文献が記載されている。30人ほどの共著者による。

編者のブラウネーダーは、1943年に、Mödling で生まれた。法律学を学び、1965年に、学位をえて、さらに経済学を学んだ。オーストリア連邦のラント防衛省の懲戒部に勤めた。1966年に、Hans Lentze から、Werner Ogrisを紹介され、1967年に、助手となり、1971年に、Ogris の下でハビリタチオンを取得した (Die Entwicklung des Ehegüterrechts in Österreich, 1973) 。1973年から、ウィーン大学の社会科学部で、教えた。1975年に、リンツ大学教授、1977年に、ウィーン大学の員外教授、1980年に、ウィーン大学の正教授となった。1994年に、オーストリア国民議会議員 (FPÖ)、議長。1999年に引退した。ドイツ法史、ドイツ私法、オーストリア憲法史、行政法史、ヨーロッパ法などを専門とする。1977年に、新法史雑誌 (Zeitschrift für Neuere Rechtsgeschichte, ZNR) を創設。その著、オーストリア憲法史は、累計で3万部も売れた⁷⁴⁾。

Österreichische Verfassungsgeschichte, 1976, 2. A. 1980, 10. A. 2005.

Landesverfassungen und Landtagswahlordnungen, 1978.

Der Weg zu Staatsvertrag und Neutralität, 1980.

Staatsaufgaben, 1982.

Brauneder/Grohmann, Arbeitsbuch zur österreichischen Verfassungsgeschichte von 1948 bis zur Gegenwart, 1985.

Die historische Entwicklung der modernen Grundrechte in Österreich, 1987.

Leseverein und Rechtskultur 1992.

-
- 74) Brauneder, Who's who, S.77f. 記念論文集があり (Festschrift für Wilhelm Brauneder zum 65. Geburtstag (hrsg. v. Kohl /Neschwara /Simon) 2008)、その715頁以下に、業績目録がある。

オーストリアでは、トゥーン (Leo Graf von Thun und Hohenstein, 1811.4.7-1888.12.17) が、19世紀の法学教育の改革上、重要である。彼は、1811年に、Tetschenで生まれた。バーメン (ボヘミア) の貴族であった。兄弟に、外交官の Friedrich von Thun und Hohensteinがいる。プラハ大学で法律学を学び、1836年から、公務員。著述もした。宮廷官房の秘書官。1848年に、バーメンの行政長官、1849年から1860年の間、文化大臣 (1855年のKonkordat を成立させた)。1861年から71年、83年にも、バーメンのラント議会議員。オーストリアの上院議員。1888年に、ウィーンで亡くなった。1855年に、法史学を勉学の初年度におくなど、オーストリアの法律学の教育改革をしたことで著名である。ウンガーによるパンデクテン体系の導入の先駆けとなった。Vgl. DBE 10 (1999), 30. Franz Exner の献策によるものである (DBE 3 (1996), 201)。【法実務家】 327 頁、362 頁。

近時、トゥーンの改革が再注目されている。Graf von Thun und Hohenstein, Bildungspolitik im Kaiserreich: Die Thun-Hohenstein'sche Universitätsreform insbesondere am Beispiel der Juristenausbildung in Österreich : Die Thun-Hohenstein'sche Universitätsreform insbesondere am Beispiel der Juristenausbildung in Österreich, 2015があり、著者は、Lars Maximilian Graf von Thun und Hohensteinであり、縁戚である。ドイツ語圏には、縁戚の法律家は多い。独法107号1頁。

ABGBの起草者v.Zeiller(1751.1.14-1828.8.23) とゲーテの親交については、Dölemeyer, Goethe und Zeiller, ZNR 2016, 80.

Studien I - Entwicklung des öffentlichen Rechts, 1994, Studien II Entwicklung des Privatrechts, 1994.

Europäisches Privatrecht - Historische Wirklichkeit oder zeitbedingter Wunsch an die Geschichte, 1997.

Staatliche Vereinigung - Fördernde und hemmende Elemente in der deutschen Geschichte (hrsg.), 1998.

Studien III, Entwicklung des öffentlichen Rechts, II, 2002; Studien IV, Entwicklungen des öffentlichen und Privatrechts, 2012.

(2) 上述のオーバーコフラー (G.Oberkofler) の Studien zur Geschichte der österreichischen Rechtswissenschaft, 1984.も、オーストリアの学者と法学部の歴史的記述である。

(3) Keintzel/ Korotin, Wissenschaftlerinnen in und aus Österreich, 2002.は、法律家に限定されないが、オーストリア関係の女性学者350人の経歴と業績である。著者は、ほぼ1900年前後からウィーン、グラーツ、インスブルックの各大学で学び、オーストリアでハビリタチオンを取得した第1世代の女性学者である。編者の2人は、学術史と哲学の専門家で、前者は、ウィーン大学のジェンダー研究所の研究員で、後者は、ウィーン大学の学術・芸術研究所の女性研究の文書庫長である。

(4) オーストリアの立法資料で著名なオフナー (Julius Ofner, 1845.8.20-1924.9.26) は、1845年に、ベームンの Horschenzで生まれた。1863年から、プラハ、ウィーンの両大学で学び、1869年に学位。1885年に、ウィーンで弁護士となった。ウィーン弁護士会の副会長。のちライヒスゲリヒトの裁判官、1896年に、下オーストリアのラント議会議員、1901年から18年、ライヒ議会議員、1918/19年、臨時国民議会議員、1919年に、憲法裁判所の参与員となった。1915年に、70歳の記念論文集が出ている。Julius Ofner zum 70. Geburtstag, Festschrift, 1915. 1924年に、ウィーンで亡くなった。

Der Ur-Entwurf und die Berathungs-Protokolle des Oesterreichischen Allgemeinen bürgerlichen Gesetzbuches, 1889. 1976年に、復刻されている。

Der Servitutenbegriff nach römischem und österreichischem Recht, 1884.

Das Recht auf Arbeit, 1885.

Der Grundgedanke des Weltrechts, 1889.

Studien sozialer Jurisprudenz, 1894.

Das soziale Rechtsdenken, 1923.

Recht und Gesetz (hrsg. v. Eckstein).1931.

Vgl. DBE 7 (1998), 478; Wesener, Anfänge und Entwicklung der österreichischen Privatrechtsgeschichte im 19. und frühen 20. Jahrhundert, ZNR 2006, 382, 395.

6 ヴィアッカーの学派

ヴィアッカーの弟子は、法制史上の重要な一派を形成している。法制史家が多いことから、人名録や評伝などに執筆する機会も多い。ヴィアッカー自身については、【法学上の発見】486頁以下。

(1)(a) ランゲ (Hermann Lange, 1922.1.24-2018.7.28) は、1922年に、ドレスデンで生まれた。1940年から、ライプツヒ、ミュンヘン、フライブルク (ブライスガウ) の各大学で、法律学を学び (Pringsheim, Wieackerに学ぶ)、1942年に、第一次国家試験に合格し、1944年に、ヴィアッカーの下で学位をえた (Das Kontingent als Rechtsbegriff, 1944)。1949年に、第二次国家試験に合格、1953年に、フライブルク大学で、ヴィアッカーの下で、ハビリタチオンを取得した (Schadensersatz und Privatstrafe in der mittelalterlichen Rechtstheorie, 1955)。1955年に、インスブルック大学で員外教授、1957年に、キール大学の正教授となった。1962年に、マインツ大学、1966年に、チュービンゲン大学に移籍した。1971年に、マインツの学術・文学アカデミー会員。2018年に、96歳の高齢で、チュービンゲンで亡くなった⁷⁵⁾。

70歳の祝賀論文集がある。Festschrift (hrsg. v. Medicus /Mertens /Nörr K.W./Zöllner), 1992 (文献一覧がある。1037頁以下)。

75) Who's who, S.394. 顕彰記事がある。NJW 1997, 241 (Schiemann), NJW 2002, 349 (Mertens)。

Die Consilien des Baldus de Ubaldis, 1974.

Fälle zum Sachenrecht, 1977.

Lange/Scheyhing/Schiemann, Fälle zum Sachenrecht, 4. A. 1998, 6. A. 2008.

Lange/Schiemann, Schadensersatz, 1979, 2. A. 1990, 3. A. 2003.

Soergel Bürgerliches Gesetzbuch Familienrecht, 12. A. 1987f.

Das Problem der Rezeption im Recht, 1986.

Wandlungen des Schadensersatzrechts, 1987.

Haftung für neues Leben? 1991.

Die Anfänge der modernen Rechtswissenschaft, 1993.

Römisches Recht im Mittelalter, Bd. 1 1997, Bd. 2. 2007.

Hundert Jahre BGB, 2000.

(b) 民法のランゲ (Carl Heinrich Lange, 1900.3.25-1977.9.17) は、別人である。彼は、1900年に、ライプツヒで生まれた。1977年に、Starnberg で亡くなった。父は、銀行の支配人であった。1919年から、ライプツヒ、ミュンヘンの各大学で、法律学を学び、1922年に、第一次国家試験に合格 (gut)、1925年に、学位を取得 (Die theoretische Begründbarkeit der vom Reichsgericht entwickelten Unterlassungsklage bei unerlaubten Handlungen, 1925)、1926年に、第二次国家試験に合格 (同じく gut)。ザクセンで試補をした。さらに、ライプツヒ大学の Heinrich Siber の助手となった。1929年に、ライプツヒのラント裁判所と区裁判所の裁判官となった。1929年に、同じく Silberの下で、ハビリタチオンを取得した (Das kausale Element im Tatbestand der klassischen Eigentumstradition, 1930)。1933年に、ザクセンの成人教育省の政府顧問官 (大学参与員)。1934年に、ライプツヒ大学教授、同年、心臓病で死亡したRichard Schottの後継として、プレスラウ大学教授。1934年に、ドイツ法アカデミーの委員 (1939年まで)、ナチスの法革新作業に参加した。1939年に、Felgenträgerの後継として、ミュンヘン大学教授。1945年に、占領軍により解雇されたが、のちに免責された。1948年に、バンベルクの哲学・神学大学の講義をした。1949年に、ミュンヘンのHauptkammer は、正教授の地位の回復を取消した。1949年に、弁護士となった。1951年に、ザー

ルブリュッケン大学の客員教授、1952年に、ヴェルツブルク大学の私講師、1953年に、ヴェルツブルク大学の正教授となった。1967年に、名誉教授となった。専門は、民法、民訴法、ローマ法、法史である⁷⁶⁾。

70歳の祝賀論文集がある。Rechtsbewahrung und Rechtsentwicklung (hrsg. v. Kuchinke, Festschrift) 1970 (文献一覧 S.449)。

Liberalismus Nationalsozialismus und bürgerliches Recht, 1933.

Vom Gesetzesstaat zum Rechtsstaat, 1934.

Vom alten zum neuen Schuldrecht, 1934.

Nationalsozialismus und bürgerliches Recht, 1935.

Lage und Aufgabe der deutschen Privatrechtswissenschaft, 1937.

Boden Ware Geld, 1937, 3. A. 1944.

Das Recht des Testamentes, 1937. (ドイツ法アカデミーの相続法委員会の報告である)。

Die Ordnung der gesetzlichen Erbfolge, 1938. (同)。

Die Regelung der Erbenhaftung, 1939.

Erwerb Sicherung und Abwicklung der Erbschaft (bearb. v. Bartholomeyczik Horst), 1940. (同、提出責任者となった)。

Das Verbot der Berufsausübung im Mittelalter, 1940.

Die Entwicklung der Wissenschaft vom bürgerlichen Recht seit 1933, 1941.

Erbeinsetzung andere Zuwendungen und Erbschein (bearb. v. Bartholomeyczik Horst, 1942 (ドイツ法アカデミーの報告で、責任者となった)。

Ware und Geld, 1942, 2. A. 1943.

以下の2 著は、ハンディーなテキストとして、著者の没後も、かなりの版を重ねた。

BGB Allgemeiner Teil, 1952, 27. A. 2003, 29. A. 2005.

76) 顕彰記事がある。NJW 1970, 552 (Habscheid), NJW 1978, 309 (Kuchinke); Stolleis, Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland, Bd. 3, Staats- und Verwaltungsrechtswissenschaft in Republik und Diktatur 1914-1945, 1999, 262; Klee, Das Personenlexikon zum Dritten Reich, 2003, 356.

Lehrbuch des Erbrechts, 1962, 2. A. (Kuchinkeによる改定) 1978, 4. A. 1995, 5. A. 2001.

(c) ヴィアッカーと同じく、ライプツヒ大学から西側に脱出した者として、ゲッティンゲン大学の Eberhard (Ludwig Ferdinand) Schmidt (1891.3.16-1977.6.17) がいる。彼は、1891年に、ブランデンブルクのJüterbogで生まれた。父は、医師であった。海軍士官になることを希望し、キールの海事学校にいったが、1910年に、心臓麻痺を起こし業務に適さなくなり、ベルリン大学で法学を学んだ。刑法学者のリストの最後の弟子となった。1913年に、第一次国家試験に合格。1913年に、ゲッティンゲン大学で学位の口述試験。リストの弟子であった Robert von Hippelの審査をうけた。同年、Jüterbogで研修。1914年に、学位（成績はmagna cum laude, 論文はDie Kriminalpolitik Preußens unter Friedrich Wilhelm I. und Friedrich II, 1913）。1914年から、ベルリンでLiszt, Eduard Kohlrausch, James Goldschmidtらの助手。1915年に、赤十字の病人輸送業務についた。1917年に、ライヒ内務部の学術グループに属し、1920年に、刑法学者のリストとWilhelm Kahlの下でハビリタチオンを取得（Fiskalat und Strafprozess, 1921）。同年、修習生の地位を解雇され、第二次国家試験をうけることができなかった。1921年に、Heilbornの後任で、ブレスラウ大学の員外教授。1926年にキール大学教授、1929年に、Moritz Liepmannの後任で、ハンブルク大学教授。1933年学長。1935年に、Friedrich Schaffsteinの後任として、ライプツヒ大学教授。Karl August Eckhardtの推薦であった。1933年に、ナチス教員連盟、1934年には、ナチスの法律家連盟に加入。ドイツ法アカデミーの会員でもあった。1939年に、野戦裁判官。1941年からは、国防軍司令部の裁判部で勤務（800ほどの判決にかかわる）。1945年に、アメリカ軍の捕虜収容所に収容。

その後、ライプツヒなどエルベ河西側のザクセン地域は、西ベルリンと交換され、東側に組み込まれた。同年、戦犯となるおそれから、助教授の Völkerの車で、ゲッティンゲンに脱出した。ニーダーザクセン州の南部に位置するゲッティンゲンは、東西ドイツ国境から近い。ゲッティンゲンにおいて、Rudolf Smend とHans Welzelの協力をうけて、占領軍政府から刑法の自由授業をする

許可をえた(聴講者500人)。1946年に、1945年に遡及して、ゲッチンゲン大学教授となった。1948年に、非ナチス化委員会の審査開始、同年、ハイデルベルクに移住。ラートブルフの後継講座の授業。1949年に、非ナチス化手続きの中止決定をうけた。1959年に、定年となった。専門は、刑法、刑訴法である。70歳の記念論文集がある。Festschrift für Eberhard Schmidt (hrsg.), Bockelmann /Gallas, 1961.

(リストのテキストの改定) Lehrbuch des deutschen Strafrechts, 23. A. 1921, 26. A. 1932.

Rechtsentwicklung in Preußen, 1923, 2. A. 1929, Neud.1961. 業績は500にもなるが、ほかは省略。

(Vgl. DBE 9 (1998), 4; Klee, Das Personenlexikon zum Dritten Reich, 2003, 544; Volbehr/Weyl, Professoren und Dozenten der Christian-Albrechts-Universität zu Kiel 1665-1954, 1956, 42; Catalogus professorum Gottingensium 1962, 55. 顕彰記事もある。NJW 1961, 449 (Niese); NJW 1971, 651 (Dreher) ほか。DBE, Klee, Das Personenlexikon zum Dritten Reich 2003, 544).

(2) J.ヴォルフ (Joseph Georg Wolf, 1930.7.6-) は、1930年に、デュッセルドルフで生まれた。法律学を学び、1959年に、ゲッチンゲン大学で学位をえて (Error im römischen Vertragsrecht, 1961)、1964年に、ハビリタチオンを取得した。指導教授は、いずれもヴィアッカーであった。1964年に、フライブルク (ブライスガウ) 大学教授、名誉教授となった。専門は、ローマ法、民法、私法史である。ハイデルベルクの学術アカデミー会員。ゲッチンゲン学術アカデミー会員⁷⁷⁾。

Der Normzweck im Deliktsrecht, 1962.

Die litis contestatio im römischen Zivilprozess, 1968.

Causa stipulationis, 1969.

Politik und Gerechtigkeit bei Trajan, 1978.

77) Who's who, S.800. 70歳のときの祝賀論文集がある。Quaestiones iuris, Festschrift, 2000.

Das Senatusconsultum Silanianum, 1988.

(3) デーセルホルスト (Malte Dießelhorst, 1928.8.18- 2012.6.30) は、1928年、エッセンに生まれた。父は、政府顧問官であった。1946年から、ヴェルツブルク、フライブルク (ブライスガウ) の各大学で法律学を学び、1950年に、第一次国家試験に合格し、1955年にフライブルク大学のヴィアッカーの下で学位をえた (Die Lehre des Hugo Grotius vom Versprechen, 1959)。1956年に、第二次国家試験に合格した。1957年に、フライブルク大学で助手となり、1959年に、ゲッチンゲン大学助手。1966年に、ゲッチンゲン大学で、ヴィアッカーの下でハビリタチオンを取得した (Die Natur der Sache als außergesetzliche Rechtsquelle, 1968)。1971年に、ゲッチンゲン大学で教授となった。民法、私法史、法哲学をおもな分野とする。2012年に、亡くなった⁷⁸⁾。

著作の多くは法史に関するが、ハビリタチオン論文では、不当利得を論じた。内容は現代的なもので、契約の無効・取消のさいの清算に関するものであり、不当利得法における差額説と2 請求権対立説を比較検討する (Die Natur der Sache als außergesetzliche Rechtsquelle verfolgt an der Rechtssprechung zur Saldotheorie, 1968)。彼に対する祝賀論文集がある。Gerechtigkeit und Geschichte (hrsg. v. Behrends /Dreier), Festschrift, 1996 (文献目録 S.155ff.)。

Ursprünge des modernen Systemdenkens bei Hobbes, 1968.

Zum Vermögensrechtssystem Samuel Pufendorfs, 1976.

Die Prozesse des Müllers Arnold, 1984.

Naturzustand und Sozialvertrag bei Hobbes und Kant, 1988.

(4) リーブス (Detlef Liebs, 1936.10.12-) は、1936年に、ベルリンで生まれた。フライブルク (ブライスガウ) 大学で法律学を学び、ヴィアッカーの筆記助手 (studentische Schreibkraft) となった。1962年に、ヴィアッカーの下で学位をえた (Hermogenians iuris epitome, 1964)。1970年に、同じく、ゲッチンゲン大学のヴィアッカーの下でハビリタチオンを取得した (Die Klagenkonzurrenz im römischen Recht - Zur Geschichte der Scheidung von

78) Who's who, S.122.

Schadensersatz und Privatstrafe -, 1972)。1970年に、フライブルク大学の正教授となった。2005年に、講義負担を免除された。ローマ法、民法、近世私法史が専門である。ブリテイッシュ・アカデミー会員、バイエルン学術アカデミー会員。Academia storico-giuridica Costantiniana Perugia/Spello の副会長⁷⁹⁾。

Reurecht des Käufers an der Haustür, 1970.

Römisches Recht, 1975, 2. A. 1982, 6. A. 2004.

Lateinische Rechtsregeln und Rechtssprichwörter, 1982, 7. A. 2007.

Die Jurisprudenz im spätantiken Italien, 1987.

Exempla Iuris Romani - Römische Rechtstexte (hrsg. v. Fuhrmann /Liebs), 1988, 2. A. 1988.

Römische Jurisprudenz in Africa, 1993, 2. A. 2005.

Römische Jurisprudenz in Gallien 2. bis 8. Jahrhundert, 2002.

Vor den Richtern Roms, 2007.

Hofjuristen der römischen Kaiser, 2010.

Summoned to the Roman Courts -Famous Trials from Antiquity, 2012.

(5) ベーレンス (Okko Behrends, 1939.2.27-) は、1939年に、東フリースラントの Norden で生まれた。1958年から、フライブルク (ブライスガウ)、ジュネーブ、ミュンヘン、ゲッティンゲンの各大学で法律学を学び、1962年に、第一次国家試験に合格、1967年に、ゲッティンゲン大学で、ヴィアッカーの下で学位をえた (Die römische Geschworenenverfassung, 1970)。1972年に、同じく、ヴィアッカーの下でハビリタチオンを取得 (Der Zwölftafelprozess, 1974)。1974年に、ゲッティンゲン大学の員外教授となった。1975年に、同大学の正教授となった。2007年に、名誉教授となった。専門は、ローマ法史、民法、私法史などである。1982年から、ゲッティンゲンの学術アカデミー会員⁸⁰⁾。70歳の祝賀論文集

79) Who's who, S.410. 75歳のときの祝賀論文集がある。Römische Jurisprudenz, Festschrift (hrsg. v. Muscheler), 2011.

80) Who's who, S.41.

Peter-Stephan Berens (Trier Juristen, Die Mitglieder der Juristenfakultät und ihre Einbindung in Ämter und Bürgerschaft der Stadt von 1600 bis 1722, 2008) は、

がある。Ars iuris (Festschrift, hrsg. v. Avenarius Martin), 2009.

Die Wissenschaftslehre im Zivilrecht, 1976.

Die fraus legis, 1982.

Corpus iuris civilis - Die Institutionen (hrsg. v. Behrends /Knütel /Kupisch /Seiler), 1993, 2. A. 1999.

Rudolf von Jhering, 2. A. 1993.

Institut und Prinzip (hrsg. v. Avenarius /Meyer-Pritzl /Möller), 2004.

(6) ヴォールシュレーガー (Christian Wollschläger, 1936.10.19-1998.12.20) は、1936年に、Reichenbach/Eulengebirgeで、生まれた。1969年に、ゲッティンゲン大学のヴィアッカーの下で学位をえた (Die Entstehung der Unmöglichkeitstheorie, 1970)。1975年に、同じくヴィアッカーの下でハビリタチオンを取得した (Die Geschäftsführung ohne Auftrag - Theorie und Rechtsprechung, 1976)。Bielefeld 大学の正教授となり、1998年に、Bielefeld で亡くなった。追悼集会の記録がある。Gedenkkolloquium für Christian Wollschläger 18. Juni 1999, 1999. まだ 61 歳であった。専門は、民法、近代私法史である。

学位論文は、不能概念の歴史的生成に関するものであり、比較的軽いものが多いドイツの学位論文の中では、ごく質の高いものである。ハビリタチオン論文も、事務管理を対象とするが、その後の業績では、法史関係のものが多い。

Ihering Rudolf von Briefe der Göttinger Zeit (hrsg. v. Wollschläger Christian), 1968.

Geschäftsführung ohne Auftrag im öffentlichen Recht und Erstattungsanspruch, 1977.

Friedrich Carl von Savigny, 3 Landrechtsvorlesung, 1824, 1994ff.

Savignys Landrechtsvorlesung (in) 200 Jahre Allgemeines Landrecht für die preußischen Staaten, 1995.

Streitgegenstände und Parteien am Friedensgericht Xanten 1826-1830 (in) Wirkungen europäischer Rechtskultur, 1997, 1425.

別人である。

7 女性法律家 (Gerhard (hrsg.), Frauen in der Geschichte des Rechts, 1997)

(1) ゲルハルド (Ute Gerhard, 1939-) は、1939年に生まれた。フランクフルト大学の社会学の教授で、とくに、女性研究が専門である。ほかに、Verhältnisse und Verhinderungen. Frauenarbeit, Familie und Rechte der Frauen im 19. Jahrhundert, 1978; Gleichheit ohne Angleichung. Frauen im Recht, 1990などがある。

(2) デレマイヤー (Barbara Dölemeyer, 1946.9.19-) は、1946年に、Bad Langensalza で生まれた。1968年に、ウィーン大学のフランス語通訳の資格取得、1970年に、法学の学位をえた。1972年に、フランクフルト大学のマックスプランク・ヨーロッパ法制史研究所の学術研究員となった。1995年に、ギーセン大学から名誉教授号をうけた。ドイツ法史、ヨーロッパ法史などを専門とする。ユグノー研究もしている。

Aspekte zur Rechtsgeschichte des deutschen Refugé, 1988.

Frankfurter Juristen im 17. und 18. Jahrhundert, 1993.

Gesetz und Gesetzgebung im Europa der frühen Neuzeit, 1998.

Die Hugenotten, 2006.

(3) ロース (Fritz Loos, 1939.1.23-) は、1939年に、ノルトライン・ヴェストファーレン南部のSiegenで生まれた。1970年に、ボン大学の Hans Welzelの下で学位をえた (Zur Wert- und Rechtslehre Max Webers, 1970)。1976年に、同じく Welzelの下でハビリタチオンを取得した。ボン大学教授、1978年に、ゲッティンゲン大学教授となった。のち名誉教授。刑法、刑訴法、法哲学を専門とする。Grundfragen des Strafrechts (Kolloquium, hrsg. v. Koriath Heinz u. a.), 2010.

専門は刑法であるが、ゲッティンゲン大学の法学者に関する著作がある。Rechtswissenschaft in Göttingen, 1987 (hrsg.).

(4) また、中世の女性については、Shulamith Shahar, Die Frau im Mittelalter (übers. von Ruth Achlama), 1981.

論文では、Martens, S., Kurze Geschichte der Frau im Recht, Jura 2018,

1191.

著者の Sebastian A. E. Martens (1980-) は、1980年に、ハンブルクで生まれた。2000年から、コンスタンツ大学で法学を学び、2004年に、第一次国家試験に合格、同年、ハンブルクのマックス・プランク研究所で学術研究員、2005年に、オックスフォード大学で修士号をえた。2007年に、レーゲンスブルク大学の Prädikat の下で学位 (Durch Dritte verursachte Willensmängel, 2007)。2008年に、第二次国家試験に合格。2012年に、同大学でハビリタチオンを取得した (Methodenlehre des Unionsrechts, 2013)。2013年に、パッサウ大学で講師、2015年に、同大学で、教授。専門は、民法、法史、ローマ法である⁸¹⁾。

(5) ほかに、女性法律家に関する文献は多数出ている。以下は、一部にすぎない。近時は、種々の観点から毎年のように出版されている。

Deutscher Juristinnenbund e.V. (hrsg.), Marion Röwekamp, Juristinnen – Lexikon zu Leben und Werk, 2005.

81) Klaus-Peter Martens (1941-) は、その縁戚であり、1941年に、ハンブルクで生まれた。ハンブルク、フライブルク (ブライスガウ) の各大学で法学を学び、1968年に、ケルン大学の助手。1969年に、ケルン大学で学位をえた (Mehrheits- und Konzernherrschaft in der personalistischen GmbH, 1970)。1975年に、ケルン大学の Herbert Wiedemannの下で、ハビリタチオンを取得した (Verfahrensablauf und Entscheidungskompetenz der Einigungsstelle - Grundfragen des betrieblichen Schlichtungsrechts, 1978)。1976年から、ミュンスター、ハンブルク、ギーゼンの各大学で講師をして、1978年に、ハンブルク大学の正教授。1981年に、ハンブルク高裁 (ハンザ高裁) の裁判官 (1995年まで)。専門は、商法、労働法、団体法である。

Existentielle Wirtschaftsabhängigkeit, 1979.

Die Gruppenabgrenzung der leitenden Angestellten nach dem Mitbestimmungsgesetz, 1979.

Arbeitsrecht der leitenden Angestellten, 1982.

Das Recht der unternehmerischen Mitbestimmung, 1983.

Leitfaden für die Leitung der Hauptversammlung, 2. A. 2000.

Vgl. Who's who im deutschen Recht, 2003, S.439.

Marion Röwekamp, Die ersten deutschen Juristinnen, Eine Geschichte ihrer Professionalisierung und Emanzipation (1900-1945), 2011.

Ursula Köhler-Lutterbeck, Monika Siedentopf, Lexikon der 1000 Frauen, 2000.

Ursula Köhler-Lutterbeck, Monika Siedentopf, Frauen im Rheinland, Außergewöhnliche Biographien aus der Mitte Europas, 2001.

Deutscher Juristinnenbund e.V. (hrsg.), Juristinnen in Deutschland, Die Zeit von 1900 bis 2003, 4.Aufl., 2003.

Women Lawyer Switzerland (hrsg.), Juristinnen in der Schweiz: anders! Femmes jurists suisses: différentes!, 2014.

Oda Cordes, Frauen als Wegbereiter des Rechts, Die ersten deutschen Juristinnen und ihre Reformforderungen in der Weimarer Republik, 2012.

Gerhard Strejcek, Erlerntes Recht, Zur Ausbildung von Juristinnen und Juristen an der Wiener Universität 1365-2015, 2014.

Kimble, Röwekamp (ed.), New Perspectives on European Women's Legal History, 2014.

(なお、前述Ⅳ4のStreitbare Juristinnen, 2016をも参照)。

8 ヴェーゼル (Uwe Wesel, 1933.2.2-)

Wesel, Geschichte des Rechts in Europa, von den Frühformen bis zum Vertrag von Maastrich, 1997. 彼は、1933年に、ハンブルクで生まれた。1953年から、ハンブルク大学で、古典文献学を学んだ。師は、Bruno Snell であったが、法学者の Wolfgang Kunkelからの勧めもあった。1957年から、ミュンヘン大学で法律学を学び、1961年に、第一次国家試験に合格し、1965年に、学位をえた (Rhetorische Statuslehre und Gesetzesauslegung der römischen Juristen, 1967)。1966年に、第二次国家試験に合格し、1968年に、ハビリタチオンを取得した (Zur dinglichen Wirkung der Rücktrittsvorbehalte des römischen Kaufs 1968, ZRG RA 85 (1968), 94)。師は、クンケルであった。ミュンヘン大学の私講師をした後、1969年に、ベルリン自由大学の正教授となった。

1969/73 年に、副学長 (Vizepräsident)。2001年に、定年となり、2006に弁護士となった。民法、ローマ法、法史などを専門とする。

顕彰記事がある。FAZ 31. 01. 2003 (Vec Milo); NJW 2003, 803 (Simon Dieter); NJW 2008, 426 (Hähnchen Susanne); FAZ Juli 2011 (ib.); FAZ 2013, 128 (Kaub Jürgen)。

Die Hausarbeit in der Digestenexegese, 1966, 2. A. 1974, 3. A. 1989.

Der Mythos vom Matriarchat, 1980.

Aufklärungen über Recht, 1981.

Juristische Weltkunde, 1984, 2. A. 1985, 8. A. 2000.

Frühformen des Rechts in vorstaatlichen Gesellschaften, 1985.

Recht und Gewalt, 1989.

Fast alles was Recht ist, 1992, 2. A. 1992, 9. A. 2014.

Der Honecker-Prozess, 1994.

Geschichte des Rechts, 1997, 2. A. 2001, 4. A. 2014. 冒頭の類似するタイトルの著作は、本書を補完するものであり、やや観点が異なるが、いずれも大著である (581頁と734頁)。本書は、法の前史、メソポタミアやエジプト、ヘブライにも言及し、ギリシア、ローマは一部にすぎない。パピルス学も扱う。古代部分に特徴がある。ゲルマンと中世、近世法史、ナチス、DDR、連邦共和国にいたるが、中世以降は、おもにドイツ語圏に対象が限定されている。

これに対し、冒頭のGeschichte des Rechts in Europa, Von den Griechen bis zum Vertrag von Lissabon, 2010. ヨーロッパに特化した法の包括的な研究である。ギリシア、ローマ、ビザンツから、中世、19世紀、20世紀とたどる。中世以降の記述が詳しく、ヨーロッパでもスペインから北欧、イギリスからロシアまでが対象となっている。

Risiko Rechtsanwalt, 2001, 2. A. 2001.

Die verspielte Revolution 1968 und die Folgen, 2002.

Recht Unrecht und Gerechtigkeit, 2003.

Der Gang nach Karlsruhe, 2004.

V 書誌の補遺

1 他の人名辞典

I でふれた ADB, NDB のほかに、一般の人名辞典には、いちいち立ち入らない。

(1) DBE にのみふれておく。Deutsche Biographische Enzyklopädie は、Walther Killyと Rudolf Vierhausによって公刊された人名辞典である。初版は、1995年から2003年にかけて、13巻で出版された。5万6000人が記載されている(本文のみ、さらに1万4000人が文中で言及されている)。2005年から2008年に、補遺を本編に組み込んで12巻の第2版が出された。対象となった人名は、6万3000人に増加された。各人の生涯、出自、教育、功績、作品や業績、交友関係、組織との関係、うけた賞や栄誉などが記せられている。ドイツ語圏の者が対象であるから、オーストリアやスイス、エルザス、バルト海沿岸、その他外国のドイツ語使用の少数民族などの者も包含される。

ただし、Ernst Klee(上述II 7参照)によれば、ナチスの経歴の持主を体裁よく言い繕っているとの批判もある。ペーパーバックや CD 版が出たほか、インターネット版もある(Walter de Gruyter)。

DBE

1	1995	8	1998			
2	1995	9	1998			
3	1996	10	1999			
4	1996	11	補遺、人名索引	11/1	11/2	2000
5	1997	12	場所索引、職業索引	12/1	12/2	2000
6	1997	13	追加	2003		
7	1998					

(2) DBE の英語版である DGBがある(Dictionary of Germany Biography)。内容は、必ずしも同一ではない。

(3) DBA (Deutsches Biographisches Archiv, München, 1999-2002) これは、ザウアー社による18世紀から20世紀の人名録からの記事の集成である。マイクロフィッシュにより、DBA I では、21万3000人の48万の記事が、1700年から1910年までの254 の事典から、集められた。1986年に、紙に印刷されたものが、DBI (Deutscher Biographischer Index) として出版された。

1989年から1993年には、DBA IIとして、続編が作成された。さらに、1999年からは、1960年から1999年までの事典からの人名の記事が集められている (DBA III)。DBA は、デジタル化され、オンラインでも検索可能となっている (WBIS Online)。一部の公共図書館や大学の図書館で検索可能である。IBI は、その簡約・修正版である。

2 地域研究

(1) ラント・州に特有な法律家の研究もある。これについては、多種多様で切りがないが、たとえば、ニーダーザクセン州の法律家について、Niedersächsische Juristen, Ein historisches Lexikon mit einer landesgeschichtlichen Einführung und Bibliographie, hrsg.v. Rückert / Vortmann, 2003. 類似のものは、他の州や地域に関するものもある。いちいち立ち入りえないが、同書では、I 部の概観、ラント、法、裁判所などの解説のほか、II部で、比較的詳しく法律家を検討し (50人程度、1 頁以下)、III 部では、簡略に他の法律家を検討している (305 頁以下)。

編者のリュッケルト (Joachim Rückert, 1945.8.16-) は、1945年に、上バイエルンの Pöttmes (Aichach) で生まれた。1964年からベルリン自由大学、チュービンゲン大学、ミュンヘン大学で法律学と歴史を学び、1969年に、第一次国家試験に合格、1970年に、シュパイエル行政専門大学で学び、1972年に、ミュンヘン大学の Sten Gagnér の下で、学位をえた (論文は August Ludwig Reyschers Leben und Rechtstheorie 1802-1880, 1974. 成績は summa cum laude)。1973年に、助手となり、1973年に、第二次国家試験に合格した。1982年に、Hermann Nehlsen と Sten Gagnér の下で、ハビリタチオンを取得した (Idealismus Jurisprudenz und Politik bei Friedrich Carl von Savigny,

1984)。私講師となり、1984年に、ハノーバー大学で正教授となった。1993年に、フランクフルト（マイン）大学に転じた（当初、寄附講座、1998年から法史、民法、法哲学講座）。2010年に、定年となった。後任は、Louis Pahlowであった。以下の業績がある⁸²⁾。

82) Marschall, a.a.O. (前注13) 参照), S.358.

地域研究はかなり盛んである。大都市だけではなく、小都市にもある。たとえば、フライブルク（ブライスガウ）近郊のシュタウフェン（ブライスガウ）に関係する著名人では、ファウスト（Johann Georg Faust (ca.1480 - 1541)）がいる。そこでは、彼は、錬金術の実験中に爆発で死亡したことになる。彼が滞在したホテルでは部屋を保存して、あやしげな遺品も残っている。その名は、ゲーテの「ファウスト」によって著名であるが、逸話の大半は創作である。同市は、人口8000人程度の小都市である（1990年代まで、その名にちなんでGeothe-Institutの学校が置かれていた）。その地の出身者のうち、法律家では、連邦裁判所や連邦憲法裁判所の裁判官となったファラー（Hans Joachim Faller, 1915.5.17- 2006.9.9）と、ベートーベンの子のグライヘンシュタイン（Ignaz von Gleichenstein, 1778 - 1828）が著名である。Vgl. Geiges, Faust's Tod in Staufen, Sage - Dokumente, 1989. その他の各地の地域研究でも、逸話のほか、その地域の法律家をも顕彰していることが多い。

(1) ファラーは、1915年に、シュタウフェンで生まれ、オッフエンブルクのギムナジウムを卒業した。ミュンヘン大学とフライブルク（ブライスガウ）大学で法学を学んだ。ミュンヘンでは、カトリックの学生団体 KDStV Aenania München に加入。1938年に、第一次国家試験に合格、学位をえて、兵役に服した。1947年に、第二次国家試験に合格。1948年に、オッフエンブルクで試補となり、同地で裁判官となった。バーデンの司法省や連邦司法省でも働いた。1953年に、連邦憲法裁判所の第一部の事務局で政府の理事官となり、1959年に、連邦裁判所（BGH）の裁判官となった。1971年12月に、連邦憲法裁判所の第一部の裁判官となった。Erwin Steinの後継であった。学校や大学に関する判決で著名である。1983年に、引退した。後継は、Johann Friedrich Henschel であった。1976年に、マンハイム大学から名誉教授号をうけ、1983年に、連邦共和国の大功労賞をうけた。引退後、多くの法学上の著作を著した。2006年に、カールスルーエで亡くなった。

祝賀論文集がある。Wolfgang Zeidler (hrsg.), Festschrift Hans Joachim Faller, 1984.

(2) グライヘンシュタインは、1778年に、シュタウフェンで生まれ、父も法律

Rückert /Friedrich W., Betriebliche Arbeiterausschüsse in Deutschland Großbritannien und Frankreich im späten 19. und frühen 20. Jahrhundert, 1979.

Unmöglichkeit und Annahmeverzug im Dienst- und Arbeitsvertrag, ZfA 1983, S.1 ff. 法史家であるが、雇用契約における不能と受領遅滞の研究がある。また、不能、不可抗力と領域など、帰責事由の本質や免責に関する研究をしている。

Vom casus zur Unmöglichkeit und von der Sphäre zum Synallagma -Weichenstellungen bei der Risikoverteilung im gegenseitigen Vertrag, entwickelt am Beispiel des Dienstvertrages, ZNR 1984, S.40ff.

Autonomie des Rechts in rechtshistorischer Perspektive, 1988.

Philipp Lotmar, Schriften zu Arbeitsrecht (hrsg.), 1992.

Die deutsche Rechtsgeschichte in der NS-Zeit (hrsg.) Rückert /Willoweit, 1995.

Fälle und Fallen in der neueren Methodik des Zivilrechts seit Savigny (hrsg.), 1997.

Friedrich Carl von Savigny Politik und neuere Legislationen (hrsg.)

家で、シュタウフェンやフライブルクの上級官吏であった (Carl Benedict Freiherr Gleichauf von Gleichenstein, 1725- 1813)。1794年から、フライブルク大学、ウィーン大学で法律学を学んだ。1801年に、オーストリア・ハンガリー帝国の Konzipist (法律事務所員。アセソールを指す場合もある) となった。ベートーベンの友人の Stephan von Breuning (官吏で、台本作者でもある) と知り合い、ついで、1807年ごろ、ベートーベン (1770-1827) とも親しくなった。気むずかしいベートーベンの数少ない友人の1人である。楽譜の出版契約に協力して、ソナタの献呈をうけてもいる。1819年から1823年には、バーデンの身分議会の第二院の議員となった。1827年に、病床のベートーベンを見舞いにウィーンに旅行した。みずからも、ベートーベンの医師であった Johann Malfatti の治療をうけ、1828年に、ウィーン近郊の Heiligenstadt で亡くなった。Ludwig Nohl は、Gleichenstein, Breuning, Malfatti をとくにベートーベンの友人としている。

Vgl. Peter Clive, Beethoven at His World: A Biographical Dictionary, 2001, S.131f.

Akamatsu /Rückert, 2000.

Historisch-kritischer Kommentar zum BGB, Bd. I (hrsg.) Schmoeckel / Rückert /Zimmermann, 2003, Bd. II 2007, Bd. III 2013.

Savigny-Studien, 2011.

このNiedersachsenに属する大学都市 Göttingenについては、Arndt, Gottschalk, Smend, Göttinger Gelehrte, Die Akademie der Wissenschaften zu Göttingen in Bildnissen und Würdigungen, 1751-2001, 2001がある。各大学の判決団の研究が豊富なことも、地域研究が盛んなことの反映である。

(2) バイエルンは、地域主義の根強いところであり、ドイツ統一においても、ザクセンと南ドイツは、プロイセンの主導に対する抵抗勢力であった。その伝統から、統一後も、連邦条約によって (1871年のビスマルク憲法)、いくつかの例外措置をうけており、司法では、バイエルン最高裁はその象徴であった。統一前に上訴特権を有した各ラントの最高裁は、1879年の裁判所構成法の下では、高裁 (OLG) の扱いをうけたが、連邦条約の規定にもとづいて、唯一存続したのである。もっとも、ライヒ大審院、戦後の連邦裁判所 (BGH) の体系の中で、あまり実質がないことから、2006年に廃止された。その時のバイエルンの州首相は Stoiberであった。

シュトイバー (Edmund Stoiber, 1941.9.28-) は、1941年に、Oberaudorf/Rosenheimで生まれた。1961年にアビトゥーアを取得して、兵役に服した。1962年から、ミュンスター大学、政治学専門大学で法律学、政治学を学んだ。1967年に、第一次国家試験に合格し、1971年に、第二次国家試験に合格し、学位をえた (Der Hausfriedensbruch im Lichte aktueller Probleme, 1971)。1972年に、バイエルンのラント開発大臣の個人的参与員となった。1974年に、大臣事務所のリーダー、州議会議員、1978年に、弁護士、1982年に、バイエルンの州官房のリーダー、次官、1986年に、州大臣、1988年に、バイエルン州内務大臣、1993年に、バイエルンの州首相となった。CSU の総裁。その在任 (2003年) 中に、バイエルン最高裁の廃止が決定された⁸³⁾。

83) 【法実務家】248 頁。

(3) バイエルンの地域主義は、負の遺産も伴っている。ワイマール時代には、プロイセンの民主主義政権に対し、ナチスの牙城となった（ミュンヘン一揆やニュルンベルクでのナチスの活動）。もっとも、第二次世界大戦中は、逆に、ナチスに対する抵抗運動、白バラ（Weiße Rose）運動も起こった（白バラ事件については、【歴史】633頁、671頁）。また、Zankel, Vom Helden zum Hauptschuldigen - Der Mann, der die Geschwister Scholl festnahm, in Kraus, Die Universität München im Dritten Reich : Aufsätze, S.581ff. 前掲III 5 (7) (i) 参照）。

さらに、ミュンヘンは、ナチスのドイツ法アカデミーの設立地となった（Adlberger, Die Juristische Fakultät der Ludwig-Maximilians-Universität und die Akademie für Deutsches Recht, in Kraus, a.a.O., S.405ff.）。

3 インターネット上の文献

各大学のホームページ、とくにライプツヒ大学のそれが早くに公開され、内容も詳細である（Professorenkatalog der Universität Leipzig | catalogus professorum lipsiensium - <http://research.uni-leipzig.de/catalogus-professorum-lipsiensium/fak/Juristenfakultaet/seite6.html>）。古い歴史と多数の著名な法学者を有することから、早くに構築された。東ドイツ時代に失われた伝統を取り戻すために努力が払われたのである。東ドイツ地域で再建された大学には、いずれも同様の傾向が強かった。近時では、多くの大学が類似の試みをしている。その他の大学でも、それぞれ工夫がこらされているが、その良し悪しは、最終的には、ホームページの小手先の外形ではなく、実際にどのような者が属し、どのような活躍をして業績が出されたかというコンテンツの問題に帰着する。大げさな表現や、体裁だけとか自画自賛だけでは意味はないのである⁸⁴⁾。他の大学については、いちいち立ち入らない⁸⁵⁾。

84) 具体的な史料もなく、たんに過去に近在にあった学校を起原として関連づけることもある。HPやそこに掲載されることの多い研究費の申請書・報告書などには、独断や自画自賛に陥らないだけの説明と史料が必要であろう。著名な文庫でも、ただあるというだけでは足りず、目録などを作成し内容を検証できるようにする必要がある。

4 日本にある特殊文庫

(1) 著名な法律家の特殊文庫がかなり多数日本にある。Bentham (中央大学)、O. Brunner (中央大学)、Cambacérès (小樽商大)、B. Carpuzov (東京大学)、O. Gierke (一橋大学)、J. Hatschek (京都大学)、E. E. Härtle (大東文化大学)、F. K. Neubekker (東京大学)、H. Preuss (東京大学)、L. Rosenberg (大阪市立大学、2022大阪公立大学)、Savigny (立教大学)、F. Stein (東北大学)、E. Seckel (東北大)、Thaner (京都大学)、H. Thieme (北大)、A. Tuhr (京都大学)、Zitelmann (東北大学) などである。箕作麟祥や穂積陳重 (東京大学) など日本人の文庫もあるが、多数になるので立ち入らない⁸⁶⁾。梅謙次郎と富井

ある。著名な文庫の多くには、目録が作成され、古くはマイクロフィルム化されており、近時では電子化 (PDF など) されていることも多い。たとえば、ギールケ文庫である (東京商科大学附属図書館・オットーフォンギールケ文庫 (1930年)。電子化は、2006年COEプログラムによる)。

85) ほかに、Dissertationの検索には、個々の大学別のカタログがある場合もある。Habilitation論文よりも質が劣ることから、あまり熱心に行われていないが、比較的新しいものに、Katalog juristischer Dissertationen, Disputationen, Programme und anderer Hochschulschriften im Zeitraum von 1600 bis 1800 aus den Beständen der Universität Rostock (hrsg. Tsuno, im Auftrag der Universitätsbibliothek an der Chuo Universität), 1989.

特定のテーマの論文の検索というよりも、1 時期や場所についての共通テーマや傾向を探るような場合には、有益であろう。Dissertationは、各州の法曹養成法で公表が義務づけられていることから (オーストリアを除く)、古くは印刷に付され、場合によってはマイクロフィルムで、近時は、大学のHPに掲載される。Habilitation論文には、公表義務はないが、法律関係のものはほぼ出版されている。いずれも、ドイツ国立図書館 (Deutschen Nationalbibliothek, DNB) に納められ、カタログ検索可能である (ただし、現物は1913年以降のみで、戦後はライブチヒとフランクフルト (マイン) に分かれ、かなり制約が大きい)。

86) 日本にある法律関係の特殊文庫については、Matthias Koch, Universitäre Sondersammlungen in Japan : eine deutsch-japanische annotierte Bibliographie, マティアス・コッホ・日本の大学所蔵特殊文庫解題目録 (2004年、ドイツ - 日本研究

政章の文庫は焼失したので、民法の起草者の文庫では、穂積陳重のものが唯一である。

なお、タイトルとなっている当該の法律家の蔵書のすべてが網羅されているわけではない。ギールケ文庫でも、Ottoの遺言で 息子のJuliusに譲渡された哲学関係のものは含まれていないし(法哲学は文庫に含まれる)、シュンペーター文庫も、オーストリア・ドイツ時代のものはボンで焼失したので、アメリカで収集されたものが中心である。文庫によっては分割されたり、一部のものもある。また、日本に渡った文庫でも、デルンブルクとコーラーの文庫(東京帝大)は、関東大震災で焼失した⁸⁷⁾。

所文献目録シリーズ8)。国立大学関係では、広島大学附属図書館・全国国立大学所蔵貴重図書目録(1973年)がある(第1冊がI 貴重図書目録で、第2冊が、II 文庫・集書一覧、III貴重図書指定基準である)。IIに文庫、文書のタイトルのほか、一部に簡単な解題がある。いずれも、法律関係のコレクションに限られない。穂積陳重の文庫については、民法成立過程研究会・明治民法の制定と穂積文書(1956年)がある。

Friedrich Thaner (1839.11.15-1915.11.29) は、教会法学者である。1839年、オーストリアのリンツで生まれた。1871年、インスブルック大学教授、1888年、グラーツ大学教授であった。1915年に、グラーツで亡くなった。専門は、教会法のほか、ドイツ私法、法史である。著書に、Über Entstehung und Bedeutung der Formel *salva sedis apostolicae auctoritate in den päpstlichen Privilegien*, 1872; *Summa magistri Rolandi*, 1874; *Zwei anonyme Glossen zur summa Stephani Tornacensis*, 1875; *Abälard und das kanonische Recht*, 1890 などがある。Singer, Heinrich, Thaner, Friedrich, ZRG KA 6 (1916), 5; GND: 117299138。一般的には、娘の画家 Klara Thaner (1872.7.3-1936.10.14) が著名である。

87) 孫田秀春「ギールケ文庫入手のいきさつ」一橋大学附属図書館史(1975年)153頁、勝田有恒「ギールケとその文庫」一橋大学社会科学古典資料センター年報2(1982年)3頁、舩場準一「ギールケ文庫と国際私法学の文献・資料」同7頁。また、ギールケについては、独法107号1頁、24頁以下でも若干ふれた。

(i) 特殊文庫ではないが、1895年の独逸学協会学校の専修科廃止後、独逸学協会から帝国大学に移管された文献も、大震災時に焼失したとみられるが(1923年9月1日。1885年に司法省法学校から移管された蔵書も同時に焼失)、旧制中学分は移管されずに残存(そのうち2900冊は1977年に獨協大学に移管)。ただし、専修科廃止後の1901

年の独逸学協会学校の夜間の出火でも書庫を焼失している。残存した図書の中には、若干の法律書も包含されている。法律書がある程度残されている（あまり体系性はない）のは、帝国大学の蔵書と重複していた分が移管されなかったからと考えられる。パンデクテン法学盛時の通常のテキストを対象としており、稀観書の類はみあたらない。お雇い外国人のMichaelis(のちのライヒ首相。初代ビスマルクから6代目である)などは若く、名だたる文庫のように豊富な蔵書を有したわけでもなく（持参したものは少数であろうし、持ち帰ったかも不明である）、協会として収集したものである（独逸学協会の蔵書印がある）。お雇い外国人の他の例では、O.モールは、1889年の帰国時に、持参した少数の蔵書を家具とともに売却している（モール・ドイツ貴族の明治宮廷記、金森誠也訳、2011年、288頁）。著名な国法学者の父モール（Robert von Mohl, 1799-1875）は、すでに亡くなっていたが、その蔵書は移動されていなかったようである。

Roesler, Entwurf eines Handelsgesetzbuchなどの立法資料のほか、ローマ法の770613 Corpus juris civilis, recognosci brevibusque adnotationibus criticis instrui coeptum A.D.Alberto et D.Mauritio fratribus Kriegeliis continuatum cura D.Aemilii Herrmanni absolutum studio D.Eduardi Osenbruggen, 1870. (pars 3); 7709646 Les cinco codes, Die fünf französischen Gesetzbücherなどの外国書があるが、7709787 Daniels, Lehrbuch des gemeinen preussischen Privatrechtes; 7709866 Cosack, Lehrbuch des deutschen bürgerlichen Rechts; 7709868 Dernburg, Lehrbuch des Preussischen Privatrechtes, 1~3; 7709875 Endemann, W. Das deutsche Handelsrechtなどの著名なパンデクテン・テキストがある（文献前の数字は移管番号）。独逸学協会については、【変容】476頁。

(ii) また、独逸学協会学校の旧制中学には、民法学者の梅謙次郎の甥（早世した兄の梅錦之丞の子。梅錦之丞は、1858-1886年、医学者。1879-1883年にドイツに留学、帰国後、東京大学の医学部眼科学教授）安都夫が、明29年（1896年）尋常小学校卒業後に、明29年から明36年（1903年）まで在籍したが、日本語が不十分だったことから、何回か落第し、明36年に（第5年目に落第し）「事故退学」となっている（1903年）。梅謙次郎は、その保証人にもなっている。1895年の専修科廃止後で、お雇いのドイツ人の多くも、すでに帰国していたであろう。安都夫は、明14年（1881年）にドイツで生まれ、明23年来日、謙次郎に引き取られたことから、族籍、住所とも謙次郎と同一である（東京、小石川、林町で士族。明治34年12月の独逸学協会学校の学籍簿一）。日露戦争（1904年）の直前にドイツに帰国（1904年とすると、23歳）。

ただし、当時の学校は必ずしもトコロテン式の卒業はさせていないから、現在の

学校の退学のような意味はないであろう(【変容】510頁)。普通科の退学者については、後述の名簿80頁以下にもかなり詳細な記載がある。中世のドイツの大学で学位を取得する者の数は、1割程度のことは多かったし(独法120号85頁)、日本でも、明治以前の芸事で免許皆伝や目録伝授をうけたのは、一部の者だけである。もっとも、中世の大学で、学位は一部の者しか取得していなくても、勉学の証明(Exmatrikel, Studienzeugnis)はあった。たとえば、1451年のケルン大学の法学生 Bernhard Grafen in Solmsの例があり、その写真は、Keussen, Die alte Universität Köln, Grundzüge ihrer Verfassung und Geschichte, Festschrift zum Einzug in die neue Universität Köln, 1934, S.288にある(前述III 2 (2)の文献)。証書には、印章・Siegelが付され、学位や卒業証書並みに豪華である。卒業と学位の取得が結合されるのは、段階的な教育システムが整備された後であり(日本やアメリカのような後発国)、ドイツの法学部や医学部は、いまだに卒業資格は国家試験の合格によっている。

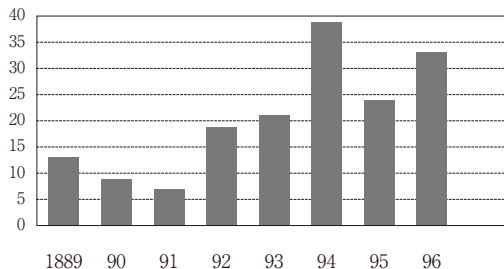
独逸学協会学校の学籍簿の参照については、獨協学園本部の片岡美浦氏、移管文書の参照については、大学付属図書館情報係の高澤玲子氏に負うところが多い。また、関連する時代的背景は、岡孝「明治民法と梅謙次郎」志林88巻4号、六草いちか・それからのエリス(2013年)126頁参照。後者には、当時の留学生の女性事情も詳しい。また、六草氏が森鷗外の「舞姫」のエリスのモデルと思われるエリーゼ・ヴィーゲルトの写真を発見したことについては、朝日新聞2013年8月29日参照。独逸学協会学校については、堅田剛・独逸学協会と明治法制(1999年)がある。とくにその専修科については、119頁以下参照。

(iii) 高等教育機関の専修科(司法省法学校と同じく、お雇い外国人から直接習う教育であった。旧制の法学校の1つで、のちの大学相当である)は、1884年設置(明17年)で、1895年(明28年)廃止であった。明21年の卒業生13名が最初で、その中に、有松英義(のち内務省警保局長や内閣法制局長官)、栗田松蔵(のち大審院判事)や猿渡駒之助(のち行政裁判所評定官)、山口弘一などがいる(山口弘一文庫は一橋大学にある。長男の山口律太郎寄贈。山口は1866.12.2-1945.12.16。内閣法制局法律顧問附記官、陸軍大学教授、学習院教授、留学、東京商大教授。一橋論叢11巻2号192頁、18巻5号315頁)。足かけ4年(実質3年)の勉学期間であるから、明24年入学で同28年卒業の第8回卒業生までである。専修科卒業後、筆記試験と口述の試験をうけて、政府の役職に就任した(上記の有松英義は、高等文官試験の原型の最初の受験者で、私立学校の卒業生としては最初の合格者とされる。専修科からの合格者数は不明)。法制局長官となる平田東助が、ドイツの国家試験(Staatsexamen)にならって法律を準備した(1894年の高等文官試験では、帝国大学の卒業生は試験免除であるから、初

期の国家試験はむしろ私立学校用であった。帝国大学の監督をうける私立法学校と旧・司法省法学校の卒業生も、試験なしに判任官見習となることが可能であった。後者では、高等官である奏任官、勅任官は不可)。ほかに、明24年の専修科卒業生の谷田三郎は、のち大阪控訴院長や司法省刑事局長、明25年の専修科卒業生の小山松吉は、のち検事総長や司法大臣、明26年の専修科卒業生の中尾芳助は、大審院判事である(1933年当時の生存者以外は経歴不明)。

専修科第1期生がお雇い外国人のMichaelis等を囲む集合写真は、書簡集の翻訳、ベッカー・ゲオルク・ミハエリス：ドイツ帝国宰相と獨逸学協会学校(酒井府、ハンス・ハルトムート・ゲートケ編；獨協大学外国語学部ドイツ語学科訳、2003)にある(原著S.504から転載。堅田剛・解題)。原著は、Bert Becker, Georg Michaelis : Ein preußischer Jurist im Japan der Meiji-Zeit : Briefe, Tagebuchnotizen, Dokumente 1885-1889, mit einem Vorwort von Ferdinand Schlingensiepen, 2001 (Schlingensiepenはミハエリスの孫である)。また、行政官としての観点から Bert Becker, Georg Michaelis : preußischer Beamter Reichskanzler christlicher Reformer 1857-1936, 2007が出版されている。日本時代に関する部分は、S.68-97。原著は、それぞれ全678頁と全892頁の大作である。ミハエリスは、第一次世界大戦後、再度来日している(1922.5.8-1922.7.10=大11年。翻訳61頁参照)。この時の集合写真もある。最初の離日からほぼ33年後であった。

独逸学協会学校の専修科の卒業生数の推移は、以下のとおりである。東京専門学校、和仏法律学校、明治法律学校といった他の法学校と比較すると、学生数はごく少ない(総数165人)。専修科の設置と明治期における国家モデルの転換と法学校の関係については、【変容】536頁参照。



1884年専修科設置

1895年廃止 梅安都夫は、明治29年から旧制中学

国家モデルの転換と法学校の関係

1868 開成学校 → 1871大学南校 → 1873 後期の開成学校の法学は英語

1877 旧東京大学、1886帝国大学も、イギリス法

1871 明法寮→ 1875 司法省法学校・フランス法→1884東京法学校

→1885フランス法学科

1887 ドイツ法学科

(1883独逸学協会学校・1884専修科)・ドイツ法

1868 医学校 → 1871大学東校は、ドイツ医学

(ドイツと日本の法律家の簡単な比較は、後掲図2参照)

(iv) 初期の帝国大学(1886年)との関係では、明28年専修科(第8回)の卒業生、川名七太郎は、民法学者の川名兼四郎の親族であり、民法学者の三瀧信三も、卒業生であるが、三瀧は、専修科の廃止後の明31年卒である(第7回。名簿の8頁)。明25年から、専修科のほかにも、別科、普通科が置かれて、数名の卒業生がいる(専修科は、明21年から)。中学の普通科も、明21年からである。三瀧は、こちらの卒業生である(三瀧の卒業した第7回は、明31年)。

普通科は、専修科とは異なり、のちの大学ではなく旧制高校相当であるから、三瀧は、卒業後、帝大に入ったのであろう。独逸学協会では、この普通科(旧制高校相当)の学校のみが存続したことから誤解があるが、専修科は、他の私立の法学校同様、今日の大学相当であった。普通科が存続したのは、専修科とは異なり、お雇い外国人による講義をせずに、あまり費用がかからなかったからである(他の例では、お雇い外国人を用いる司法省法学校が廃止されている。帝国大学も、お雇い外国人により講座が確立した後は、日本人に置き換えられている。ハーンと夏目漱石のような関係である)。三瀧と同様に、普通科(旧制高校相当)から、医学部を中心に帝大に進む者は多かったようである。三瀧の卒業した明31年の38人の卒業生の肩書を見ると、名簿作成時の生存者21人のうち、医学博士や軍医、病院関係者は17人になる。あとの4人のみが法学士で、三瀧の肩書は東大兼九大教授・法学博士である(他の年度についても、医学・法学の学位取得者が大半という類似的傾向がある)。独逸学協会学校50年史(1933年)の名簿の部の1~8頁参照。伝聞であるが、川名家は、下総の豪族千葉氏(鎌倉時代の千葉常胤が著名)やその御家人の流れをくむ家系で、独逸学協会のその後の学校(大学を含め)にはそのほかの関係者もいた。

なお、ドイツ語教育をうけた山口弘一は戦前では数少ないドイツ法系の国際私法学者であり、同人の法例の解釈については、Akiba, The Beginning and Development of Japanese Doctrines on the Private International Law - Koichi Yamaguchi (1866-

また、特殊文庫は、収集者に意味があるだけで、収集された書籍がすべて貴重書というわけではない。時代的には、200年から300年前まで遡るものもあるが、19世紀の文献が多く、それらは、欧米の図書館であれば、あまり制限なく利用できるものである。収集者による書き込みが残されていれば、それには意味があるが、それ以外の利用者にとっては、復刻版の方が使いやすい面がある。日本では、保存だけの（利用ができない）図書館となっていることがある。

(2) 関連する法律家は、以下のとおりである。他の著名人については、本稿では立ち入らない。

(a) Julius (Karl) Hatschek (1872.8.21-1926.6.12) は、1872年に、Czernowitzで生まれた。父は、弁護士 (Isidor Hatschek)。1890年から、ライプツヒ、チェルノヴィッツ、ウィーン、ハイデルベルクの各大学で法律学を学び、1895年に、チェルノヴィッツ大学で学位、1898年に、ハイデルベルク大学でハビリタチオンを取得した。イギリスに研究旅行。1905年に、ポーゼンの行政アカデミーで員外教授。1907年に、プロイセン教育省の研究員。1909年に、ゲッチンゲン大学の員外教授、1921年に教授となった。専門は、国法学、憲法、行政法、法制史である。1926年に、ゲッチンゲンで亡くなった⁸⁸⁾。

Englische Verfassungsgeschichte bis zum Regierungsantritt der Königin Viktoria, 1913.

Das Staatsrecht des vereinigten Königreichs Großbritannien Irland, 1914.

Institutionen des deutschen und preußischen Verwaltungsrechts, 1919, 2. A.

1945) and Iwataro Kubo (1897-1980), Japanese Yearbook of International Law, Vol.56 (2013), 196. 山口も加わったデルンブルクのテキストの翻訳については、【法学上の発見】208頁注146。

88) DBE 4 (1996), 432; Brintzinger, Ottobert L., Hatschek, Julius, NDB 8 (1969), S. 57f.; Catalogus professorum Göttingensium 1962, 54, 59; Drüll, Heidelberger Gelehrtenlexikon 1803-1932, 1986; Julius Hatschek, in Rechtswissenschaft in Göttingen 1987, 365 (Sattler); Stolleis, Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland, Bd. 3, Staats- und Verwaltungsrechtswissenschaft in Republik und Diktatur 1914-1945, 1999, 97, 237f.

1922 (Lehrbuch des deutschen und preußischen Verwaltungsrechts), 8. A. 1931.

Britisches und römisches Weltreich, 1921.

Völkerrecht, 1923.

(b) Friedrich Karl Neubecker(1872.6.26-1923.12.31) は、1872年に、ファルツの Rodenbach で生まれた。父は、国民学校の教師であった。ミュンヘン大学とベルリン大学で法律学を学び、1897年に、ベルリン大学で学位 (Thronfolgerecht und fremde Staatsangehörigkeit, 1897)、同年から自習。1902年に、ベルリン大学でハビリタチオンを取得した (Vereine ohne Rechtsfähigkeit, 1901)。1909年に、ベルリン大学の員外教授。1914年から兵役。1918年に、ハイデルベルク大学で正教授となった。法律顧問官。専門は、比較法、夫婦法である。1923年に、ハイデルベルクで亡くなった⁸⁹⁾。

Die Mitgift in rechtsvergleichender Darstellung, 1909.

Russisches und orientalisches Eherecht, 1921.

Finnlands Eherechtsreform, 1921.

(c) Elfried Ernst Härle (1908.2.26-1978.6.19) は、1908年に、ボーデン湖畔の Meersburg で生まれた。法律学を学び、1930年に、バーゼル大学で学位、1932年に、フライブルク (ブライスガウ) 大学でハビリタチオンをえた (Die allgemeinen Entscheidungsgrundlagen des ständigen Internationalen Gerichtshofes, 1933)。1948年に、ロシュトック大学の員外教授、1950年に、イエナ大学の正教授。1959年にスイスに移り、1978年に、スイスの Gstaad (Berne Oberland) で亡くなった。専門は、国際法である。

5 補遺

(1) 一般の人名辞典として、Herrmann A. L. Degenerによって 1905 年に発刊された Wer ist wer? (Zeitgenossenlexikon) がある (Wer ist's ?)。1847年の英語の人名辞典 (Who's who) のドイツ語版である。戦前は、1935年まで、

89) Drüll, ib. (前注88)), S.190f; GND: 119223821

戦後は、1948年に復刊された。出版社は変遷しており、1979年からは、リュウベックの Schmidt-Römhildである。

法学の分野に特化しているわけではなく、対象は広く、政治家、役人、政党人、外交官、経済人、法律家、学者、教会、文化人、文筆家、スポーツ選手から芸能人までを含んでいる。2013/14 年版は、2 万5000人の項目を含んでいる。CD-ROM化され、オンライン版もある (weristwer.de offline)。

(2) ガイウス・法学提要の発見に関連して、3 代のニーブールについて、ふれる。初代の①は、楔形文字の研究で、二代目の②は、ガイウスの法学提要の発見で著名である。両者は、それぞれがオリエント学やローマ法のインテルポラチオの基礎を築き、19世紀の新たな学問分野の先駆となった。法学で著名なのは、②である。第三代の③は官吏、政治家である。

① Carsten Niebuhr, 1733.3.17-1815.4.26

このニーブールは、1733年に、北海沿いの Lüdingworth(ハノーバー選帝侯国、現在では、ニーダーザクセンの都市 Cuxhaven の一部) で生まれた。1756年から63年は、七年戦争の期間であり、植民地争奪の戦争も盛んな時期であった。1760年に、デンマーク王の後援をうけた、エジプトやアラビア、シリアの探検隊に加わった。彼には、旅行家のほか、軍人、エンジニアなどの経歴があり、こうした経歴は、探検に有益であった。この探検隊は、オリエントとエジプトを対象とし、コペンハーゲンから、コンスタンチノーブルを経て、アレクサンドリアに行き、ナイル川を遡上し、スエズに戻り、パレスチナ、イエメン、ボンベイにまで行き、そこに滞在した。その後、オマーンやペルセポリスに戻り、そこでも調査を行った。ニーブールは、楔形文字を模写し、アッシリア学の基礎を築いた。さらに、バビロンやバグダット、パレスチナを調査し、1767年に、コペンハーゲンに戻った。探検隊メンバーのほとんどが探検の途中で病気のために死亡したことから、帰国後に、生き残ったニーブールが報告書を公刊することとなった。司法顧問官となった。楔形文字のほか、エジプトのヒエログリフの収集と模写や解読にも貢献している⁹⁰⁾。エジプト学やパピルス

90) DBE 7 (1998), 403; Hansen, Reimer, Niebuhr, Carsten, NDB 19 (1999), S.217;

学の基礎を築いた。

② Barthold Georg Niebuhr, 1776.8.27-1831.1.2

(i) この②ニーブールは、1776年に、コペンハーゲンで生まれた。父は、著名な研究旅行家の Karsten Niebuhrであった（上記①）。1794年から、キール大学で法律学を学び、デンマークの官吏となった。ロンドンとエジンバラに研究滞在をした。1804年に、国立銀行の理事官、1806年に、プロイセンの監督局（Direktorium）に勤務、1810年に、政府の仕事をやめて、プロイセンの宮廷歴史官（Hofhistoriograph）。新設のベルリン大学で歴史学の私講師となった。1810年に、プロイセン科学アカデミー会員。ライン博物館（Rheinisches Museum für Philologie）雑誌の創刊に関わった（現在のものは、1950年に、文献学者のErnst Bickel, 1876-1961により再刊。当初は、ボンで出版されていたが、1839年からは、ケルン大学の文献学講座の雑誌として発刊）。ナポレオン戦争末期の1813年に、イギリスからの援助交渉団に参加、1816年から23年には、プロイセンからローマ教皇庁への派遣公使、1824年に、プロイセンの国事顧問官。1822年に、アメリカの学術アカデミー会員。歴史家であり、1825年から31年まで、ボン大学教授であった。1831年に、ボンで亡くなった⁹¹⁾。ボン

Carstens, Carsten Erich, Niebuhr, Carsten, ADB 23 (1886), S.661f.; DBA 899,43-59, DBI 3, 1462b.

- 91) DBE 7 (1998),403; Walther, Gerrit, Niebuhr, Barthold Georg, NDB 19 (1999), S.219f.; Nissen, Heinrich, Niebuhr, Barthold Georg, ADB 23 (1886), S.646f.; Walther, Niebuhrs Forschung, 1993. なお、日本のお雇い外国人となったラートゲンは、このニーブールの甥にあたる。ハンブルク大学の初代学長である。【変容】480頁。Niebuhrの肖像画は、Braubach, Kleine Geschichte der Universitat Bonn 1818-1968, 1968, S.16にある。

法学提要については、船田享二・ガイウス法学提要（1967年）1～73頁の「前言」参照。穂積陳重・法窓夜話42「ハムラビ法典」の序説「1 法律史上の大発見」にも、簡単な記載がある。また、ニーブールについては、兄玉寛「歴史家ニーブーア（1776-1831）の経歴・家系・著作についてなど」（龍谷法学51巻3号787頁）がある。本文でも引用したローマ史については、兄玉「ニーブーア『ローマ史』序文の翻訳と訳注」（同52巻4号229頁、53巻3号219頁）をも参照。

の中央駅近くに墓碑がある (Alter Friedhof、旧市街のこの墓地には、音楽家のシューマンやベートーベンの母親の墓もある。ボンはベートーベンの生地であるが、墓地はウィーンにある)。②の専門は、ローマ法である。

Römische Geschichte, 1811f., 2. A. 1827f.

Grundzüge für eine Verfassung Niederlands, 1813年ごろの著作であるが、公刊されたのは、死後である (1852年)。

(ii) 彼は、幼年期から語学に秀で、オリエント諸語に堪能であった。ローマの帝政初期の歴史家Titus Livius(ca.59 B.C.-17 A.D.) や古ローマの歴史を研究し、批判哲学にもとづく歴史を構築した。その手法は、古典文献学の基礎となり、ランケや T. モムゼンなどにも影響を与えた。

今日では、ガイウス (Gaius, ca.130 - ca.180) の法学提要 (Institutiones) の写本の発見によって著名である。その発見は、1816年に、彼がローマ教皇庁に赴任する途中、ヴェロナの修道院書庫に立ち寄ったことによる。わずか2 日の作業の成果であった。発見されるべき時代に入っていたとはいえ、意図されない発見であった。研究の過程で、計画されたわけでも、時間や高い予算をかけたわけでもない結果が生じる典型的な例である。

従来、2 世紀の半ばに書かれたガイウスの法学提要は、他の文献やディゲスタへの引用から、断片的に伝えられるのみであった。古典期のローマの法学者の著作は、ほとんど伝わっておらず、ディゲスタによって断片的に伝えられるにすぎないことから、新たに発見されたガイウスの法学提要は、重要な例外となった。ディゲスタによるガイウスの記載には、かなりの改変が行われていることが判明したのである。

紙の存在しない時代に、羊皮紙は貴重な素材であり、文字を消去して、新たな文字を書くことは稀ではなかった。古代の法律書の用紙の多くは、中世に法学が衰えると、他の文書 (多くは宗教書) に転用された。ニープールは、4世紀から5 世紀の教父ヒエロニムス (ヴルガータ聖書の翻訳者) の書簡集の写本の一葉 (第97葉) を点検して、その下に、法律の文書があることに気づき、薬剤を用いて下の文字を現し、筆写した。そして、サヴィニーは、ニープールから送付された筆写を点検し、それがガイウスの法学提要であることに気づいた

のである⁹²⁾。

92) 羊皮紙の再生であるパリンプセスト (Palimpsest) の研究は、19世紀の末から行われた。ガイウス法学提要の上に、聖ヒエロニムスとゲンナディオスの手紙があったことは、古代の法学の衰退と中世における神学の興隆を現わしている。ほかにも、4世紀のキケロの *De re publica*、5世紀のトリノ版テオドシウス法典 (Codex Theodosianus, 438) などが、19世紀に発見された。ギリシア、ローマの著述は、宗教の下で失われ、意図しない形で保存されたのである。

これに対し、19世紀になってガイウス法学提要などの法律文献が発見されたことは、逆に中世の宗教の衰退と近代の法学の復権を現わすものである。失われた文書発見のためとはいえ、薬剤を用いて古文書を破壊することは、今日では考えがたいが、19世紀の発見熱がそれだけ強かったことを彷彿させる。既存の宗教書は、それだけ豊富だったのである。

技術的な文字の復元だけではなく、さらにオリジナルな内容に復元するのが、インテルポラチオ (interpolatio) である。テキスト批判の1つである。2世紀に法学提要はガイウスによって書かれた後、ときどきの実務にあわせて長らく筆写され、そのつど (意識的あるいは無意識的に) 書き改められ、6世紀のローマ法大全に引用されたからである。ローマ法大全の引用は、必ずしも古典期 (法学者の活躍時期、すなわちオリジナル) の著述そのものではない。

さらに、羊皮紙が宗教書に転用されたのは、オリジナルのままでは、6世紀の実務にあわなくなったというだけではなく、法学自体がもはや無用の長物とみなされたからである。社会的には経済が衰退し、また法を執行する国家も衰退したからである。単純に物理的な羊皮紙の有効利用だけが求められた。思想が失われる形態としては、もっとも決定的な場合である。ごく稀な再発見の可能性を除けば、破棄とほぼ同一である。近時では、初期のビデオ技術で、当時まだ高価であった録画テープ類が再利用された例がある (原データは消去)。電子媒体に上書きされた場合には、復元はほぼ不可能となる。紙の場合には、記録の上書きというよりも、下張りや包み紙としての再利用が行われるから、保存されていれば復元は可能であるが、溶解して再生紙となった場合には、復元は不可能となる。羊皮紙は、転用にも復元にも適しているから、ローマ法にとっては幸いであったといえる。

近時の記録では、レコードやテープ、FDから、CD、MD、DVD、HD、クラウドといった媒体の急速な変化と、媒体から再生させるソフトの変化が問題である。両者がそろわないと再生できないことから、盛り込まれたコンテンツが失われる可能性は大きい。

1817年に、プロイセンの学術アカデミーは、新たにImmanuel Bekker, Ludwig Göschen, Moritz August Bethmann-Hollweg 等をヴェローナに派遣し、写本の復元作業を行い、1820年に、不完全な部分を除き、全体が公刊された（ヴェローナ写本、129 葉のうち3葉は散逸）。1821/22 年には、Bluhmeによる再検討が行われ、1824年に、2 版が公刊された（1877年に3版）。もとの写本は、5世紀から6世紀に作られ、ユスティニアヌスのローマ法大全（Corpus iuris civilis, 533 年）の編纂より前のものと推察されている。従来、ほとんどローマ法大全しか素材がなかったローマ法研究において、古代や古典期の法を歴史的に検討することが可能となった。これにより、ユスティニアヌスのローマ法大全が、古典期のものをそのまま叙述するのではなく、後代の修正を反映していることが明らかとなり、インテルポラチオ研究の端緒となったのである⁹³⁾。

③ Markus Carsten Nikolaus von Niebuhr, 1817.4.1-1860.8.1

孫のニーブールは、1817年に、ローマで生まれた。父は、学者で政治家のBarthold Georg Niebuhrであった（上記②）。キール、ボン、ハレ、ベルリンの各大学で法律学を学び、プロイセンで官吏となった。1850年に、政府顧問官、1852年に、プロイセンの下院議員、1854年に、プロイセンの内閣顧問官（Kabinettsrat）。Friedrich Wilhelm IVの顧問となった。Kreuz-Zeitung 誌の主幹や外交官もした。1860年に、Oberweiler (Badenweiler) で亡くなった⁹⁴⁾。

93) 日本でも、漢文で書かれた王朝時代の日記の写本などは、宮廷儀式のための覚書であり、写本を作成するときには、修正が行われた。儀式書は、たんなる記録ではなく、有職故実のための実用書であるから、積極的な（意図的な）修正がされたのである（石村貞吉・有職故実、上1987年、嵐義人校訂、5頁以下、10頁参照）。実用と修正は不可分であり、源氏物語の写本に異本があるのとは異なり、たんなる誤字や誤謬にもとづくものではない。有職故実だからといって、まったく変化がなかったわけではない。法律書が完全に固定するのは、それが記録となった時からであり、実務書である限りは、こうした修正は避けられない（集団伝承と同じで、記録部分に著作権に相当する意識はない。著名なものでは、グリム童話の元の伝承の結論が、時代や場所にあわせて修正された）。成文の法律にはこうした修正ができないことから、解釈の変遷という手段がとられるのである。

わずか42歳であり、長命な祖父①に比して短命であった。

著作に、Geschichte Assurs und Babels, 1858がある。

94) DBE 7 (1998), 403; Meier, Niebuhr, Marcus von, NDB 19 (1999), S.221f.; Wippermann, Niebuhr, Marcus von, ADB 23 (1886), S.662f.

図 1 主要な法律家、人物史

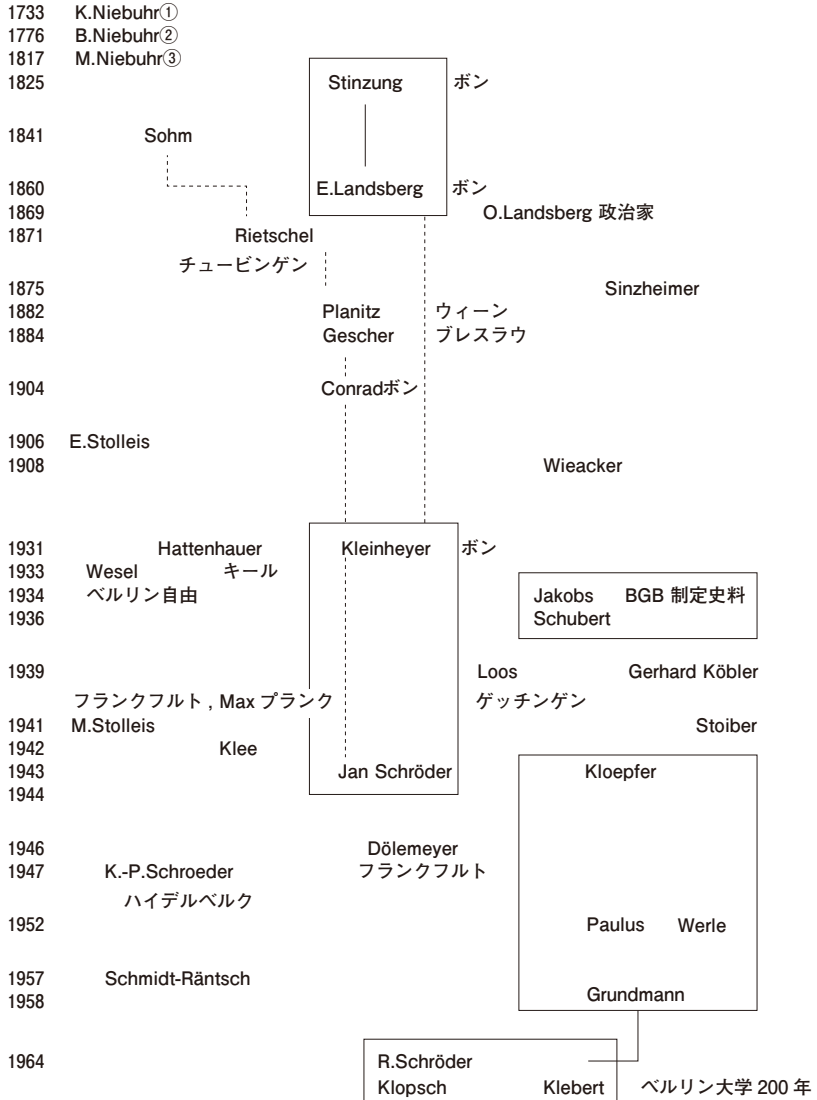
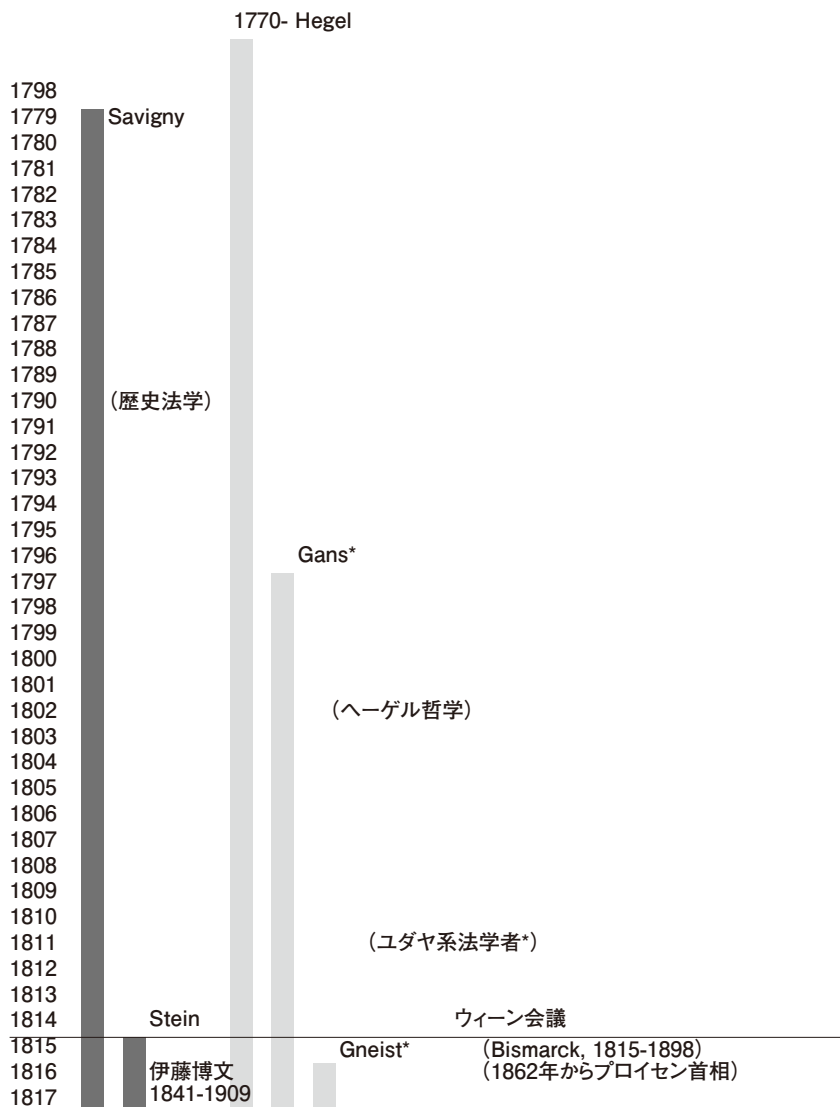
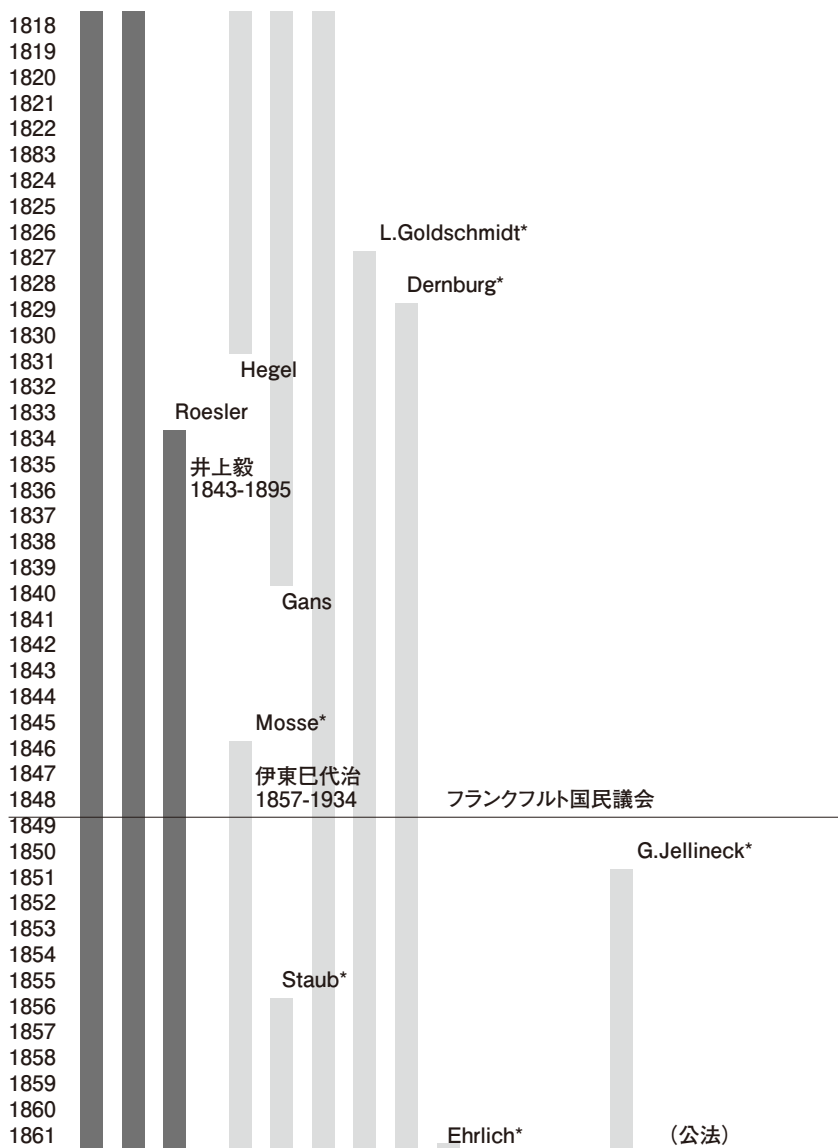
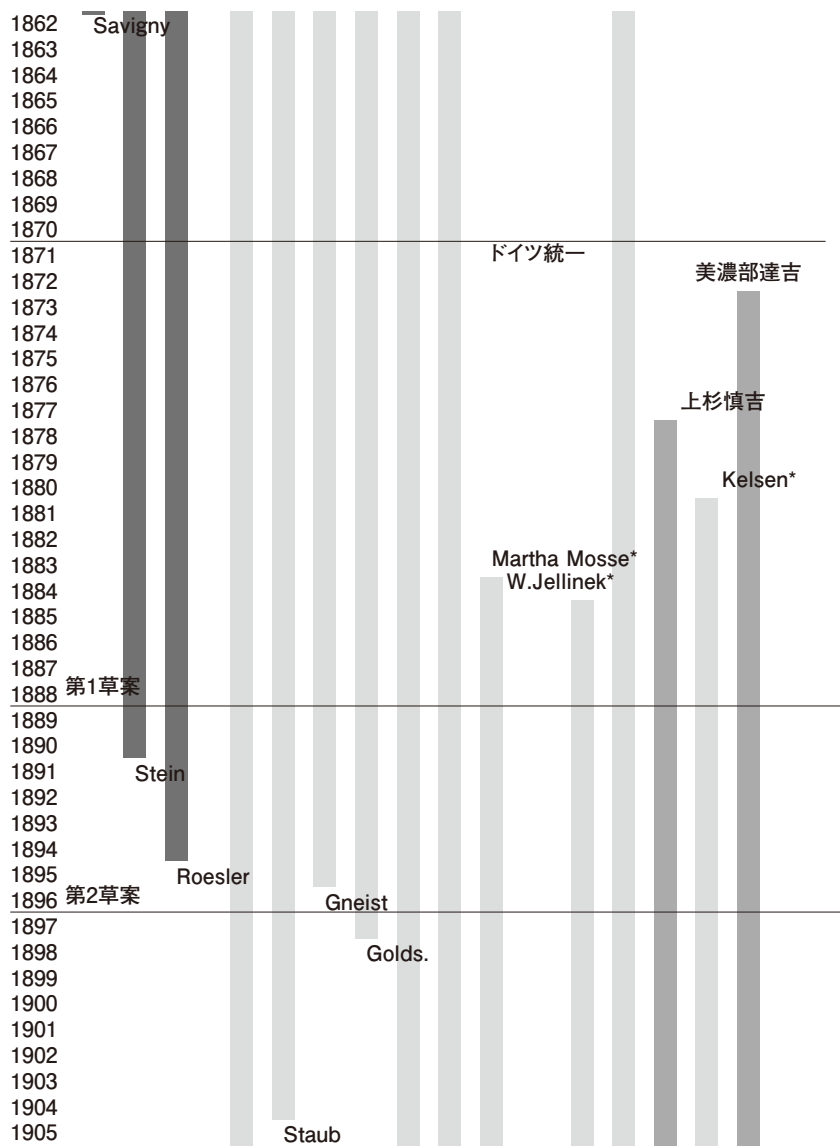
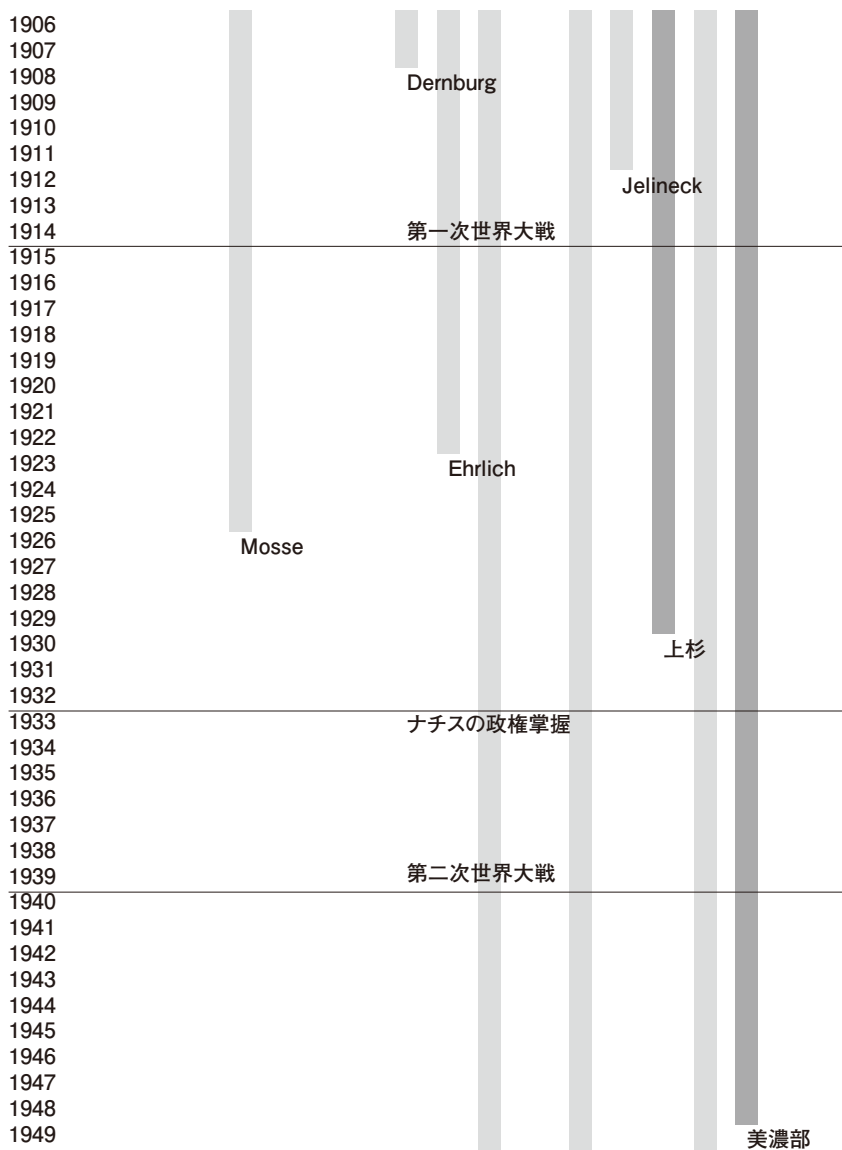


図2 法律家の比較









1950
1951
1952
1953
1954
1955
1956
1957
1958
1959
1960
1961
1962
1963
1964
1965
1966
1967
1968
1969
1970
1971
1972
1973
1974
1975
1976
1977
1978
1979

